柏崎市埋蔵文化財調査報告書 第56集

坂　　田

－新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書－

2009

柏崎市教育委員会

坂　　田

－新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書－

2009

柏崎市教育委員会

序

柏崎平野北部に位置する柏崎市西山町坂田地区は、曾地丘陵から流れ出す坂田川を挟んで水田が広がる稲作地帯です。また、西山町地域で最も多くの戸数を誇る大きな集落でもあります。この地区では、多くの遺跡の発掘調査を行い、様々な成果をあげています。弥生時代の大型のヒスイ製勾玉も、この坂田地区内の坪之内遺跡で発見されました。

坂田遺跡は、この地区のほぼ中心に位置し、古くからその存在が知られ、弥生時代から中近世まで、様々な時代の遺物が見つかっています。この遺跡では、平成17年度にほ場整備事業に伴う発掘調査が行われ、大きな成果をあげています。今回の発掘調査は、市道柏崎杉本線の道路改良工事に伴うもので、遺跡の南端にあたる部分を調査しました。調査の結果、平安時代の大きな溝から文字が書かれた墨書土器が多量に出土しました。この他にも、建物跡や井戸跡などが見つかり、平安時代・中世の集落跡の一端を垣間見ることができました。

本調査は、広大な遺跡のほんの一部に過ぎませんが、このような発掘資料の積み重ねが、地域の歴史や文化の解明をしていくために欠かせません。調査の成果を本書により報告することで、郷土に対する興味や愛着がわくことの一助となり、文化財保護に対する認識を深めていただければ、この上ない幸いであります。

最後になりましたが、この度の発掘調査が無事終了できたことは、ひとえに地元坂田地区の皆様と、事業主体であります柏崎市都市整備部のご理解とご協力の賜と思っております。また、調査に参加していただきました作業員の皆様、本事業に格別なるご助力とご配慮を頂いた新潟県教育委員会の各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成21年３月

柏崎市教育委員会

教育長　小 林 和 徳

例　言

1．本報告書は、新潟県柏崎市西山町坂田字瀬戸・蓬田・下沢田地内に所在する坂田遺跡の発掘調査記録である。
2．発掘調査の原因となった事業は、交通通信施設市道柏崎杉本線整備事業であり、柏崎市都市整備部都市整備課の依頼を受け、柏崎市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した。
3．発掘調査は平成20年４月８日から平成20年６月12日まで実施した。整理・報告書作成作業は、柏崎市西山町西山の柏崎市遺跡考古館西山整理室にて、現場作業に引き続き実施した。
4．発掘調査で出土した遺物及び調査の過程で作成した記録類（図面・写真類）は、すべて一括し、柏崎市遺跡考古館で保管・管理している。
5．出土遺物の注記については、坂田遺跡の略号として「SKT」を用い、調査区名、遺構名や層序などを併記した。
6．本報告書は調査担当の中島の指示のもと、調査員の室星が中心となり作成した。本文の執筆は中島・伊藤・室星が下記の通り分担して行い、編集は中島が担当した。なお、第Ⅴ章第１節は柏崎市遺跡考古館品田高志氏とともに、検討を重ねた。

第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅴ章第２節１、３、第３節・写真図版……中島義人
第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章第１節・遺構属性表・遺物観察表・図面図版
……室星尚史
第Ⅴ章第２節２……伊藤啓雄

7．本書掲載の図面類の方位はすべて真北である。磁北は真北から西偏約７度である。
8．発掘調査から本報告書作成に至るまで、事業主体者である柏崎市都市整備部都市整備課及び、地元坂田地区の関係者等から様々なご理解とご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である。

石橋夏樹　垣内光次郎　阪田友子　品田高志　田中亨　鳴海忠夫　二ノ宮吉栄
新潟県教育委員会文化行政課　柏崎市都市整備部都市整備課（五十音順）

調 査 体 制

調査主体　柏崎市教育委員会（教育長　小林和徳）
総　　括　遠山和博（教育総務課長）
管理・庶務　末崎　章（教育総務課埋蔵文化財係長）
調査担当　中島義人（教育総務課埋蔵文化財係主査・学芸員）
調　査　員　室星尚史（教育総務課埋蔵文化財係準職員）
発掘作業員　押見久美子・加藤留美子・斉藤幸次・田中由昭・長谷川孝志・星野夏江
牧修・牧和子・牧由利子・若林敏美
整理作業員　池田文江・稲原真弓・白川智恵・新野直美・西谷良子・西村敦子・森広美
山岸サチ子・山崎和子

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 2
1　遺跡の位置と地理的環境 …… 2
2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　遺跡と遺構 …… 6
1　坂田遺跡の概観と調査区 …… 6
2　調査の経過 …… 6
3　遺構・遺物の検出状況 …… 7
4　遺構各説 …… 8
a．建物跡　b．柵列　c．井戸　d．土坑　e．溝状遺構　f．柱穴

Ⅳ　出土遺物 …… 12
1　遺物の概略 …… 12
2　遺物各説 …… 12

Ⅴ　総　括 …… 17
1　坂田遺跡の平安時代の様相 …… 17
1）坂田遺跡出土古代土器の編年的位置付け …… 17
2）遺構の性格と出土土器の様相 …… 20
3）胎土Ｂ・Ｃ類の土器について …… 20
2　試掘調査と採集遺物から見た坂田遺跡 …… 22
1）坂田遺跡試掘調査の成果 …… 22
a．調査成果の概要　b．試掘調査出土遺物　c．まとめ
2）坂田遺跡（“館屋敷”）採集の遺物 …… 26
a．鳴海忠夫氏採集遺物　b．旧西山町教育委員会保管遺物　c．平成20年度採集遺物　d．まとめ
3　調査成果のまとめ …… 32
1）遺跡の概観 …… 32
2）まとめと今後の課題 …… 32

引用参考文献 …… 33
遺構属性表 …… 34
遺物観察表 …… 36
調査報告書抄録

挿図目次

第１図　柏崎平野の地形分類図と坂田遺跡の位置 …… 2
第２図　坂田遺跡の位置と別山川流域の遺跡（1:75,000） …… 4
第３図　坂田遺跡出土土器組成 …… 18
第４図　坂田遺跡出土無台杯法量分布図 …… 18
第５図　坂田遺跡２区・５区主要遺構出土遺物 …… 19
第６図　坂田遺跡５区ＳＤ158・２区ＳＤ３出土遺物器種別分布図 …… 21
第７図　坂田遺跡試掘調査トレンチ・遺物採集地点配置図 …… 23
第８図　坂田遺跡試掘調査出土遺物 …… 25
第９図　坂田遺跡（“館屋敷”）採集土器・陶磁器 …… 27
第10図　坂田遺跡（“館屋敷”）採集鉄滓 …… 30

表 目 次

第１表　坂田遺跡出土土器数量表 …… 18
第２表　坂田遺跡試掘調査結果一覧表 …… 24
第３表　坂田遺跡試掘調査主要出土遺物・“館屋敷”主要採集遺物一覧表 …… 31

図 版 目 次

図面図版
図版１　坂田遺跡の位置と周辺の地形
図版２　調査区の位置とグリッド配置図
図版３　遺構全体配置図
図版４　遺構全体図１
図版５　遺構全体図２
図版６　遺構全体図３・基本層序
図版７　遺構個別図１
図版８　遺構個別図２
図版９　遺構個別図３
図版10　遺構個別図４
図版11　遺構個別図５
図版12　遺構個別図６
図版13　遺物実測図１
図版14　遺物実測図２
図版15　遺物実測図３
図版16　遺物実測図４
図版17　遺物実測図５

写真図版
図版18　坂田遺跡周辺空中写真
図版19　遺構完掘写真１
　ａ．調査前全景　ｂ．Ｙ８完掘
　ｃ．Ｙ８完堀　ｄ．Ｙ９・10完掘
　ｅ．ＳＤ157完掘　ｆ．Ｙ９・10完掘
　ｇ．Ｘ12・13完掘　ｈ．ＳＤ150～ＳＤ155完掘
図版20　遺構完掘写真２・基本層序
　ａ．Ｘ11・12完掘　ｂ．Ｖ13・14完掘
　ｃ．Ｓ14・Ｔ14地山切土部分　ｄ．Ｓ14完掘
　ｅ．Ｕ14基本層序②　ｆ．Ｖ８基本層序③
　ｇ．Ｗ13基本層序④　ｈ．Ｙ10基本層序⑤
　ｉ．Ｙ８・９基本層序⑥　ｊ．Ｙ８基本層序⑦
図版21　遺構個別写真１
　ａ．ＳＥ93遺物出土状況　ｂ．ＳＥ93Ａ断面
　ｃ．ＳＥ93木材出土状況
　ｄ．ＳＥ93木材出土状況　ｅ．ＳＥ93完掘
　ｆ．ＳＥ93Ｃ断面　ｇ．ＳＥ59断面
　ｈ．ＳＥ59完掘
図版22　遺構個別写真２
　ａ．ＳＥ145断面　ｂ．ＳＥ145完掘
　ｃ．ＳＤ65遺物出土状況　ｄ．ＳＤ65断面
　ｅ．ＳＤ65完掘　ｆ．ＳＫ76断面
　ｇ．ＳＤ65・ＳＫ76完掘　ｈ．ＳＤ158断面
図版23　遺構個別写真３
　ａ．ＳＤ158遺物出土状況
　ｂ．ＳＤ158墨書土器出土状況
　ｃ．ＳＤ158完掘　ｄ．ＳＤ158完掘
　ｅ．ＳＤ85断面　ｆ．ＳＤ85断面
　ｇ．ＳＤ157遺物出土状況　ｈ．ＳＤ157断面
図版24　遺構個別写真４
　ａ．ＳＤ71断面　ｂ．ＳＤ107断面
　ｃ．ＳＤ137断面　ｄ．ＳＤ154・ＳＤ155完掘
　ｅ．ＳＤ139・ＳＤ141・ＳＤ144完掘
　ｆ．ＳＤ139・ＳＤ141・ＳＤ144完掘
　ｇ．ＳＰ54断面　ｈ．ＳＰ87断面
図版25　出土遺物写真１
図版26　出土遺物写真２
図版27　出土遺物写真３
図版28　出土遺物写真４
図版29　出土遺物写真５
図版30　出土遺物写真６

Ⅰ　調査に至る経緯

坂田遺跡は、柏崎市西山町坂田字蓬田・瀬戸・下沢田に所在する。遺跡は、別山川支流の坂田川左岸の河岸段丘上から曾地丘陵西側に伸びる浄土山の裾に至る沖積地にかけて、東西300m、南北780mに広がりを見せる。現況の標高は、24mから27mほどである。

坂田遺跡の存在は古くから知られており、須恵器・土師器・珠洲焼・弥生土器などが採集されていたが、本格的な調査などは行われたことがなかった。鳴海忠夫氏は、坂田集落センターの西側に隣接する畑地の地割と、採集された中世遺物の詳細な検討から、この地に中世の館が存在したものと考察した(鳴海1992)。坂田遺跡で本格的な調査が行われたのは、この地区で県営のほ場整備事業が計画されたことが契機であり、平成16年度から坂田遺跡を始め、周辺の広い範囲で試掘・確認調査を行った。この調査により、部分的にではあるが、坂田遺跡における遺構・遺物の分布を把握することができた。出土した遺物は、古代・中世に属するものが多く、大型の溝や土坑、ピットなどの遺構が検出された。遺跡の範囲は当初想定されたものより南側に広がることも判明した。この調査結果を受けて、一部で記録保存のための発掘調査が行われた（柏崎市教育委員会2007）。

市道柏崎杉本線は、坂田遺跡南辺の浄土山の裾を縫うように走り、坂田地区の東西を結ぶ路線である。沿線には民家が多く建ち並び、児童・生徒の通学路として、また、集会所への往来等にも用いられる重要な生活路線として利用されている。しかし、道幅が狭くカーブがきついことから見通しが悪く、安全確保のための道路改良が強く望まれていた。そこで、過疎地域自立促進計画に基づき、過疎対策事業として道路改良が平成17年度から行われることになった。この改良工事は道路を北側の水田内に拡幅するものであった。この拡幅範囲の一部は、ほ場整備事業に伴う発掘調査区に隣接するもので、遺構の広がりが確認されている。このため、柏崎市教育委員会は工事の担当部署である柏崎市都市整備部都市整備課と遺跡の取り扱いについて協議を行った。この結果、道路拡幅範囲が坂田遺跡に及ぶ部分については、現状保存は困難なため、記録保存のために発掘調査を行うこととなった。調査対象範囲の工事は平成20年度に行う計画のため、発掘調査は平成19年度の後半に行うこととした。しかし、平成19年７月16日に発生した新潟県中越沖地震により、柏崎市教育委員会が手がけていた他の事業の進行に大幅な変更が生じ、発掘調査に着手することができなくなった。そのため、担当課と協議し、当該区間の工事着工前の平成20年度に調査を行うことで了解を得ることができた。

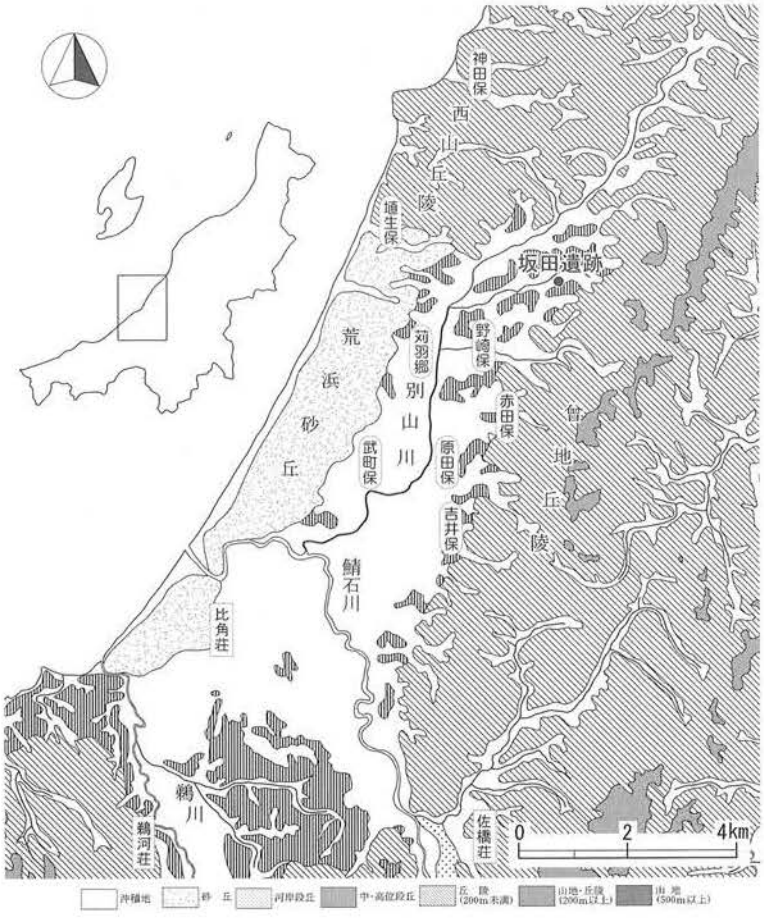
文化財保護法に伴う通知等は、第94条第１項の規定による埋蔵文化財発掘の通知を平成17年11月30日付都第252号で柏崎市長が新潟県教育長へ、第99条の規定による発掘調査に着手する旨の報告を平成20年４月４日付け教総第503号で新潟県教育長に行った。坂田遺跡発掘調査は平成20年４月８日から開始し、平成20年6月12日に現場作業を完了した。整理作業及び報告書作成業務は引き続き行った。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

柏崎平野概観　柏崎平野は新潟県のほぼ中央に位置し、鯖石川と鵜川の主要河川により形成された臨海沖積平野である。平野の周囲は東頸城丘陵の一部に囲まれ、信濃川水系の新潟平野、関川水系の頸城平野とは隔てられる。鯖石川と鵜川は米山・黒姫山・八石山の刈羽三山に源を発し、平野を三分するように西へ流れて日本海に至る。坂田遺跡が所在する柏崎平野北部の沖積地は、別山川沿いに形成される。別山川は柏崎市西山町別山字甲戸の崗蛟沢（おかばにざわ）に源を発して、旧西山町と刈羽村を縦貫するように南西方向に向かって流れて、鯖石川に合流する。別山川の東側は東頸城丘陵に連なる曾地丘陵が、西側には荒浜砂丘に端を発する西山丘陵が並走する。この両丘陵は、褶曲構造が発達し、その背斜軸に沿って吉井・西山・関原などの油田やガス田が形成される。別山川下流域では沖積地が比較的広く形成されるが、上流に近づくにつれて西山丘陵と曾地丘陵の間が狭まり、独立した段丘が数多く形成されることにより、平地は著しく狭くなる。両丘陵には樹枝状の谷が数多く形成される。

坂田地区と坂田遺跡周辺の地形　柏崎市西山町坂田は、別山川の支流の一つである坂田川を挟んで位置する。坂田川は曾地丘陵の地蔵峠付近に源を発し、丘陵裾に樹枝状の狭い開析谷を形成し、西山町五日市地内で別山川に合流する。坂田川の両側には曾地丘陵から伸びる低位丘陵と独立した段丘が点在し、その間を縫うように沖積地と河岸段丘が形成される。坂田遺跡は坂田川左岸の河岸段丘上の字下沢田・瀬戸・蓬田に広がる。遺跡の南側は曾地丘陵から伸びる浄土山と呼ばれる小高い丘に接する。遺跡の現況は水田や畑が大部分であり、一部は東側の宅地に広がる。平成17年度から開始された県営ほ場整備事業に伴い、一部で発掘調査を行った（柏崎市教育委員会ほか2007）。今回の調査地点は遺跡の西南端に位置し、ほ場整備事業に伴う調査における２区に隣接する。



第１図　柏崎平野の地形分類図と坂田遺跡の位置

2　歴史的環境

縄文時代～古墳時代

別山川上流域では、縄文時代前期前葉以降、砂丘上や独立段丘上などで集落遺跡が見つかっているが、沖積地では明確な集落の痕跡は認められない。弥生時代中期以降、別山川流域の沖積地において遺跡が多く分布するようになる。下谷地遺跡を始めとした吉井遺跡群は、別山川下流域の丘陵から離れた沖積地中央部に位置する。弥生時代後期になると丘陵の近くに集落が営まれるようになり、丘陵上に立地する防御的な集落の西谷遺跡等も出現する。

古墳時代では、前期に吉井行塚古墳群が現れるが、後続する古墳は見つかっていない。古墳時代前期の遺跡で集落の状況が把握できる調査事例はないが、刈羽大平遺跡と高塩Ａ遺跡で土器類がまとまって出土している。古墳時代中期の遺跡では礼坊遺跡・戸口遺跡・枯木（Ａ）遺跡・山ノ脇遺跡などがあり、後期の遺跡には戸口遺跡・吉井水上Ⅱ遺跡・畠田遺跡・宮ノ前遺跡・高塩Ｂ遺跡などがある。

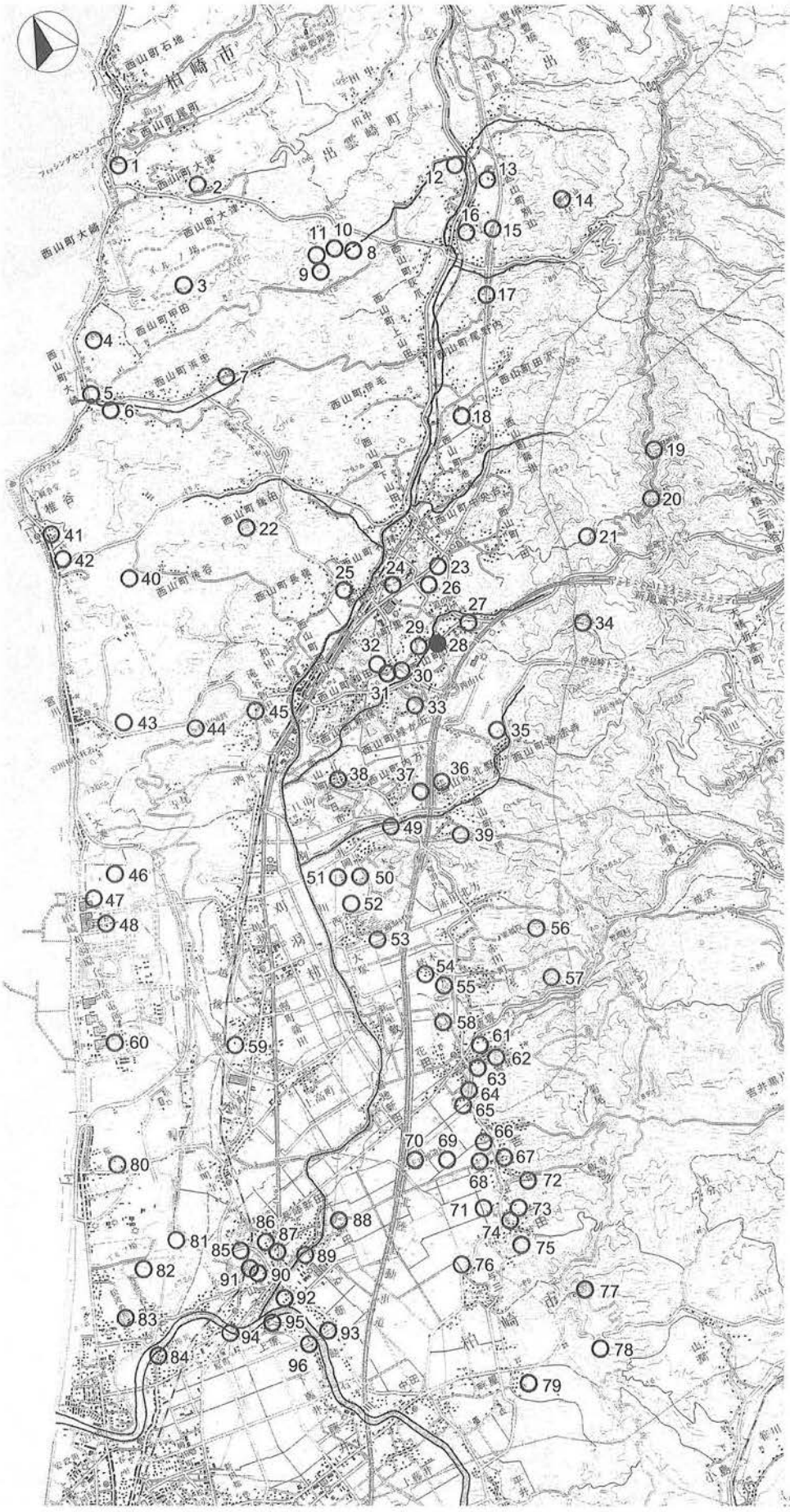
古代

越の国が分割されて越後国が成立するのは、庚寅年籍が作成される持統４年（690）頃であったとされる。成立当初の越後国の領域は阿賀野川以北であり、柏崎平野は越中国に含まれていたと見られる。その後、大宝２年（702）に頸城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡が越後国に編入された。古志郡の成立当時における郡域は明らかでないが、柏崎市、刈羽村、出雲崎町、長岡市等が含まれていたと見られる。郡衙などの政治的な中枢施設は、長岡市（旧三島郡和島村）八幡林遺跡や下ノ西遺跡付近などの発掘調査成果から、島崎川流域に所在していたと想定される。三嶋郡の成立は９世紀前葉頃とされ、古志郡から分割されたものである。三嶋郡の郡域も明らかでないが、別山川と島崎川の分水嶺となる低い丘陵が、郡境の一部であろうと想定され、現在の柏崎市と刈羽村の大部分がこれにあたると考えられる。

承平年間（931～937）に成立した『倭名類聚鈔』により、三嶋郡には「三嶋」「高家」「多岐」の三郷が存在したことがわかる。三嶋郷は鵜川下流域、高家郷は鯖石川中流域と長鳥川流域、多岐郷は別山川上・中流域にあたるという考えが一般的である（金子1990）。延長５年（927）の『延喜式神名帳』には、三嶋郡の御嶋石部神社、物部神社、鵜川神社、多岐神社、三島神社、石井神社の６社が記載される。多岐神社は柏崎市西山町別山の多岐神社に比定され、物部神社は柏崎市西山町二田の二田物部神社であると見られる。御嶋石部神社と石井神社の比定地も西山町内に存在するが、これらには他にも論社がある。『延喜兵部式』に記載される北陸道の駅名では、三島駅・多太駅が三嶋郡内に比定される。これらの所在地も明らかとはなっておらず、諸説があるものの、三島駅は鵜川下流の柏崎市大字堀に、多太駅が柏崎市曾地の多々神社に近い吉井遺跡群周辺を指す考えが主である。古代北陸道は、柏崎平野北部で別山川左岸の曾地丘陵の麓を北上して島崎川流域に至るものと想定されている。

中世

『吾妻鏡』文治２年（1186）３月12日条では、柏崎平野に比定される中世荘園に「佐橋荘」・「宇川荘」　・「比角荘」がある。佐橋荘は鯖石川中流域と長鳥川流域、宇川荘は鵜川流域一帯と鯖石川下流左岸域、比角荘は鵜川下流右岸域から鯖石川下流左岸域に比定される（柏崎市史編さん委員会1990）。中世荘園は柏崎平野の南部を中心に展開しており、柏崎平野北部では存在が知られない。この地域で



	遺跡名	時代
1	高塩B	墳
2	大津	縄・平
3	甲田城跡	中
4	大崎城跡	中
5	長磯(二位殿)	縄
6	二位殿B	縄
7	井ノ町	平
8	宝童寺A	中
9	宝童寺B	中
10	宝童寺C	中
11	宝童寺D	中
12	立村	縄・平
13	尾頃部の館跡	中
14	高内城跡	中
15	内越	墳・平
16	養福地	平
17	尾野内	平
18	ワゴ	平
19	二田城跡	中
20	物見山砦跡	中
21	亀岡城跡	中
22	鎌田城跡	中
23	二田沖	墳
24	木ノ下	平
25	長嶺前田	古
26	扇田	墳・古・中
27	上沢田	平・中
28	坂田	弥・平・中
29	町口	墳・古・中
30	坂田仲沢	弥・墳・古・中
31	マイグリ	墳
32	外前回	平・中
33	坪之内	縄
34	坂田金山城跡	中
35	妙法寺袖浦城跡	中
36	宮ノ前	墳・平
37	畠田	墳・平
38	野崎	縄・墳・平
39	大坪城跡	中
40	後谷木落の製鉄跡	中
41	椎谷陣屋跡	近
42	角城(椎谷城)跡	中
43	榎山B	古
44	滝谷城跡	中
45	城ノ腰	
46	天平(A)	
47	刈羽大平	
48	小丸山	縄
49	上沖	
50	山ノ脇	
51	払川	
52	清水畑	
53	西谷	
54	枯木(A)	
55	刈羽窯跡	古
56	赤田城跡	中
57	赤田古城	中
58	金塚	古・中
59	西浦	
60	青山稲荷西	古
61	北田	中・近
62	杉ノ木田A	不明
63	杉ノ木田B	奈・中
64	吉井行塚古墳群	墳
65	行塚	弥・墳・平・近
66	礼坊	墳
67	吉井水上Ⅱ	墳～中
68	戸口	弥・墳・古・近
69	萱場	弥・墳・古
70	下谷地	縄・弥・墳
71	権田町	縄・墳・平・室・江
72	西草薙	平・中・江
73	吉井砦跡	中
74	本村	中
75	矢田城跡	室
76	江ノ下	墳・平・中
77	山淵城跡	室
78	八方口城跡	室
79	畔屋城跡	室
80	荒浜庚申塚	古?
81	旧荒浜小学校B	古
82	旧荒浜小学校A	古
83	沙鉢山	平
84	開運橋	平
85	西岩野	縄?
86	岩野	縄
87	土合殿屋敷跡	戦
88	下才見	中
89	下境井	墳・平
90	宮ノ浦	平
91	岩野城跡	
92	角田	墳・平・中・江
93	剣下川原	墳～平
94	東原町	平・中・近
95	上原	室
96	境川原	中

第２図　坂田遺跡の位置と別山川流域の遺跡（１：75,000）

は野崎保・神田保・赤田保・原田保・武町保・吉井保・埴入保などの国衙領が点在していたとみられるが、中世にまでさかのぼる史料が残らないものが多い。野崎保は天和３年(1683)「刈羽郡寺尾村検地帳」に記載されており、西山町五日市に野崎の地名が残る。現在まで残る「刈羽」の地名は『明月記』正治元年（1199）９月22日条に「苅羽郷」と記載されるのが初現で、正平12年（1357）の鎌倉二階堂覚音寺領文書では「苅羽郡」と記載されている。中世の文献資料は、柏崎平野南部では多く残されているが、西山町域ではほとんど残されていない。そのため、当地域における支配者層の姿は明らかではない。鎌倉時代以降、刈羽村の赤田古城を中心に赤田氏が所在し、その後、上杉家臣の斎藤氏が赤田城を拠点にしたとされる。西山町と刈羽村の境の大坪城と滝谷城は斎藤氏の城郭とされる（鳴海2006）。

古代・中世の遺跡

別山川流域では古墳時代前期から後期にかけて遺跡数が増加していくが、古代初頭から前期にかけての様子は不明な点が多い。７世紀代の資料は、宮ノ前遺跡、町口遺跡等でわずかに遺物が出土している程度である。８世紀代では、海岸部の井ノ町遺跡や別山川左岸の枯木Ｂ遺跡等で遺物が出土しているが、集落の様相は不明である。当地域では９世紀代に遺跡数が増加していく。当期の遺跡は別山川左岸の丘陵裾部や独立段丘縁辺の沖積地に多く、別山川右岸や海岸部でも遺跡が確認されている。発掘調査が行われた遺跡には、海岸部の井ノ町遺跡、別山川左岸の宮ノ前遺跡、山ノ脇遺跡、枯木Ａ遺跡等がある。井ノ町遺跡は西山丘陵西麓の海岸から深く入り込む谷地に所在する遺跡で、旧河道の縁に大型の柱を持つ掘立柱建物が検出され、大量の遺物が出土した。宮ノ前遺跡は別山川支流の妙法寺川が形成する開析谷に位置し、大型の掘立柱建物と小型の建物が柱筋を揃えて配置され、多量の灰釉陶器が出土した。９世紀後半から10世紀前半の開発領主層の存在が想定される。山ノ脇遺跡からは鴟尾が出土しており、寺院もしくは在地有力者との関連が想定される。枯木Ａ遺跡は、刈羽窯跡に隣接する遺跡である。これらの他にも、坂田遺跡より上流に位置する尾野内遺跡やワゴ遺跡、海岸部の大津遺跡、別山川右岸の長嶺前田遺跡等がある。

中世の遺跡は上沢田遺跡、宮ノ前遺跡、払川遺跡、山ノ脇遺跡などの集落遺跡、内越遺跡・宝童寺遺跡群といった製鉄関連遺跡で発掘調査が行われている。上沢田遺跡では土器・陶磁器類とともに、精錬鍛冶・鍛錬鍛冶に伴う遺物や、刳物の未製品等の手工業関連遺物が多く出土した。鍛冶関連遺物にはスマキ状圧痕が付く羽口も含まれる。宮ノ前遺跡では13世紀代から16世紀代の国産・輸入陶磁器とともに、漆器や碗形鍛冶滓、刳物未製品などが出土した。これに対し、内越遺跡・宝童寺遺跡群では当期の集落跡は見られず、製鉄関連遺構が見つかっている。宝童寺遺跡群では３遺跡で地下式木炭窯や半地下式竪型炉、排滓場が見つかっている。特に宝童寺Ａ遺跡では製鉄に関連したと見られる木炭窯が30基以上存在したと見られる。放射性炭素年代測定の結果、11世紀から13世紀頃に製錬が行われていたものと見られる。奈良・平安時代には、柏崎平野の南部丘陵で製鉄が盛んに行われていたが、中世になると別山川上流域から島崎川流域に製鉄の中心が移っていくようである。別山川流域には中世山城も多く確認される。西山丘陵上には南から岩野城跡・滝谷城跡・後谷城跡・大崎城・甲田城が並び、曾地丘陵上には吉井砦跡・吉井黒川城跡・赤田古城跡・赤田城跡・大坪城・妙法寺袖浦城跡・坂田金山城跡・亀岡城跡・二田城跡・高内城跡等が存在する。

Ⅲ　遺跡と遺構

1　坂田遺跡の概観と調査区

1）坂田遺跡の概観　坂田遺跡は、坂田川左岸の谷底平野に立地する。本遺跡近辺の谷底平野は狭い沖積平野で、緩やかに西へと下り、坂田川左岸の丘陵裾と接している。本遺跡が立地する沖積地（標高約27m前後）は、北側の現坂田集落周辺の微高地とその南側の低地からなる。このことは、更正図からも読み取れ、北側の微高地（字下澤田付近の畑地）は、福蔵院付近で蛇行し段丘裾と接していたと推測される。また、遺跡南側の低地（字蓬田、瀬戸付近の水田）では、更正図の地割が北西方向に連なるが、これは現在の背後の尾根筋を反映したものと推測でき、現地形で段丘裾の微高地と谷を交互に形成する。坂田遺跡は、このような沖積地東西の微高地や低地に広がり、遺跡の南側で段丘裾と接している。

今次調査は、市道柏崎杉本線の改良工事に伴うもので、丘陵裾と開析谷の入り口部分にあたるＳ字に蛇行した地点に当たる。平成17年度に行われた調査地点のすぐ南側を調査した。調査の便宜上、平成17年度調査で１～４区の調査に対し、本年度調査区域を５区として、平成17年度調査区の２区南側を調査した。調査地点の現況は、水田である。

2）グリッドの設定　今次調査の面積は、約278㎡であるが、市道改良工事のための調査であったため、幅の狭い長距離の調査区である。直線距離で約100mになる。

前回調査時に、長距離の調査区全てに統一的なグリッド（10m×10m）の座標系を設定した。グリッドは、東西方向に１～45のアラビア数字を、南北方向にＡ～Ｚのアルファベット（大文字）を付し、北西からＡ１・Ａ２・・・と呼称した（大グリッド）。今次調査のグリッドは、前回調査に使用したものと同じグリッドを採用した。今次調査区は、南西側がＺ７グリッド。北東側がＳ15グリッドにあたる。発掘調査では、大グリッドを１～25の小グリッド（２×２m）に区分し、遺物取り上げ等に用いた。なお、大グリッドは、国家座標を基準に設定し、Ｚ７グリッドでＸ＝160.170、Ｙ＝23.880の値を示す。

3）基本層序　坂田遺跡５区では、第Ⅰ～Ⅴ層が確認されている。第Ⅲ層・第Ⅳ層が遺物包含層で、第Ⅴ層が遺構確認面である。第Ⅰ層は、道路路肩に伴う表土である。第Ⅱ層は、水田耕作土で、２層に細分される。第Ⅱａ層は、耕作土の表土で、第Ⅱｂ層は、耕作土の床土である。第Ⅲ層の遺物包含層は、２層に大別できる。第Ⅲａ層はしまりがあり粘性の強い灰色粘土で、第Ⅲｂ層はしまりがあり粘性の強い暗灰色から黒褐色を呈する粘土で、少量の木炭粒を含む。第Ⅳ層は、基本層序③でのみ確認されたもので、灰色を呈する粘土層で、少量の木炭粒を含む層である。第Ⅴ層は、青灰色から緑灰色を呈する粘土層で、一部砂質を呈する。

2　調査の経過

坂田遺跡の発掘調査は、平成20年４月４日に着手し、平成20年６月12日まで調査を行った。発掘に携わった調査員は延べ92人、作業員は延べ369.5人となった。

坂田遺跡５区は調査の便宜上、南西部を５区－１、北東部を５区－４として４区画にわけ調査を実

施した。具体的な区分けは、５区－1が調査区西端からＳＤ65まで、５区－２がＳＤ65からＳＤ101まで、５区－３がＳＤ101からＳＤ133の地山が削平されている地点まで、５区－４は地山が削平されている地点から調査区北端までである。

調査は、埋め戻しの順序を考え、５区－１・５区－４、５区－２・３の順で調査を行った。調査は、それぞれ並行して行った。以下では、区分けした調査区ごとに経過を述べる。

５区－１は、４月４日より着手して、30日まで延べ15日間実施した。４月４日、調査区の設定と資材搬入を行う。８日、表土剥ぎを開始する。10日、現場作業スタッフを動員し、本格的な発掘調査を開始した。15日、遺構確認と検出状況の撮影を行い、午後から遺構発掘を行う。完掘は、土層観察を行い、遺構カードの作成が済んだところから実施した。16～23日まで、遺構発掘を継続し、併せて図面や個別写真等の撮影を行う。22日、完掘撮影を行う。23日から、残っていた図面の作成と基本土層の確認等の記録作業を行う。26日～30日、記録作業が終了し、埋め戻しを行う。

５区－４は、４月15日から着手して、５月13日まで延べ14日間実施した。４月15日、先に表土のみを掘削して、地盤の乾燥を図る。17日、表土剥ぎを本格的に開始する。耕作土の下はすぐに地山になっていて、水田の開墾により地山まで削平されていた。包含層が残っていたのは、北端の延長５ｍほどのみであった。22日、地山が掘削されている範囲が、概ねU14グリッドまでと確認できたため、表土剥ぎを終了する。25日、遺構確認と地山削平の状況を撮影した。遺構発掘と土層確認等の記録作業を行う。５月１日、完掘撮影を行う。９日、記録作業を終了し、埋め戻しを行う。

５区－２・３は、４月16日から着手し、６月11日まで延べ25日実施した。５区－３は、調査区が最も狭くなる地点で、重機の進入ができない所であった。このため、延べ20mほどを、作業員の手作業による表土剥ぎを行った。W13グリッド付近は、調査区脇に電柱が立っているため、電柱の転倒防止のため表土剥ぎは行わず調査から除外した。５月15日、５区－２・３西側の検出状況の撮影を行い、発掘作業を開始する。16日、５区－３北側の検出状況の撮影を行い、発掘作業を開始する。23日、５区－３北側の完掘撮影を行う。撮影後、残っていた図面の作成と土層確認等の記録作業を行い、埋め戻しを行う。６月３日、５区－２の完掘状況の撮影を行う。４日、５区－２の残っていた図面の作成と基本土層の確認等の記録作業を行い、埋め戻しを行う。９日、５区－３西側の完掘状況の撮影を行う。10日、残っていた記録作業を行い、坂田遺跡５区の発掘調査を終了した。12日、発掘に使用した資材の搬出等を行い、調査の全工程を終了した。

３　遺構・遺物の検出状況

坂田遺跡５区で検出した遺構は、総数で163基になる。内訳は、井戸（ＳＥ）３基・土坑（ＳＫ）２基・溝状遺構（ＳＤ）28基・柱穴（ＳＰ）101基である。他は発掘した結果、凹みや撹乱、欠番になったものが29基ある。柱穴101基のうち、根固めと柱痕が明確に確認できたものは、20基である。これらの遺構は全て、基本土層第Ｖ層上面から検出した。

調査地点が２区と接していることから、遺構の配置や遺物の出土状況は、概ね２区の調査と同じ様相を示す。柱穴は、本来配列を持った掘立柱建物跡を構成したと考えられる。５区西側に集中的に検出され、東側での検出は少数である。溝状遺構（ＳＤ）は、ＳＤ158から東側で特に多く検出している。５区中央は、溝状遺構と井戸が主体で、柱穴は少数である。５区北東のU14グリッド付近から北側は、東側から伸びる尾根の先端にあたり、水田と道路の開発によって地山まで削平されている。溝とピッ

ト各１基を確認したのみで、ほとんどの遺構が削平されたと考えられる。

なお、遺構・遺物の記述で前回の発掘調査区である２区と併せて記述を行うに際して、前回調査の遺構番号及び遺物番号の前に２区を付し、５区に関する記述では特に明示しないこととする。

４　遺構各説

ａ．建物跡

想定した建物跡は、３棟である。今回の調査区は狭小で、年度の異なる調査区をまたいで確認されたため、平面図上から復元したものである。

ＳＢ１（Ｐ１:２区ＳＰ24・Ｐ２:ＳＰ47・Ｐ３:ＳＰ52・Ｐ４:ＳＰ60・Ｐ５:２区ＳＰ29）

Ｙ８・９グリッドで検出した。想定した柱穴は７本で、このうち５本が確認できた。さらに２区の北側へ延長するものと考える。２区と５区の調査区境に、１本ずつ柱穴を持つ可能性がある。桁行3.3m、梁行3.8mの２×２間で、面積は約12.54㎡である。主軸の方向は、西偏23°である。覆土は、Ｐ２・３は暗褐色粘土、Ｐ４は暗青灰色粘土である。深さは、確認面より35cmから40cmで、底面の標高は23.3m前後である。柱痕は確認できなかった。

ＳＢ２（Ｐ１:ＳＰ94・Ｐ２:ＳＰ96・Ｐ３:ＳＰ100・Ｐ４:ＳＰ102）

Ｘ11グリッドで検出した。想定した柱穴は４本で、５区の北側にさらに延長する。しかし、２区に該当する柱穴が無いことから、調査区境で完結すると考えられる。桁行0.9m、梁行2.3mの１×２間で、面積は約2.07㎡である。主軸は、東偏９°である。覆土は、Ｐ１・４は灰黄褐色粘土、Ｐ２は暗灰色粘土、Ｐ３は暗青灰色粘土である。深さは、概ね25cmから30cmで、底面の標高は23.5m前後である。柱痕は確認できなかった。Ｐ３がＳＤ99・101を切るため、ＳＤ99・101よりＳＢ２が新しい。

ＳＢ３（Ｐ１:２区Ｐ42・Ｐ２:２区Ｐ73・Ｐ３:２区Ｐ１・Ｐ４:ＳＰ90）

Ｘ・Ｙ10グリッドで検出した。想定した柱穴は10本で、このうち４本が確認できた。桁行5.1m、梁行3.8mの２×３間で、面積は約19.38㎡である。主軸の方向は、東偏80°である。覆土は、Ｐ４が暗褐色粘土で、他は不明である。深さは15cmから20cmで底面の標高は23.5m前後である。柱痕は確認できなかった。Ｐ２が、２区ＳＤ２を切ることから、２区ＳＤ２とＳＤ85より、ＳＢ３が新しい。Ｐ４から須恵器と土師器の細片が出土した。

ｂ．柵列

ＳＡ１（Ｐ１:ＳＰ120・Ｐ２:ＳＰ117・Ｐ３:ＳＰ112・Ｐ４:ＳＰ111・Ｐ５:ＳＰ134）

Ｖ10グリッドで検出した。想定した柱穴は５本である。長さ5.4mで、主軸の方向は東偏27°である。南西側に延長する可能性がある。覆土は、Ｐ２が灰褐色粘土で、それ以外は褐灰色粘土である。深さは10～22cmで、一定ではないが、底面の標高は概ね23.7mである。Ｐ１から須恵器杯蓋（№１）が出土した。

ｃ．井　戸（ＳＥ）

ＳＥ93　Ｙ10グリッドで検出した。遺構の平面形は上端で南北2.8m×東西2.4mの楕円形を呈し、下端では南北1.9m×東西1.6mの楕円形を呈す。遺構上端の西側は、深さ３～５cmほどの浅いテラス状に平坦面が広がる。

覆土は、大きく３層に分かれる。上半は黒色土層が堆積し、下半は緑灰色土層が厚く堆積する。最下層には黒褐色土層が薄く広がる。上層の黒色土（第１～４層）は、腐植物と緑灰色粘土の小ブロックを含む。下層の緑灰色土（第５層～）は、地山に由来すると見られる粘土が主体となり、上層と同質の黒色土のブロックを少量含む。一部に緑灰色砂を含む。最下層の黒褐色土層の堆積は厚さ５cmほどと薄く、腐植物を多く含み、緑灰色粘土が混ざる。

遺物は、上層の黒色土と下層の緑灰色土の境から須恵器・土師器共に多く出土した。№３は下層の緑灰色土層から出土した。須恵器は有台杯・無台杯・長頸瓶・甕、土師器は無台碗・鍋が出土した。須恵器無台杯の1点と土師器無台碗１点に墨書が施される。最下層の黒褐色土と下層の緑灰色土下部の最下層に近い部分から、用途不明の板状や棒状の木製品（№21～25）が折り重るような状態で出土した。

完掘した底面付近の壁面に、加工痕のある棒状の木が５cmほど飛び出るように刺さっているものを検出した。この棒状の木が井戸の構築に関係するものかを確認するために、断ち割りを行った。その結果、枝などの自然木を多く包含する土層が水平方向に続くことが確認され、刺さっていた木も奥で二股に分かれていることから自然木であると判断した。このため、井戸を掘削する時に地中から出てきた自然木を切り落としたものと考える。

ＳＥ59　Ｙ９グリッドで検出した。平面の形状は、南北1.3m×東西1.1mの楕円形で、深さは1.2mである。覆土は、第１層は褐灰色粘土で、第２層から第４層まで暗灰色粘土である。全体的に、しまりが強く、木炭粒を含む。

遺物は、須恵器の壷類と見られる体部の細片と、摩滅した土師器の細片が出土した。

ＳＥ145　Ｘ12グリッドの調査区中央の最も狭い地点で検出した。南北両側の上端は、調査区外に続いている。検出された範囲では直径1.6mの円形を呈すると見られる。深さは1.8mである。覆土は概ね２層に分かれ、第２層が黒褐色粘土である以外は概ね黒色粘土である。質感は、全体的にしまりが弱く、粘性が非常に強い。地山土の粒と腐植物を多く含む。

遺物は、須恵器の有台杯と長頸瓶、土師器の柱状高台皿底部、白磁皿（№26～28）等の土器類と板状・摘み状・円盤状の木製品が出土した（№30～34）。第２層から出土した須恵器長頸瓶の他は、第５層から出土した。

ｄ．土　坑（ＳＫ）

５区で検出されている土坑は、ＳＫ76・106の２基である。

ＳＫ76・ＳＤ75　Ｙ９グリッドで検出した。南側は調査区外に続いている。平面の形状は、ほぼ直径約1.6mの円形を呈し、深さは約0.4mである。ＳＫ76の覆土は、第１層が黒色粘土、第２層が黒褐色粘土、第３層が暗緑灰色粘土である。全体的にしまりが強く、粘性が強い。

遺物は、第２層から多く出土しており、須恵器の無台杯と甕、土師器の鍋と長甕がある(№35～40)。ＳＤ75は、幅21cm、長さ55cm、深さ５cmの浅く三日月状に曲がる溝で、南端でＳＫ76と切り合いを持つ。覆土は、暗褐色粘土である。撹乱の可能性がある。須恵器無台杯（№41）が出土した。

ＳＫ106　Ｗ13グリッドで検出した。幅60cm、深度18cmを測り、平面円形の浅い土坑である。覆土は、暗褐灰色粘土である。須恵器無台杯が（№41）出土した。

ｅ．溝状遺構（ＳＤ）

ＳＤ65・ＳＰ66・ＳＰ67　Ｙ11グリッドで検出した。ＳＤ65は、幅88cm、深さは最大で20cmの溝であ

る。北側の調査区壁へ向かって徐々に浅くなり、２区への延長は認められない。南側は、調査区外に延びる。ＳＰ66・67は、直径約30cm、深さ約15cmのピットである。ＳＤ66の覆土は、灰色から暗赤灰色粘土である。ＳＰ66の覆土は暗赤灰色粘土、ＳＰ67の覆土は黒褐色粘土である。遺構の切り合いから、ＳＤ65が古くＳＰ66が新しい。ＳＰ67は、覆土が黒褐色粘土で、ＳＤ65とは異なる様相を示していることから、ＳＰ66・67はＳＤ65に伴うものでは無いと考えられる。

ＳＤ65東側の立ち上がりから、須恵器有台杯(No.43)と土師器長甕（No.44）が出土した。ＳＰ66からは、須恵器有台杯（No.45）が出土した。

ＳＤ158　Ｙ11グリッドで検出した。幅3.4mで、壁面の立ち上がりに段をもつ溝である。２区ＳＤ３からつながる遺構で、延長4.3mが確認され、さらに北側へ続くものである。南側は、５区調査区南壁付近で深さ５cm前後と浅くなっており、遺構の南端に近いと見られる。５区北側の調査区付近で深さ約45cmとなり、その南側は一段浅い平坦面が南へ続く。ＳＥ93・ＳＰ159に切られる。覆土は、暗緑灰色から緑灰色の粘土である。５区調査区北側壁では、土層観察から、２区ＳＤ３と同様、青灰色から暗青灰色粘土である。

遺物は、No.59以外は、北側の落ち込みから出土しており、須恵器の有台杯（No.46）と無台杯(No.47～59)、土師器の無台碗（No.60）と小甕（No.61）がある。須恵器無台杯には、墨書が施されているものがある。

ＳＤ85・ＳＤ92・ＳＤ157　Ｙ10グリッドで検出した。ＳＤ85は、２区ＳＤ２とＳＤ92に繋がり、２区と５区の境付近で東側に大きく広がる。幅は、ＳＤ85で1.1m、２区ＳＤ２とＳＤ92部分で、3.0mほどになる。確認された延長は6.3mで、南北方向にさらに伸びるものである。覆土は、上層が黒褐色粘土で、下層が暗緑灰色粘土である。包含層の上面から掘り込まれており、新しい時代のものの可能性がある。須恵器と土師器の細片が出土している。

ＳＤ157は、幅3.4m、深さ36cmで、南北に伸びる。覆土は、オリーブ黒色を呈する粘土で、緑灰色地山土の粒と木炭粒を含む。遺物は、遺構中央から多く出土した。須恵器には杯蓋と無台杯（No.62～66）があり、無台杯の底部外面には判読不明の墨書が書かれる（No.66）。土師器は、無台碗（No.67）と器種不明の細片がある。

ＳＤ157がＳＤ85・92に切られる。周辺のピット類は、ＳＤ157を切る。

ＳＤ99・ＳＤ101・ＳＤ103・ＳＤ160　Ｘ11グリッドで検出した。ＳＤ99とＳＤ101は概ね直交する。覆土は、ＳＤ101のみ暗褐色粘土で、他は暗青灰色土である。Ｐ100・102はＳＢ２のＰ３・４にあたる遺構である。ＳＤ99・101は、ＳＢ２柱穴のＳＰ100に切られる。

ＳＤ101から、須恵器無台杯（No.70）が出土した。

ＳＤ71　Ｔ14グリッドで検出した。幅71cm、深さ６cmの浅い溝である。５区北端から検出した遺構で、周辺にはＳＰ72以外は遺構は見られない。Ｕ14から北側の旧地形は、東側から伸びる尾根先端に当たる微高地であったと見られ、開墾により地山まで掘削されたため、本遺構も上部が削平されていると考えられる。

ＳＤ107・ＳＤ137・ＳＰ108・ＳＰ109　Ｖ13グリッドで検出した。南北方向に主軸をもつ延長の長い溝である。ＳＤ107は、幅約30cm、深さ約10cmの浅い溝である。ＳＤ137は、幅約40cm、深さ約15cmである。いずれも底面は凹凸が無く平坦である。ＳＤ137が、ＳＤ107に切られ、ＳＤ107は、ＳＰ108に切られる。

２区ＳＤ18は遺構の幅が異なるが、同様の主軸を持つ遺構である。これら３基の溝は、東側の微高

地から、畝状遺構群のある中央低地に向けて緩やかに傾斜している。

ＳＤ107から、須恵器甕（№71）と土師器の細片が出土した。

ＳＤ139・ＳＤ141・ＳＤ144　Ｘ12グリッドで検出した。覆土は、ＳＤ139は暗緑灰色土で、ＳＤ141は灰色から黄灰色土である。これら２基の溝は、主軸の方向から、２区ＳＤ４の延長上に位置するが、覆土の様相が異なることから、別の遺構と考える。ＳＤ144は、包含層の上部から掘り込まれる。

ＳＤ141から須恵器の杯蓋（№72）と無台杯の底部の細片が、各１点ずつ出土した。

ＳＤ147　Ｘ12グリッドで検出した。覆土は、灰色粘土である。第Ｖ層の上面で検出したが、調査区壁の観察から第Ⅲｂ層包含層の中間から遺構の落ち込みが確認され、他の遺構より新しいものと考えられる。遺物は出土していない。ＳＤ147がＳＰ148に切られる。

ＳＤ150・ＳＤ151・ＳＤ152・ＳＤ154・ＳＤ155　Ｗ12・13グリッドで検出した。深度の浅い溝状の遺構である。ＳＤ154の底面は凹凸が顕著なこと、いずれも主軸が概ね並行することなどから、畝状遺構と考える。覆土は、ＳＤ150・152・154・155が青灰色から緑灰色を主体とし、ＳＤ151が灰色とオリーブ黒色を主体とする。

ＳＤ150・154から土師器の細片が各一点、ＳＤ155から須恵器無台杯（№73）が出土した。

ＳＤ105　Ｗ13グリッドで検出した。幅40cm、深さ12cmの浅い溝状の遺構である。ＳＤ155との間が、未調査で不明な点もあるが、ＳＤ150を始めとした５本の溝群と同様の主軸で、形態及び規模が類似することから、畝状遺構であると考える。遺物は出土しなかった。

ｆ．柱　穴（ＳＰ）

柱穴に分類した遺構は、全部で101基である。このうち、根固めと柱痕が明確に確認できたものは、20基である。多くは掘立柱建物を形成した柱穴だろうが、建物構成が確認できないものが多い。

覆土は黒色土を主体とするものが多い。他に暗青灰色土を主体にするもの（ＳＰ29・ＳＰ136など）や、灰色土を主体とするもの（ＳＰ15・ＳＰ86など）がある。

ＳＰ54　Ｙ９グリッドで検出した。南側半分は調査区外に広がり、ほぼ円形の平面形が想定できる。直径58cm、深さ46cmである。柱痕は、黒褐色粘土で、根固は緑灰色ブロックを含む黒褐色粘土である。遺物は出土しなかった。

ＳＰ87　Ｙ10グリッドで検出した。直径36cm、深さ22cmである。黒褐色粘土の柱痕と、根固は２層に分かれ黒褐色土と緑灰色粘土である。須恵器甕の体部破片（№74）が出土した。

ＳＰ15　Ｙ７グリッドで検出した。直径31cm、深さ５cmである。覆土は、灰黄色粘土である。須恵器杯蓋（№75）と土師器の細片が出土した。

ＳＰ88　Ｙ10グリッドで検出した。直径20cm、深さ29cmである。覆土は、暗褐色粘土である。須恵器甕（№76）が出土した。

ＳＰ80・81　Ｙ9・10グリッドで検出した。ＳＤ157を切る。ＳＰ80は、直径37cm、深さ40cmと深いものである。ＳＰ81は、長さ16cm、深さ10cmである。覆土は、ＳＰ80が黒褐色粘土、ＳＰ81　が褐灰色粘土である。

ＳＰ80から土師器の細片が出土し、ＳＰ81から須恵器の無台杯（№77）と土師器の細片が出土した。

Ⅳ 出土遺物

1 遺物の概略

坂田遺跡５区では、遺構覆土や包含層から多量に出土した。土器類では、平安時代の須恵器・土師器が多く、中世の遺物も出土している。耕作土や周辺からの表採遺物には、近世の肥前焼と考えられるものが少数ある。この他に、木製品や鉄製品、製鉄に関連する遺物も出土している。

遺構覆土から出土した土器は、器形復元が可能なものは、できる限り図化に努めた。

平安時代の須恵器には、食膳具と貯蔵具がある。食膳具は、杯蓋・有台杯・無台杯の３種類である。貯蔵具は、甕と長頸瓶の２種類である。このうち、杯蓋・甕・長頸瓶は、個体数が少なく、全形が復元できるものは見られない。

須恵器無台杯は胎土の観察から、４種類に分類した。最も多かったのがＡ類(小泊)としたものである。非常に細粒の白色粒が特徴で、透明粒子と海綿骨針を含むものである。これらのうちの多くは佐渡小泊窯跡群で焼成されたものと考えられ、無台杯全体の19点44.1％を占める。Ｂ類(産地Ａ)は、胎土に白色粒子と褐色粒子と骨針を含み、Ａ類と比べるとやや粗い胎土である。器面は丁寧に仕上げられ、ロクロナデによる凹凸はほとんど見られず、底部の切り離し痕も丁寧になで消される。法量は、口径13.3前後、底径7.6cm前後、器高3.9cm前後で概ね一定する。焼成は硬質だが、還元が不十分で底部は酸化状態である。口縁部に重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。全体の８点18.6％を占める。Ｃ類(産地Ｂ)は、１mm前後のやや大きい白色粒と黒色粒が含まれるのが特徴で、焼成は不良で軟質である。底部のみの破片資料で、全形がわかる資料はない。２点4.6％である。Ｄ類は上述した以外のものである。14点32.6％である。

土師器は、食膳具と煮炊具がある。食膳具は、無台碗があり、煮炊具では小甕・長甕・鍋がある。

中世の遺物で、遺構から出土したものは、土師器皿の柱状高台と白磁皿である。他に、包含層から珠洲焼が出土している。

近世以降の遺物は、包含層から出土した肥前焼がある。

2 遺物各節

建物跡・柵列出土遺物（No.１）

復元できた建物跡を構成する柱穴で、遺物が出土したものはＳＢ３Ｐ３（２区ＳＰ1）のみである。２区調査の報告でされている遺物で、口径13.6cmの有台杯の口縁から体部の破片である。柵列の柱穴で遺物が出土したものは、ＳＡ１Ｐ１（５区Ｐ120）からのみである。１は、須恵器杯蓋の体部破片である。内外面にロクロナデを行った後、外面天井部にロクロケズリを行う。

ＳＥ93（No.２～25）

３と８と21～25以外は、上層の黒色土層の下部、下層緑灰色土との境付近から出土した。３は、下層の緑灰色土から出土した。８と21～25は、最下層の黒褐色粘土層との境付近、下層の緑灰色粘土層の下部から出土した。

２は、須恵器有台杯の口縁部から体部である。口径12.8cmで、体部は直線的に立ち上がり、内外面はロクロナデによる凹凸が顕著である。

３～10は、須恵器無台杯である。全て内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りを行う。３は、口径11.6cmで、口縁が外反する。７は、口径が13.4cmとやや大きく、直線的に伸びる。４・５・10は胎土Ａ類、９は胎土Ｂ類である。３・６～８は胎土Ｄ類である。

11～13は、土師器無台碗である。11・12の器表は剥離しており、調整は不明である。11の口縁部はロクロナデを行う。13は、口径15.6cm、底径6.2cm、器高5.6cmと大型である。内面ロクロナデ、外面下半部はロクロケズリを行う。底部外面は丁寧なナデを行い平坦である。

10・13の底部外面に、墨書が書かれる。10は、摩滅しており不明瞭であるが、書体から「猿□」と考えられる。13は、判読不明である。

14・15は、須恵器長頸瓶である。14は、体部から底部が残り、包含層から出土したものと接合した。内外面ロクロナデを行い、内面はロクロの凹凸が顕著に残る。底部内面は、あばた状の凹凸が著しい。肩部外面は、降灰を受け自然釉が薄くかかる。15は、口縁部の破片で内外面ロクロナデを行う。口縁端部は、外端を外側につまみ出す。

16から18は、須恵器甕である。16・17は、外面の叩き目は平行で、内面の当て具痕は同心円である。18は、上半と下半が接合しないものの、胎土と調整から同一個体と判断した。口径34cm、残存高は40.3cmである。口縁部から頸部は、ロクロナデの凹凸が顕著である。体部外面の叩き目は擬格子で、内面の当て具痕は上半部が同心円で、下半部は擬格子である。体部外面には平行タタキの後に、輪積み痕を消すためのナデが部分的に行われる。体部の所々で大きく焼膨れをおこしている。

19・20は土師器鍋である。19は、口径42cm、残存高13.2cmである。口縁部はロクロナデにより外反し、端部は丸く収める。体部の調整は、外面は格子タタキ、内面は同心円当て具を行う。体部外面に煤が付着する。20は、内外面にロクロナデを行う。口縁端部は外反して丸く収める。

21～25は、板状もしくは棒状の木製品である。木材を割った分割材と考えられる。木取りは、22のみ芯持ちで、他全ては芯去りである。上下に切断面を残す。

ＳＥ145（№26～34）

29のみ、第２層の黒褐色粘土から出土し、他は第５層の黒色粘土層から出土した。

26は、土師器皿の柱状高台である。底径は5.8cmである。内外面はロクロナデ、底部は回転糸切りを行う。外面は、変色し黒色を呈する。

27は、白磁の有台皿である。口縁部と底部は接合しないが同一個体と見られる。口径12.0cm、底径5.8cm、器高3.6cmである。内面と外面高台付近まで施釉される。高台は、逆台形状にケズリダシを行い、内端接地である。

28は、須恵器有台杯の底部である。体部外面はロクロナデ、底部内面は不定方向ナデ、底部外面はヘラ切りした後に不定方向のナデを行う。高台は、やや内側に付き、内端接地である。高台径は8.2cmである。

29は、須恵器長頸瓶の肩部である。内外面ロクロナデを行う。内面はロクロナデによる凹凸が顕著である。

30～32は、板状木製品である。裏面と側面はほぼ平坦であるが、表面のみに、鉋状工具で削ったような深さ１mmにも満たない浅い凹みが不規則に並ぶ。33は、摘み状木製品である。両側面に凹みを

持つ。34は、円盤状木製品である。幅31.6cm、厚さ2.8cmである。厚さは、端部が１cmで、中央が2.8cmと、中央が厚く上面に膨らむ。裏面はほぼ平坦で、被熱のため炭化している。表面は、鑿状工具で削ったような加工痕が残る。中央に、一辺1.2cmの方形の穿孔がされる。

ＳＫ76（№35～40）

35～38は、須恵器無台杯である。37以外は、胎土Ａ類である。37は、内外面にロクロナデを行い、外面はロクロナデによる凹凸が顕著である。口縁端部がやや外反する。

39は、土師器鍋の体部である。にぶい橙色を呈し、外面は平行叩き、内面はヨコナデを行う。

40は、土師器長甕の底部である。調整は磨耗していて不明である。底径は9.0cmで、体部外面は変色し、黒褐色を呈する。

ＳＤ75（№41）

41は、須恵器無台杯である。口径13.2cmで、内外面ロクロナデを行う。体部から口縁端部まで直線的に立ち上がる。

ＳＫ106（№42）

42は、須恵器無台杯である。口径13.0cmで、内外面ロクロナデを行う。口縁部はやや内傾し、口縁端部を丸く収める。

ＳＤ65（№3・44）

43は、須恵器有台杯である。口径10.2cm、底径5.8cm、器高5.1cmで全形の2/3ほどが残る。有台杯で、器形が完形に復元できたものは43のみである。内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りを行う。高台は、外端接地である。

44は、土師器長甕の底部である。底径9.4cmで、体部内面ロクロナデ、体部外面の調整は劣化のため不明である。底部は回転糸切りを行う。底部は、厚さ２mmと薄い。

ＳＰ66（№45）

45は、須恵器有台杯である。口径12.5cmで、体部はほぼ直線的に立ち上がる。内外面はロクロナデを行い、凹凸が顕著である。

ＳＤ158（№6～61）

59以外は、すべて北側の落ち込みから出土した。

46は須恵器有台杯である。口径13.0cmで、直線的に体部が立ち上がり、口縁端部は外反気味である。

47～59は、須恵器無台杯である。全て、内外面ロクロナデ、底部ヘラ切りである。48・49・53・59は胎土Ａ類、52・54～58が胎土Ｂ類、51が胎土Ｃ類と考えられる。その他は不明である。当遺構から出土した無台杯のうち、半数に墨書が施される。墨書は、53・56が「猿□」、54・55が「主」ヵ、57は判読不明、58が「田」ヵが書かれる。

60は土師器碗である。底部のみの破片で、劣化が激しく調整がほとんど残っていないため詳細は不明である。底径は、5.6cmである。

61は土師器小甕である。口径10.9cm、底径5.6cm、器高8.6cmで全形の2/3ほど残る。劣化が激しく調整が不明な点もあるが、内外面ロクロナデで、口縁部は屈曲して垂直に引き伸ばす。底部内面はロクロナデの凹凸が顕著である。底部外面は摩滅していて調整は不明である。外面の口縁から体部までは、変色し暗褐色である。

ＳＤ157（No.62～67）

62・63は須恵器杯蓋である。62は、体部のみの破片である。内外面にロクロナデを行う。63の口径は14.2cmである。内外面ロクロナデで、口縁端部が屈曲してほぼ垂直に下がる。

64～66は、須恵器無台杯である。64は、口径12.2cm、底径7.2cm、器高3.6cmである。口縁部が外反し、内面のロクロナデは凹凸が顕著である。体部は、直線的に立ち上がり、底部外面はややくぼむ。65は、底径7.5cmの底部のみの破片である。66の底部には、墨書が施されているが、判読はできない。66が胎土Ａ類、他は不明である。

67は土師器無台碗である。劣化が激しいが、内外面はロクロナデ、底部は回転糸切りを行う。

ＳＰ83（No.68・69）

68は須恵器有台杯である。口径14.5cmで、内外面はロクロナデを行い凹凸が顕著である。体部は直線的に立ち上がる。

69は須恵器無台杯である。底径8.4cmで、劣化のためロクロナデ調整はほとんど残っていない。底部はヘラ切りを行う。胎土Ｃ類である。

ＳＤ101（No.70）

70は須恵器無台杯である。口径13.2cm、底径9.0cm、器高3.5cmである。内外面はロクロナデで、底部はヘラ切りを行う。体部の立ち上がりは急である。

ＳＤ107（No.71）

71は須恵器甕である。内面は格子当て具で、外面の調整は、降灰を受けて調整は不明である。

ＳＤ141（No.72）

72は須恵器杯蓋である。体部のみの破片だが、摘みの付け根が一部残る。内外面はロクロナデで、天井部外面はロクロケズリを行う。天井部外面のケズリは丁寧で、ほぼ平坦である。

ＳＤ155（No.73）

73は、須恵器無台杯である。底部はヘラ切りを行い、底径は7.8cmである。胎土Ｂ類である

ＳＰ87（No.74）

74は須恵器甕である。外面は擬格子タタキ、内面はロクロナデの後にタテハケを行う。

ＳＰ15（No.75）

75は須恵器杯蓋である。内外面ロクロナデ、天井部外面にはロクロケズリを行う。

ＳＰ88（No.76）

76は須恵器甕である。外面は擬格子タタキ、内面はロクロナデの後タテハケを行う。内面は還元色を呈するのに対し、外面は酸化色を呈する。74と76は、調整と胎土から同一個体の可能性がある。

ＳＰ81（No.77）

77は、須恵器無台杯である。口径12.8cmで、内外面はロクロナデを行う。体部は直線的に立ち上がる。

包含層出土遺物（No.78～114）

78～80は須恵器杯蓋である。78・79は、内面にロクロナデ、天井部外部にロクロケズリを行う。80は、口径15.0cmで、口縁端部が内側に屈曲し、端部を丸く収める。

81～84は須恵器有台杯である。81は、高台径は7.9cmである。高台の高さは1.5cmを測り、他の有台杯よりやや高く、外端接地である。83は、高台が欠損している破片である。内面はロクロナデ、底部はヘラ切りを行う。還元が不十分でにぶい褐色を呈する。

85～95は、須恵器無台杯である。92・93・95以外は、全て胎土Ａ類である。93は底部と体部の境に明瞭な段ができる。94は、口径12.0cm、底径7.8cm、器高2.5cmである。内外面はロクロナデで、外面はロクロナデの凹凸が顕著である。底部外面はヘラ切りを行い、「禾」ヵの墨書が書かれている。95は、底径7.0cmで、底部はヘラ切りを行う。底部外面に、「猿□」の墨書が書かれるが、軟質のため、器面が磨耗していて墨書の遺存状態は悪い。

96～98は、土師器無台碗である。97は、口径14.2cm、底径6.2cm、器高3.8cmである。外面はロクロナデの凹凸が顕著で、内面は劣化のためロクロナデはほとんど残っていない。底部は回転糸切りである。

99は須恵器長頸瓶の肩部である。内外面はロクロナデを行う。内面はロクロナデによる凹凸が顕著である。肩部外面に、降灰による自然釉がかかる。

100・101は、須恵器甕の体部である。外面は平行タタキ、内面は同心円当て具である。

102・103は、土師器鍋である。102は、口縁部から頸部の小片で、口縁端部は面を持つ。103は体部である。調整は外面は平行タタキ、内面は同心円当て具である。

104～110は、珠洲焼である。片口鉢の口縁形態から、吉岡氏の編年（吉岡1994）のⅢ期～Ⅳ期と考えられる。

104は、壷類の口縁部と考えられる。口縁端部は、下に屈曲する。

105は、壷類もしくは瓶類の底部である。体部の内外面はロクロナデである。内面のロクロナデの凹凸が顕著である。体部外面は、ロクロナデの後に櫛描きにより施紋される。施紋の下部は、ナデにより消される。底部の切り離しは回転糸切りである。

106～108は、甕もしくは壷類の体部である。外面に平行タタキ、内面に当て具痕が残る。106・108のタタキ目は３cmあたりに11本、107は３cmあたり10本である。

109・110は、片口鉢である。内外面はロクロナデを行う。109の卸し目は、幅1.8cmに14本で1単位である。口縁端部の面は外傾し、口縁部の形態からⅢ期の所産と考える。110の卸し目は、８本以上で１単位となる。口縁端部は、水平な面を持ち先端を突出させる形態で、Ⅳ期と考えられる。

111は肥前系陶器の皿である。口径11.0の小型の皿である。胎土はにぶい褐色を呈し、内面から口縁部外側にかけて灰色の釉薬を施す。

112～113は、鉄関連遺物である。包含層上面から出土しており、時期は不明である。

112は、鎌と見られる。長さ7.9cm、幅2.6cm、重さ17ｇである。上下は欠損する。

113は、用途不明の鍛造製品である。長さ11.6cm、幅1.3cm、重さ28ｇである。下部に直径0.5cmの穿孔がある。上部は欠損する。

114は、鍛冶滓と考えられる。重さ42ｇで、酸化土が少量付着する。メタルの反応はない。

Ⅴ 総　　括

1　坂田遺跡の平安時代の様相

柏崎平野における平安時代の集落跡は、多くの事例が挙げられる。坂田遺跡が所在する別山川流域では、２箇所の区域での遺跡の分布が認められる。刈羽村枯木遺跡や北田遺跡のある赤田・吉井周辺と、刈羽村払川遺跡や西山町宮ノ前遺跡のある刈羽村西谷・西山町北野周辺から坂田・二田地区周辺が挙げられる。西山町周辺は、８世紀後半から10世紀前半にかけて、別山川左岸の沖積地で遺跡の数が増加し柏崎平野北部の中核的な地域となった可能性がある。

１）坂田遺跡出土古代土器の編年的位置付け

坂田遺跡では、平安時代の遺物が溝と井戸からまとまって出土した。これらの一括遺物の編年的位置付けを行うに当たって、定量出土している須恵器無台杯、特に胎土Ａ類とした佐渡小泊産と考えられる遺物を中心に行った。

記述に当たっては、前回の発掘調査区である２区と併せて記述する際、前回調査の遺構・遺物番号の前に、２区を付し、５区に関する遺構の記述では、特に明示しないこととする。また、両調査区を跨いで延長が確認できた２区ＳＤ３と５区ＳＤ158は、ＳＤ158として記述を行うこととする。

坂田遺跡で出土した土器は、食膳具には、杯蓋・有台杯・無台杯・無台碗がある。貯蔵具は長頸瓶・甕、煮炊具は小甕・長甕・鍋・甑が出土している。食膳具では、須恵器食膳具が多く、土師器食膳具は極少量である。

器種構成は、須恵器食膳具を主体に、土師器食膳具・煮炊具・須恵器貯蔵具が一定量伴う構成である。出土土器の総数のうち63.53％が須恵器食膳具で構成され、須恵器無台杯だけで43.65％を占める。この他の器種は、土師器食膳具は無台碗のみで8.29％、須恵器貯蔵具が13.81％、土師器煮炊具は14.36％である。

胎土Ａ類の佐渡小泊産と考えられる無台杯の中では、口径12～13cm、底径７～８cm、器高３cmの資料が多い。口径と器高はほぼ一定だが、底径が７cm前後と８cm前後の２種類が確認できる。２区ＳＤ１では底径８cm前後が主体となり、小泊窯跡群の中でも古い下口沢窯跡に見られる資料である。ＳＤ158では、胎土Ａ類では下口沢窯跡に類似する資料が多く、胎土Ｄ類では底径７cm前後のものが多くなることから、２区ＳＤ1より新しくなると考える。ＳＥ93は、出土した土器の様相からＳＤ158とほとんど変わらない時期と考えるが、遺構の切り合いからＳＤ158より新しい。

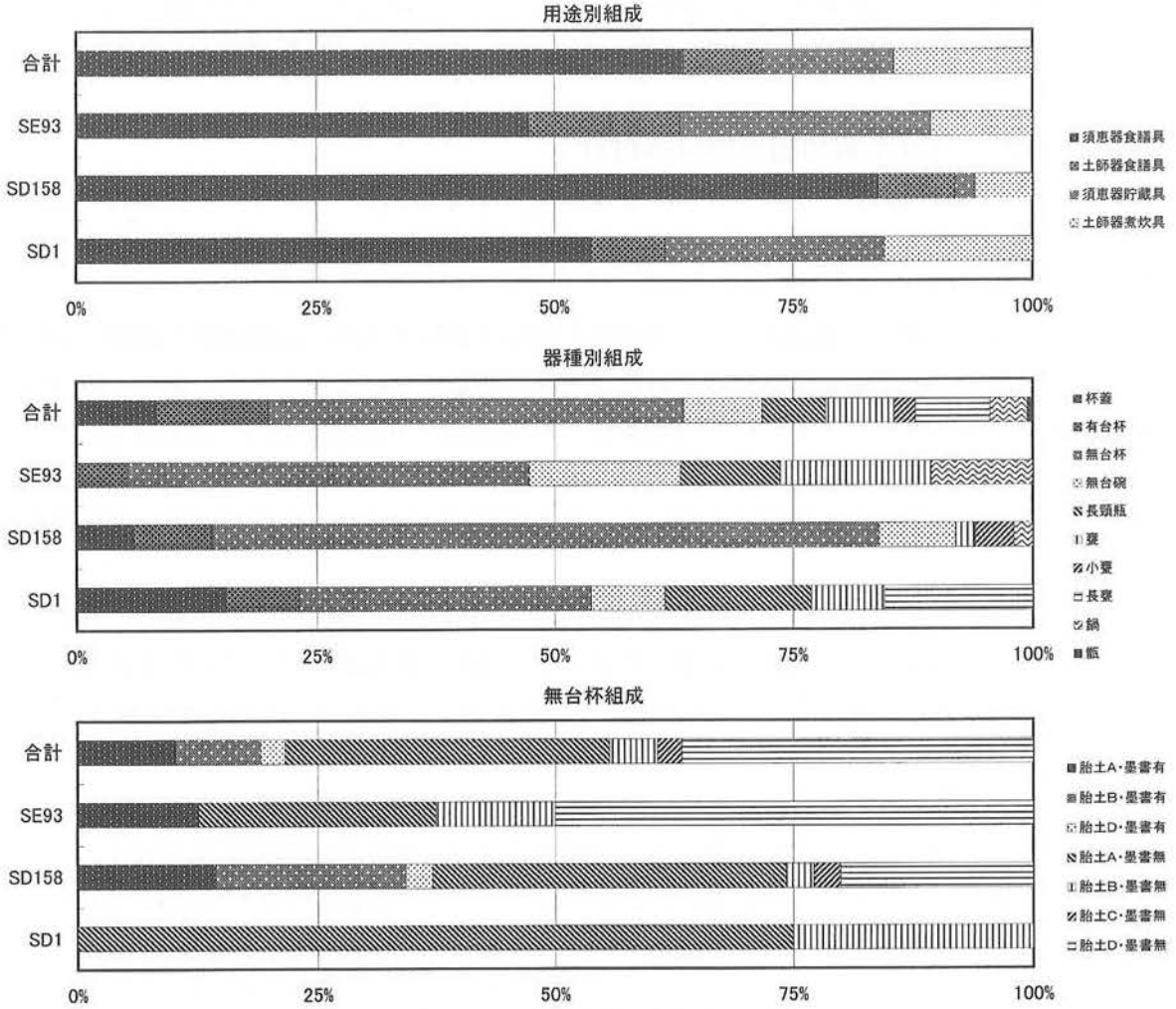
これらの一括遺物を、春日氏の編年（春日1999）と、佐渡小泊窯跡群の編年（坂井他1991）を基にして検討する。下口沢窯跡は、９世紀前葉から中葉に相当する窯跡である。新潟古代土器編年では、それまでの食膳具の大半を須恵器が占める様相に変化が見られ、土師器・黒色土器食膳具が定量出土する時期とされている。また、佐渡小泊産の須恵器が越後国内に流通し始める頃とされる。坂田遺跡では、食膳具では須恵器が多く、土師器は少数であり黒色土器は出土していない。須恵器無台杯では、佐渡小泊産と考えられる製品と、在地産と考えられる製品が定量出土している。

坂田遺跡の出土遺物は、９世紀前半の八幡林遺跡Ｉ区出土土器や、井ノ町遺跡ＳＫ12出土土器に類似が見られ、宮田遺跡ＳＤ346のように食膳具の大半を土師器無台碗が占める９世紀後半には下らない

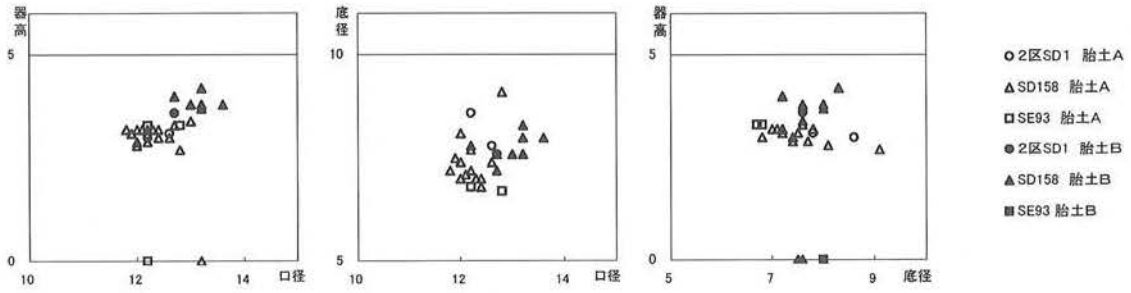
	食膳具							貯蔵具		煮炊具				合計
	須恵器						土師器	須恵器		土師器				
	杯蓋	有台杯	無台杯				無台碗	長頸瓶	甕	小甕	長甕	鍋	甑	
			胎土A	胎土B	胎土C	胎土D								
SD1	2	1	3(0)	1(0)	0(0)	0(0)	1(0)	2	1	0	2	0	0	13
SD158	3	4	18(5)	8(7)	1(0)	8(1)	4(1)	0	1	2	0	1	0	50
SE93	0	1	3(1)	1(0)	0(0)	4(0)	3(0)	2	3	0	0	2	0	19
合計	15	21	35(8)	11(7)	2(0)	31(2)	15(1)	12	13	4	14	7	1	181

＊ 括弧内の数字は墨書土器の点数を示す。

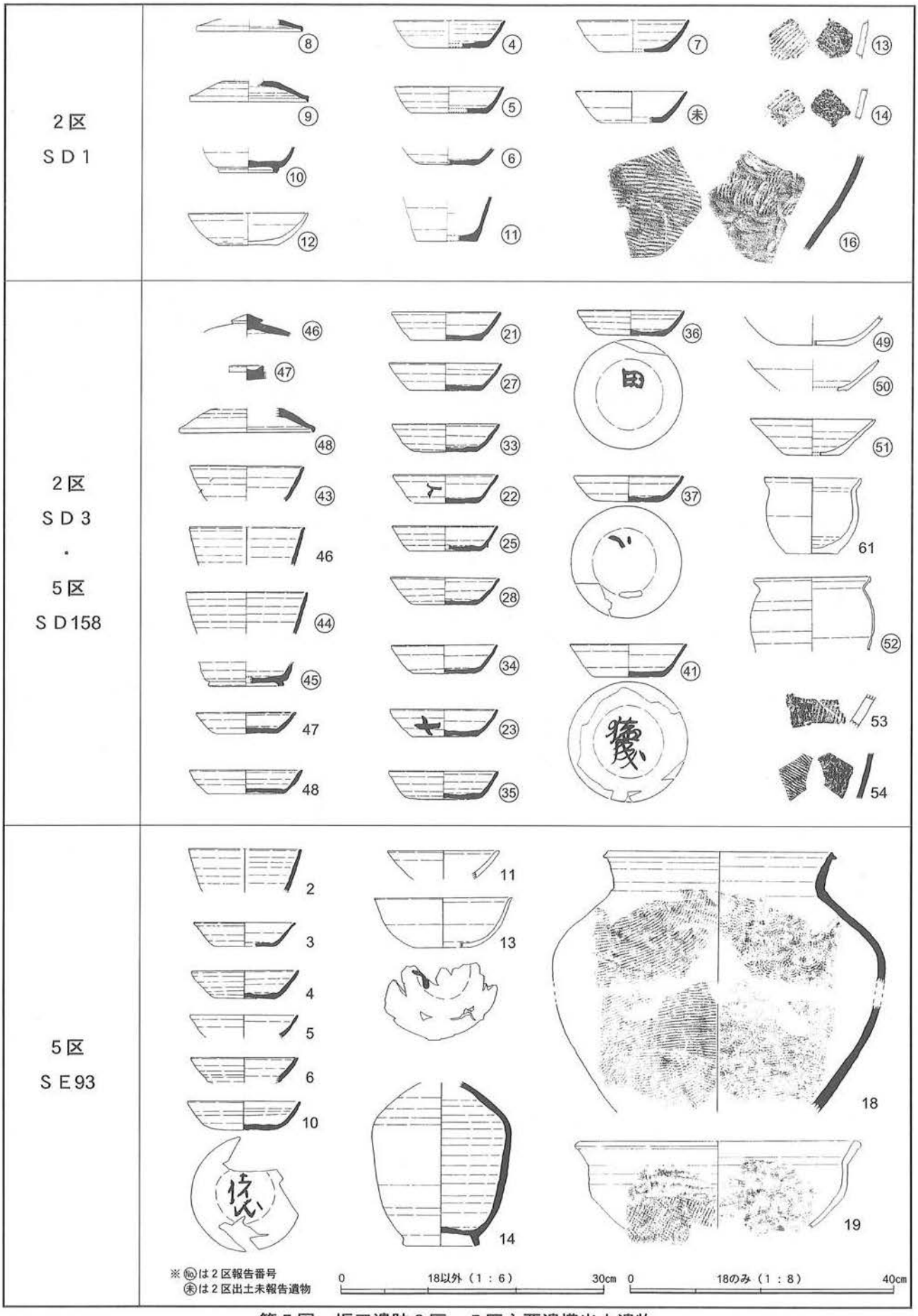
第１表　坂田遺跡出土土器数量表



第３図　坂田遺跡出土土器組成



第４図　坂田遺跡　出土無台杯　法量分布図



第5図　坂田遺跡2区・5区主要遺構出土遺物

と時期と考える。宮ノ前遺跡のⅠ期では、食膳具における須恵器の比率が高く、須恵器食膳具のほとんどが佐渡小泊窯跡群のカメ畑窯跡に類似することから、坂田遺跡は宮ノ前遺跡の前段における遺跡と考える。

2）遺構の性格と出土土器の様相

２区ＳＤ１は、黒褐色粘土とオリーブ灰色粘土を覆土に持つ、幅の広い溝である。５区に延長は確認できず、２区の北側に延長するとみられる。住居跡の可能性もあるが調査区が狭く不明な点が多いことから、検出した平面と断面から溝として分類した。出土している土器は、須恵器の杯蓋・有台杯・無台杯・甕・瓶類と、土師器の無台碗・長甕がある。須恵器無台杯の形態から、9世紀前葉頃と考える。

ＳＤ158は、青灰色から緑灰色の地山に類似する粘土を覆土に持つ、幅の広い溝である。遺構の配置から集落域と耕地を区画した溝と考える。坂田遺跡の中で最も多く遺物が出土しており、出土土器の総数181点中50点が出土した。食膳具を中心に廃棄したと考えられ、出土した土器の92％が食膳具で、このうち須恵器無台杯が70％を占める。坂田遺跡から出土した須恵器無台杯の79点中35点44.30％がＳＤ158から出土している。遺物は、遺構床面からの出土は無く、床面より少し浮いた状態で出土している。溝を掘削してから、一定期間空いて廃棄したものと考える。

ＳＤ158は、北側が未調査の遺構で、今後の調査が行われたとすれば、さらに多くの遺物が出土すると考えられる遺構である。今回出土した土器には、完形に復元できるものはなく、出土土器の大半を占める須恵器無台杯は、全て口縁部が一部欠損するものばかりである。現時点では、調査したＳＤ158からこの欠損した部分の口縁部は確認できなかったため、口縁部を一部割ってから廃棄していた可能性が考えられる。

出土した土器は、全ての器種において散在するように分布し、据え置いたような出土状況は確認できなかったことから、遺構内に区別無く廃棄したと考える。

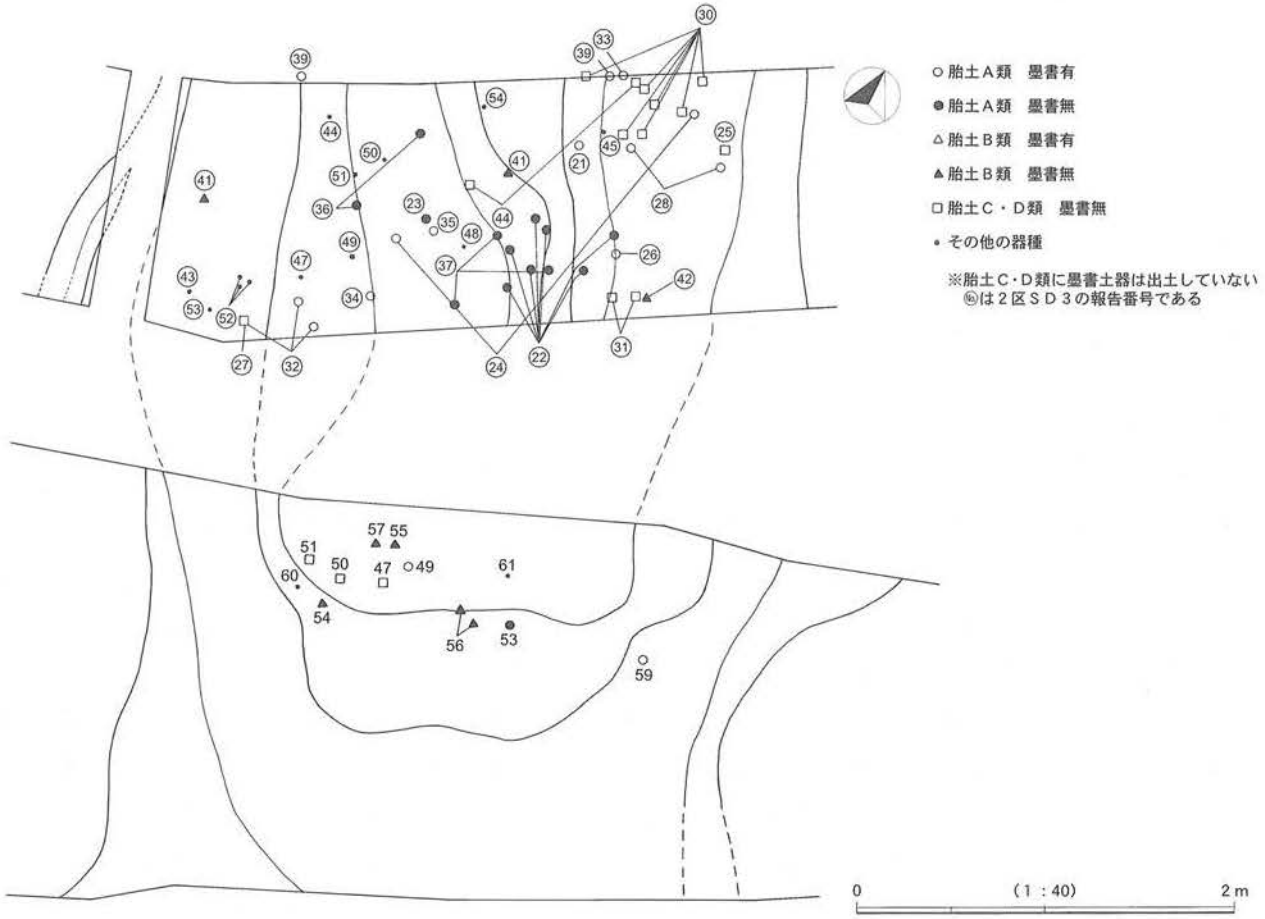
また、墨書土器が多く出土し、ＳＤ158から出土した無台杯35点中13点に墨書が施されている。書かれている文字は「猿□」５点、「主」ヵ２点、「田」ヵ２点、「十」「人」各１点、判読不明のものが１点である。古代以来の日本の農耕儀礼では、山の神を農耕神・田の神（歳神）として迎え入れるところから始まるという観念が一般的であったとされている。その際に、水田周辺やその境界付近で山の神を迎え入れる祭り（祭礼）と宴を行うが、これと「猿□」の墨書土器の出土地点を関係させるならば、「猿□」の墨書土器は、山の神やその使者の依代として墨書されたという可能性があると考え、山の神を耕地に迎えるための祭宴で使用された可能性があると指摘している（田中2007）。

これらのことから、ＳＤ158の土器群は他の一括遺物とは異なった性格を持ち、食膳具を中心に廃棄した状況と墨書土器の量から、祭祀に使われたものと考える。しかし「猿□」の墨書が示すものが何であるかは現時点では不明であり、資料の増加を待ってさらに検討する必要がある。

ＳＥ93の一括遺物は、Ⅲ章で述べたように、上層の黒色土層の下部から出土した。上層の黒色土は徐々に堆積したものと考え、上層の黒色土が堆積してゆく過程で廃棄されたと考える。食膳具・貯蔵具・煮炊具が一通り出土し、器形が復元できる個体は少ないことから、ゴミ捨て場としての性格を持つと考える。

3）胎土Ｂ・Ｃ類の土器について

坂田遺跡２区・５区で出土した須恵器無台杯は、胎土の特徴から４種類に分類した。



第６図　坂田遺跡５区ＳＤ158・２区ＳＤ３出土遺物器種別分布図

胎土Ｂ・Ｃ類に分類した製品は、在地産か他地域からの搬入品かは、現時点で該当する窯跡が確認されていないため不明である。

周辺で調査が行われている須恵器窯跡は、柏崎市の雨池古窯跡のみで、この他に、刈羽村枯木Ａ遺跡から刈羽窯跡産と考えられている遺物が出土している。胎土Ｂ・Ｃ類とした遺物は、これら２箇所の窯跡の製品と比べても、胎土が異なることから、別の窯跡の製品と考えられる。

胎土Ｃ類に分類した遺物は、底径7.0cmと8.4cmの底部破片が２点のみで、ＳＤ158とＳＰ83から出土した。胎土Ｄ類のその他不明の窯跡に分類することも可能であったが、１mmほどのやや大きい白色粒と黒色粒を含む胎土が特徴で、他のものと明確に異なる胎土であったため分類した。軟質で器壁の劣化が激しいため、底部の切り離しがヘラ切りであること以外は不明である。共伴して出土した胎土Ａ類の年代から、９世紀前葉から中葉のものと考える。

胎土Ｂ類に分類した遺物は、細片等を含めると、全部で15個体確認できる。法量は１種類で、口径13cm、底径7.7cm、器高3.8cmである。ロクロナデを丁寧に行い、器壁の凹凸はほとんど見られない。底部の切り離しはヘラ切りで、切り離し痕をナデ消している。重ね焼きを行い、口縁外端部は黒褐色から暗赤褐色に変色する。底部の還元は不十分で、にぶい橙色の酸化色である。器形や調整、底部の酸化状態などから、全て同時に焼成された製品と考える。

確認された器種は、無台杯のみで、他の器種は確認できない。15個体の無台杯のうち、７個体に墨書が施されており、これらは全てＳＤ158から出土している。

胎土Ｂ類の無台杯はＳＤ158の他に、２区ＳＤ１・ＳＥ93・ＳＤ155から出土している。２区ＳＤ１では、計４点出土しており、２区№.７とこの他の未報告資料に、口径12.6cm、底径7.2cm、器高3.5cmのものが１点と、口径12.8cmの口縁部と、底径7.8cmの底部の破片が各１点出土している。ＳＤ158からは８点、ＳＥ93からは、底部破片と細片の２点が出土している。ＳＤ155からは、底部破片が１点出土した。

同様の胎土の遺物は、現時点で坂田遺跡以外では確認されないことから、極限られた狭い範囲で流通ししていたと考える。

胎土Ｂ類は、胎土Ａ類の№.53に書かれている「猿□」の墨書が、胎土Ｂ類の№.56・２区№.42にほぼ同じ書体で墨書されていることから同時期のものと考えられ、共伴する胎土Ａ類の年代から９世紀前葉から中葉の製品と考える。ただし、今回確認できた遺物は同時に焼成した製品と考えられることから、９世紀前葉から中葉の間で一度のみ操業した窯跡と考える。

これらの製品の技術系譜は、現時点では不明である。９世紀前葉から中葉にかけての周辺の窯跡では、類似する窯跡は確認できない。越後の須恵器の特徴をみると、大きく北陸系のものと東海・信濃系のものに分けられるが、胎土Ｂ類はどちらにも属さないものと考える。周辺地域では類似する窯跡が確認できないことから、遠隔地からの技術移入が行われた可能性が高いと考えるが、現時点では不明である。

古代越後の土器生産は、８世紀前半に急速に発展し、須恵器の杯類が日常の食膳具として急速に普及する（坂井1999）。生産規模はそれぞれ異なるが、郡ごとに生産が行われたとされ、律令体制下での生産・流通は、郡司層が関与していると考えられる（坂井1989）。９世紀前半になると、佐渡小泊窯跡群の製品が流通し始め、消費遺跡では在地産と佐渡小泊産の須恵器が共伴して出土する。９世紀後半になると、佐渡小泊産須恵器の流通量が増え在地産須恵器を凌駕していき、在地での須恵器生産は土師器へ移行する。この背景には、在地窯の経営主体であったとされる郡司層の衰退が考えられる。操業年代を９世紀前葉から中葉と想定した胎土Ｂ類を焼成した窯跡は、在地における須恵器生産の最終段階に操業された窯跡と考える。経営主体は、郡司層の衰退にともない力をつけてきた在地の領主層などが考えられるが、その生産規模は小さく流通範囲も狭いと考える。

現時点で、胎土Ｂ類を焼成した窯跡は確認されておらず、坂田遺跡では、特にＳＤ158の祭祀に関わる製品として胎土Ｂ類の無台杯を使用したと考える。

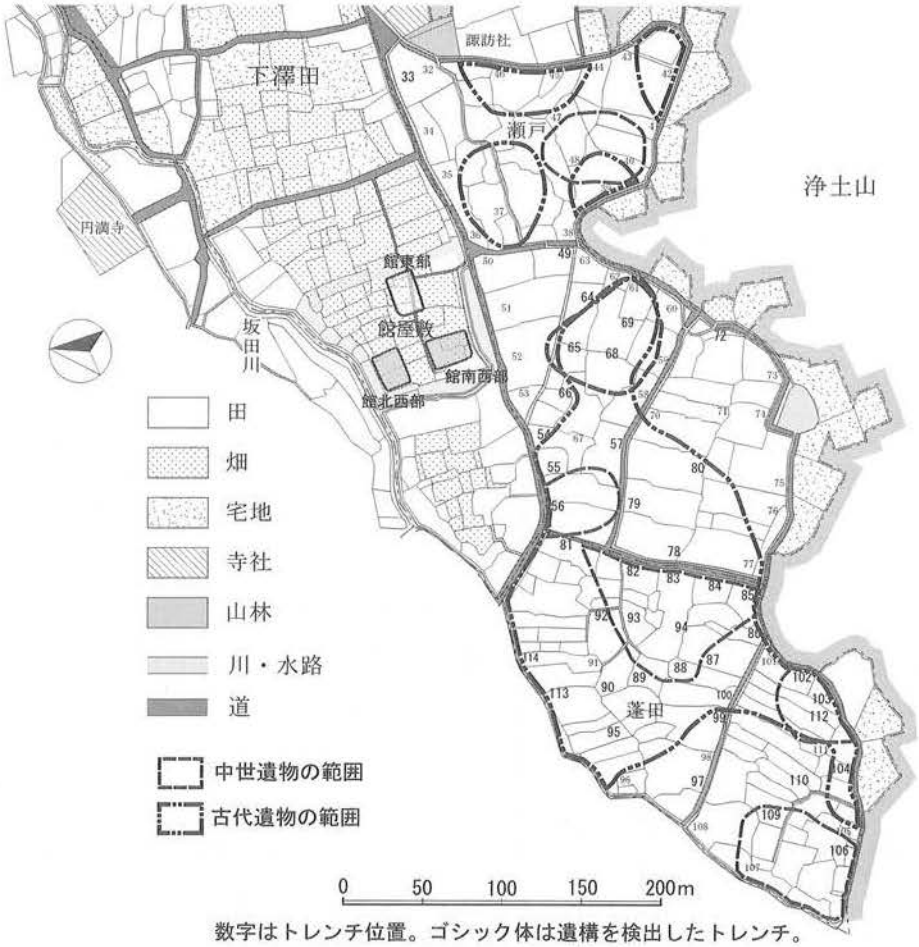
2　試掘調査と採集遺物から見た坂田遺跡

坂田遺跡は東西300m、南北780mの約130,000㎡という広大な遺跡範囲が推定される。坂田遺跡における２次にわたる本発掘調査は、遺跡の南端部分のごくわずかな範囲を対象としたものであった。坂田遺跡では、弥生時代以降、中世に至る様々な時代の遺物が採集されている。また、ほ場整備事業に先立ち、坂田遺跡の広範囲で試掘調査も行った。これら本発掘調査以外の資料は、今まで公表する機会を得なかったものであるが、坂田遺跡の動向を検討する上で欠かせない資料である。ここで、これらの資料を提示したい。

１）坂田遺跡試掘調査の成果

ａ．調査成果の概要

試掘調査は上沢田遺跡の確認調査とともに行われた。対象となった範囲は、坂田遺跡の想定範囲の



数字はトレンチ位置。ゴシック体は遺構を検出したトレンチ。

第７図　坂田遺跡試掘調査・遺物採集地点配置図

概ね南半分にあたる、主要地方道高浜・堀之内線の南側部分で、対象面積は約96,000㎡であった。調査トレンチは第32トレンチから第114トレンチが該当する。第７図は明治年間に作成された土地更正図に、試掘トレンチの位置と、次項で述べる表採遺物の採集地点を記したもので、図中の数字は試掘トレンチの位置を示す。坂田遺跡は字下沢田・瀬戸・蓬田に広がりを見せ、試掘調査は字瀬戸・蓬田において行った。試掘調査の成果は第２表の通りである。全83トレンチのうち、58カ所で遺構もしくは遺物が確認された。検出された遺構にはピット・土坑・溝等がある。ピットは直径20cm～40cm前後の円形のものである。土坑には、径１m前後の隅丸方形のものと、直径１mを超える円形の井戸となりうるものがある。溝は、幅30～40cmの細いものと、幅１m以上のものがある。遺構覆土の掘削は行っていないため、それぞれの遺構の所属時期は不明である。

b．試掘調査出土遺物（第８図）

試掘調査では多量の遺物が出土しており、特に古代と中世の遺物が多く出土している。また、土師器の小片も多いが、これらは摩滅が著しい小片が多い。古墳時代に遡る可能性もあるが、時期の特定に至るものは少ない。ここでは、時代や時期が特定されそうな遺物を中心に図化した。

古代の遺物は19点を図化した。１～６は須恵器杯蓋である。１・２はボタン状の摘みをもつ。２は天井部に広くロクロケズリを行い、内面に篦記号が施される。３・５は天井部から肩部にかけて広くロクロケズリを行う。４～６の口縁端部の折り返しは短い。７～９は須恵器無台杯である。７・９は

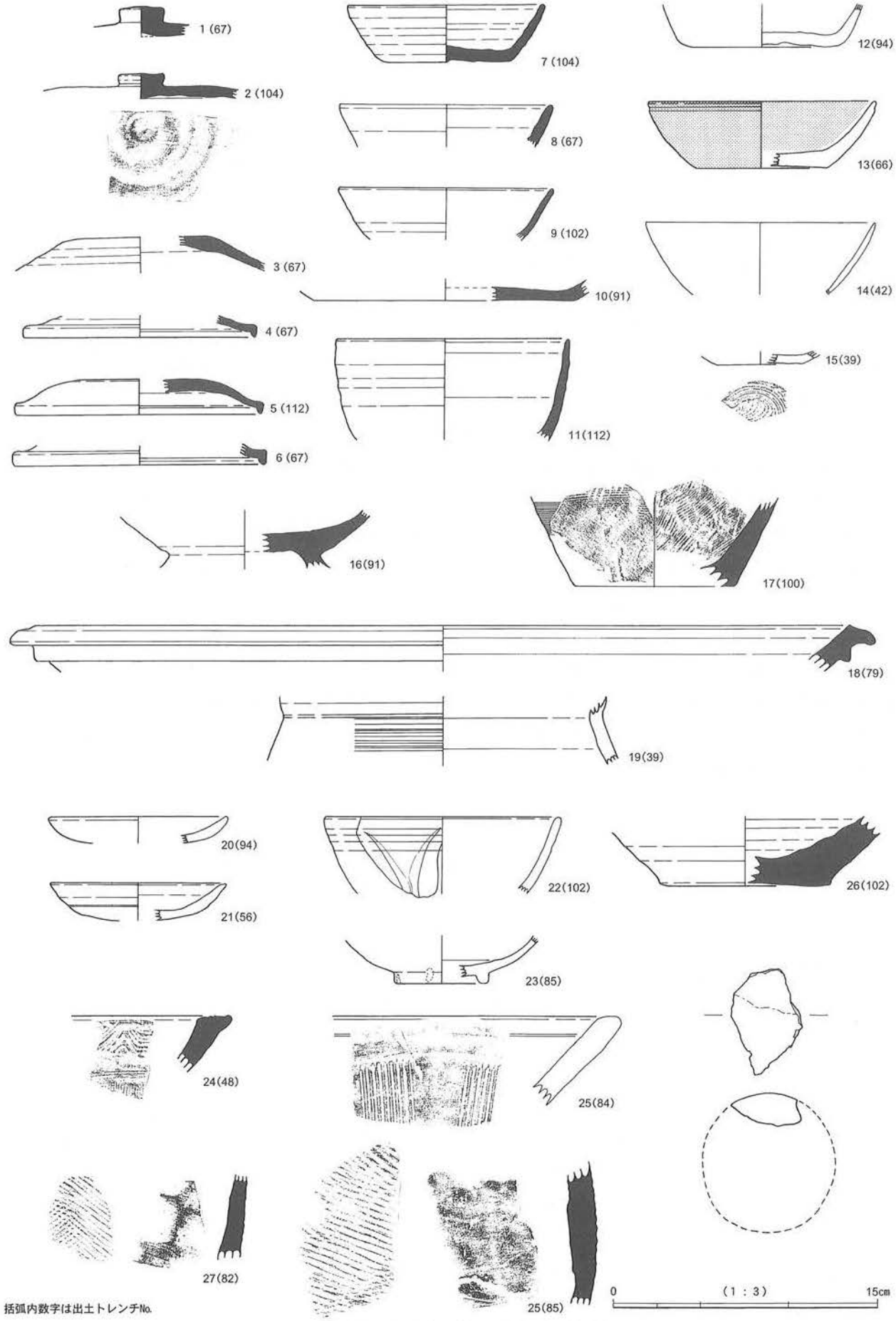
Tr	古墳・古代	中世	製鉄	遺構
33				ピット5
37	須有台杯、土小			
39	土無台碗・甕			
40		珠片口		
42	土無台碗			
45	土甕・小			
46	土小			
47	土小			
48		珠片口Ⅴ期		
49				溝1
54	土小			ピット3, 土坑1
55	須甕・土小			ピット4
56	土小	土皿2		ピット2
57	須無台杯、土小多			溝大
60	土小6	白磁皿底	鍛冶滓	
61	須甕		鍛冶滓	
64	土小			溝大
65	須甕			溝大
66	土多(赤彩有り)			ピット3, 土坑1
67	須蓋4・無台杯4、土			
68	土小4			溝大
69		珠片口		溝小
70	須甕、土小	珠壷・甕	鍛冶滓	
72	須無台杯			溝大小
75	土小			
77	須無台杯・甕、土無台碗・小			
78	土小多			ピット1
79				ピット1
80	須甕、土小2			溝大？
81	土小			ピット3、土坑2
82		珠壷		溝小
83	須甕、土小	珠甕、瓷甕		溝大、方形土坑
84	須甕、土小	越前片口	鍛冶滓	ピット1、溝大
85	土小	珠甕、白磁皿	鉄製品	溝大小
86	土小			ピット1
87	土小6	珠甕4・片口		ピット3、溝中3
88		珠甕1		ピット3、溝小
89	須無台杯,			ピット4
90	土小、土小			ピット2、溝小
91	須壷、土小		鍛冶滓	
92	土小			溝小
93				溝中・大
94				土坑、溝小
95	土小			ピット1
97				ピット1
99	土小2			ピット4
100				ピット2、溝小
102	須無台杯、土小	珠壷・甕・片口、瓷甕、青磁皿		ピット2、土坑1
103	土小	珠壷		ピット1、土坑1
104	須蓋・無台杯、土小			ピット5, 土坑1
105	土小			
106	土小	瀬戸:香炉		ピット2
108	土小			
109		珠壷		ピット3、溝小
110				ピット2、溝
112	須蓋・有台杯、土小	珠壷・片口		ピット4
113				ピット2、溝溝小2
114	土小			溝中

※　土:土師器　須:須恵器　珠:珠洲　瓷:瓷器系　小:小片

第２表　試掘調査結果一覧表

佐渡小泊窯産とみられる。９は７に比べて器壁が薄く、口縁部が大きく開く。８は灰白色を呈し、器壁が厚く、体部の開きは小さい。10は、須恵器の無台盤か。底径12cm前後と大型で、外面の底部全面と体部下半にヘラケズリを行う。内底面には不定方向のナデを行う。11は須恵器有台杯で、口縁部は内湾気味に立ち上がる。佐渡小泊窯産と見られる。12・13は土師器無台杯である。12は外底面がヘラ切り未調整で、体部はわずかに開きながら立ち上がる。13は内外面に薄く赤彩が残る。口縁部は内湾し、外面の口縁端部の下が窪み、凹線状を呈する。底部外面は摩滅により不明瞭であるが、回転糸切りを行っているようである。14・15は土師器無台碗である。いずれも焼成は良好である。14は、器壁が薄く、外面体部下半にヘラケズリを行う。16は須恵器壷の底部である。高台は太く、外側に大きく開く。体部の立ち上がりは丸みを帯びて大きく開き、外面にロクロケズリを行う。17は須恵器瓶類と見られる。外面体部にカキメを施した後、体部下端にヘラケズリを行う。内面は全体に縦位のハケメを施す。18は須恵器甕の口縁部である。口径45cm前後の大型のものである。口縁端部は外側に引き出し、その下に一条の突帯を巡らす。19は土師器長胴釜の頸部である。ロクロ成形によるもので、体部上端にカキメを施す。これら、古代に属する遺物には、坂田遺跡５区などとほぼ同時期にあたる９世紀前半代のものの他に、２の須恵器杯蓋、12・13土師器無台杯などの８世紀中葉から後半頃に位置付けられるものがある。

中世の遺物は10点を図化した。20・21は土師器皿である。いずれも手づくね成形によるものである。20は体部と底部の境が不明瞭で、口縁端部は内湾する。21の口縁部は、ヨコナデを行うことにより薄くなり、体部と底部の境に沈線が巡る。22は青磁碗で、体部に片切彫による連弁紋を持つ。23は白磁皿で、底部内面に圏線が巡る。施釉は高台内部に及ぶ。24は珠洲の片口鉢で、口縁端部は若干内傾し、波状紋が施される。25は越前の擂鉢である。赤褐色を呈し、内面に幅29mmに９目の卸目が深く施される。26・27は珠洲壷で、26は底部の破片である。底部の糸切り痕は消される。27は体部破片で、外面にやや細めの叩き具痕が綾杉状に並ぶ。28は珠洲甕の体部である。焼成は軟質で、外面の叩き具痕は幅が広い。中世の遺物にも、時期差が認められる。土師器皿は13世紀から14世紀代に位置付けられ、白磁皿は13



第８図　坂田遺跡試掘調査出土遺物

世紀頃の所産と見られる。青磁碗は14世紀中葉から15世紀前半頃のものと見られる。珠洲は壷の体部破片が吉岡氏の編年のⅢ期からⅣ期頃、片口鉢がⅤ期と見られる。越前の擂鉢は16世代と見ら れる。

これら、土器類の他に製鉄に関連する遺物も出土している。29は鞴の羽口の破片である。直径は7.5㎝前後に復元され、外面に調整痕は見られない。胎土に径２㎜前後の礫とスサを少量含む。外面の一部が被熱により黒色に変色する。この他に少量であるが鍛冶滓も出土している。

ｃ．まとめ

坂田遺跡の試掘調査では、古代では８世紀後半頃から９世紀前半の遺物が、中世では13世紀代から16世紀代までという、時期幅がある遺物群が確認された。これらの遺物を古代と中世に分けて、その出土地点のまとまりを整理したものも第８図に記した。古代に属する遺物は、対象地の西半部に大きなまとまりがり、遺物の出土量も多い。今回の発掘調査区である５区は、この遺物出土範囲の西南端に辺り、南側に丘陵の裾が近接することから、９世紀代の集落の縁辺部に近いものと見られる。中世の遺物は、数トレンチでまとまって出土する傾向を見て取ることができる。また、５区調査区の中で、中世の遺物が出土したＳＥ145付近にもまとまりがあり、発掘調査の成果と整合する。古代と中世の遺物出土範囲のあり方は、それぞれの時代における集落形態の違いを反映している可能性がある。ここでは検出された遺構の時期が明らかとなっていないため、遺物と遺構の関係については検討を行わなかった。今後は、遺構の時期の検討により、さらに遺跡の様相を明らかにすることができるであろう。

２）　坂田遺跡（“館屋敷”）採集の遺物

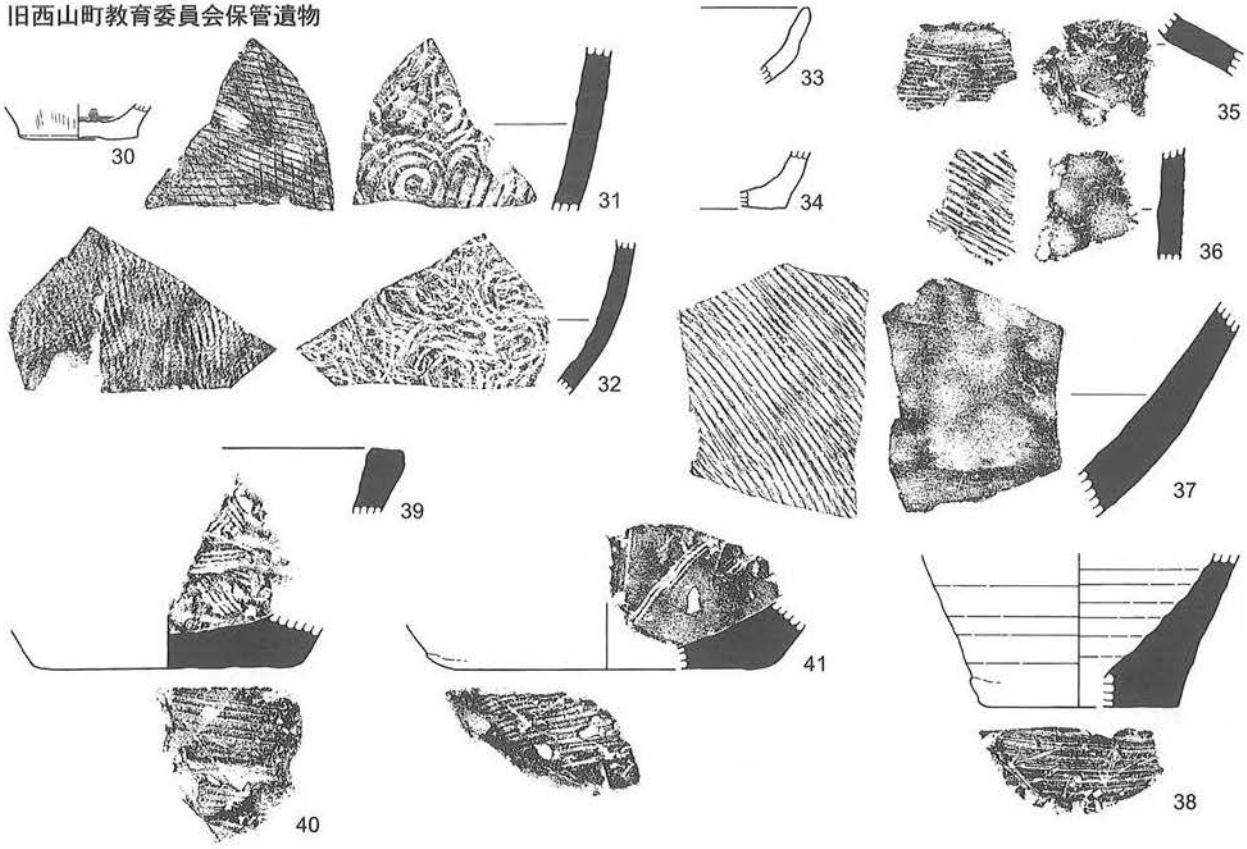
柏崎市西山町坂田字下澤田には、地元で“館屋敷”と俗称される区域がある。坂田川左岸で、現集落域よりもやや下流（南西）側に位置する。“館屋敷”の地名は、この周辺に中世の館跡があることを想起させるが、すでに鳴海忠夫氏が「坂田館跡」として紹介しているところである［鳴海1988］。その後、同氏は明治期の旧土地更正図をもとに館の構造を考察し、採集した遺物から存続時期を検討している［鳴海1992］。“館屋敷”の発掘調査は実施されていないため、実際の遺構を検出するには至っていない。しかし、遺物が多く採集されており、遺跡の状況を垣間見ることができる。本項では、旧西山町教育委員会で保管されていた過去の採集遺物と平成20年度に当市教育委員会が採集した遺物を紹介しておきたい。

ａ．鳴海忠夫氏採集遺物［鳴海1992］

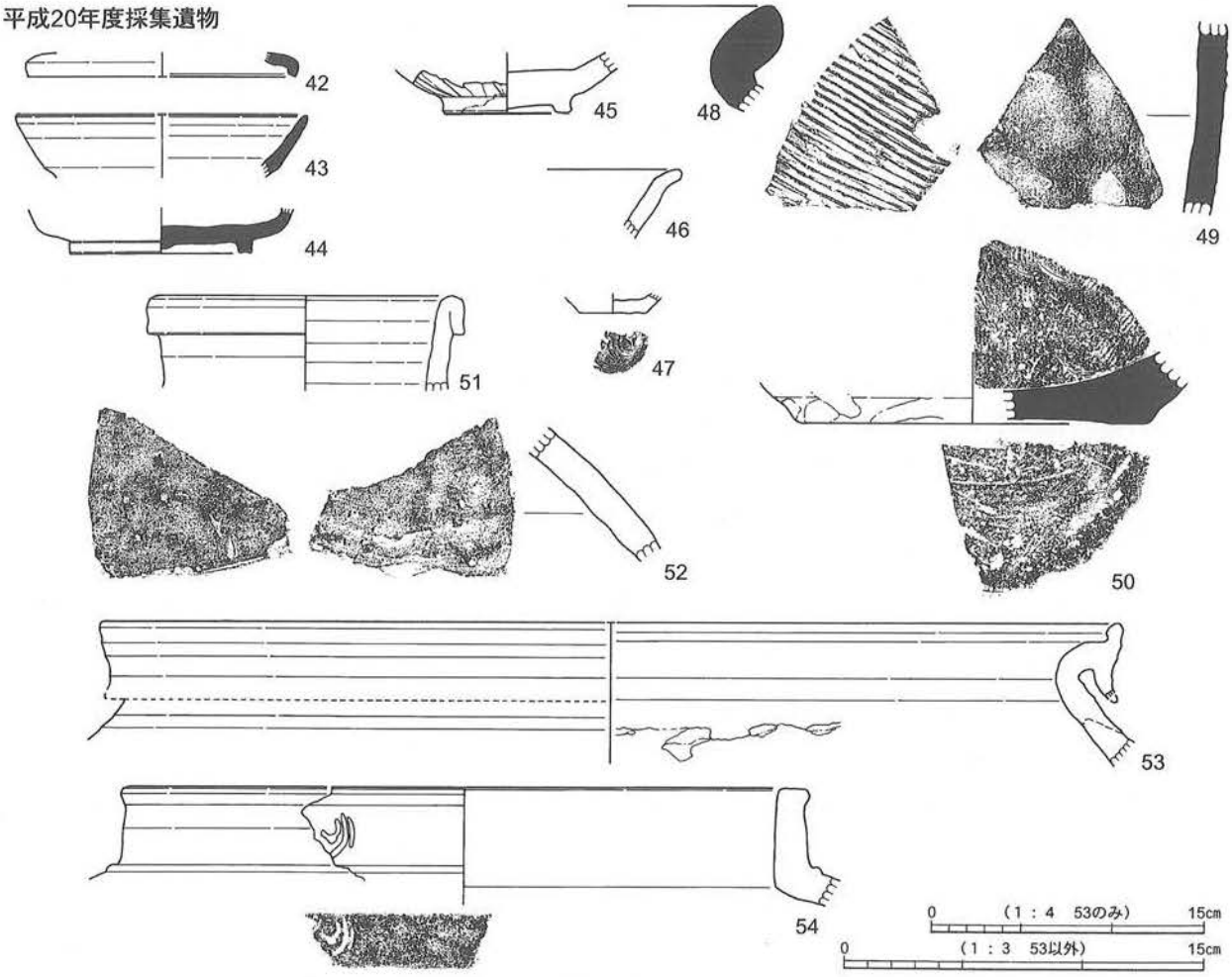
まず、鳴海氏によって採集された遺物を概観する。遺物は、古代～近世の土器・陶磁器、鉄滓など、100点以上に及ぶ。おもに館の中央～西側に分布し、東側に少ないことから、主要な施設が西側（東側に推測する門からみて奥側）にあったと想定されている。

遺物の内容は、古代の須恵器・土師器、中世の青磁・白磁・瀬戸美濃・珠洲・越前、近世の肥前などの陶磁器、そして時期不明の鉄滓である。氏の報告によれば、青磁12点（端反碗６点・箆描蓮弁文碗１点・箆線描蓮弁文碗１点・雷文帯碗１点・直縁無文碗１点・稜花皿１点・無台皿１点）・白磁４点（うち玉縁口縁の碗１点）・瀬戸美濃９点（天目茶碗２点・平碗２点・卸皿１点・小皿類４点）・珠洲70点余（うちロクロ成形の壺２点、鉢10点余、珠洲系の鉢１点）・越前６点（甕・壺）・越前に類似する陶器（瓷器系ヵ）２点で、青花や中世土師器はない[1]。これらの時期は13世紀～16世紀前半（中心は13～15世紀）と考察されている。

旧西山町教育委員会保管遺物



平成20年度採集遺物



第９図　坂田遺跡（“館屋敷”）採集土器・陶磁器

b．旧西山町教育委員会保管遺物（第９図30～41・第10図ｉ）

地元で採集され、旧西山町教育委員会で保管されてきた遺物である。現在33点が当市教育委員会に保管されている。

概　　要　一部は複数の茶封筒に収められていたようであり、「（C）坂田出土．須恵器の（二）／昭和三九．四．二四　中村孝三郎氏の鑑定」などの記載がある。また、別の紙片には「Ｓ三九．四．二四　　十四点／外二一点」ともあるので、当初は35点あったようである。『西山町の民俗と文化財』には、「坂田字下沢田西方の俗称『たてやしき』という処に、一ヘクタールの畑がある。耕作の際鍬の先から土器の破片が発見される。現在、発見されたものは　１　やよい式土器　一点　２　はじ器　五点　３　すえ器　七点　なお、畑の中ほどに鉄滓（鉄くず）、南西部地下三十糎ほどの処に直径一米位の石が埋まっている。」とある［西山町文化財調査審議会1970］。昭和44年９月１日、このうちの弥生式土器１点、土師器５点、須恵器４点が旧西山町の文化財として指定されている。現存する33点はいずれも小片であるが、弥生時代もしくは古墳時代の土器４点、須恵器６点、珠洲（系）７点、越前３点、その他陶器１点、中世土師器２点、鉄滓１点、礫石類９点といった内容である。このうち13点を図化した。

各　　説　30は、壺形土器もしくは甕形土器の底部片である。胴部内面に横位、外面に縦位の刷毛目がわずかにみられる。張紙に「ヤヨイ式」とあるが、古墳時代の可能性もあり、詳細な時期は不明である。

31・32は須恵器で、いずれも甕の体部片である。31は、内面が同心円文と平行線文の重複、外面が格子文となっている。32は、内面の当て具痕が同心円文、外面の叩き目が平行線文であるが、平行線文には木目とみられる斜位の線が入るので、斜格子状となる。

33は、中世土師器皿の口縁部片である。手づくね成形であり、中世前期のいわゆる「京都系第１波」に由来するものである。底部を画する口縁部外面の横ナデはみられるが、２段ナデなどの調整はすでに形骸化した段階と思われる。ただし、内外面とも損傷を受けており、詳細な観察はできなかった。13世紀の所産と考えられる。

34は、越前の壺もしくは甕で、底部の小片である。詳細は不明である。

35～41は、珠洲もしくは珠洲系陶器に分類される。35～37は、叩き成形による壺もしくは甕である。いずれも胴部の小片で、外面には叩き目、内面には不明瞭ながら当て具痕がみられる。35には頸部への接続部があり、小型の壺の肩部と目される。38は、ロクロ成形の壺の胴部下半～底部である。内面には成形痕が明瞭で、底部切り離しは静止糸切りによる。39は、鉢の口縁部片である。器面の損傷が著しい。口縁が方頭で水平となる形態は吉岡康暢氏の第Ⅳ2期（14世紀前葉～中葉）頃に多くみられる［吉岡1994］。40は、鉢の底部片である。卸し目は、幅８～９㎜の４目が１単位とみられる。底部切り離しは静止糸切りである。底部外面が内面よりも摩滅している。41は、鉢の底部片である。卸し目は幅８㎜の４目が１単位となっている。底部外面には、静止糸切り痕がみられる。胎土には黒色の微粒が多く含まれ、白色粘土粒もみられる。内面は使用によって摩滅している。全体的に灰白色を呈しており、産地を珠洲に断定できないため、珠洲系陶器としておきたい。珠洲と対比すれば、第Ⅱ期（13世紀前半）頃の所産とみられる［吉岡1994］。

ｉは、鉄滓である。一方が厚く、やや湾曲する形状から椀形鍛冶滓の破片と思われる。表面には銹

化物が部分的に付着しており、破面には気孔がやや多くみられる。メタル反応はない。

c．平成20年度採集遺物（第９図42～54・第10図ii～ix）

平成20年度、市教委は新潟県中越沖地震の災害復旧事業である19災河第926号　２級河川坂田川筋　河川災害復旧工事に係る工事立会を実施した。“館屋敷”にも接する坂田川での工事であることから、周辺の現地踏査を行った際に遺物を表面採集している。現地踏査は、４月８日・16日・５月９日・19日・６月６日に実施した。

概　　要　採集した遺物は、すべて小破片であるが、合計95点を数える。種別には、須恵器18点・青磁１点・瀬戸美濃３点・珠洲（系）20点・越前３点・常滑１点・瓦器１点・近世陶磁器10点・素焼きの不明土器28点・鉄滓８点である。本項では13点を図化した。

95点のうち、８割以上となる79点は、想定される館の北西部から南西部にかけての畑地で採集されているが、この状況は鳴海氏の所見とおおむね一致するものといえる。館の東部には、耕作の際に不要となる礫石を集積した地点があるが、その地点から須恵器１点・青磁２点・珠洲２点・素焼きの不明土器４点・鉄滓７点の合計16点が採集されている。時期の特定はできないが、８点中７点の鉄滓がその地点から採集されていることに注意しておきたい。後述するように、鉄滓は椀形鍛冶滓と考えられ、すべて同時期の所産であれば、付近に鍛冶に関連する施設があったことが推測される。

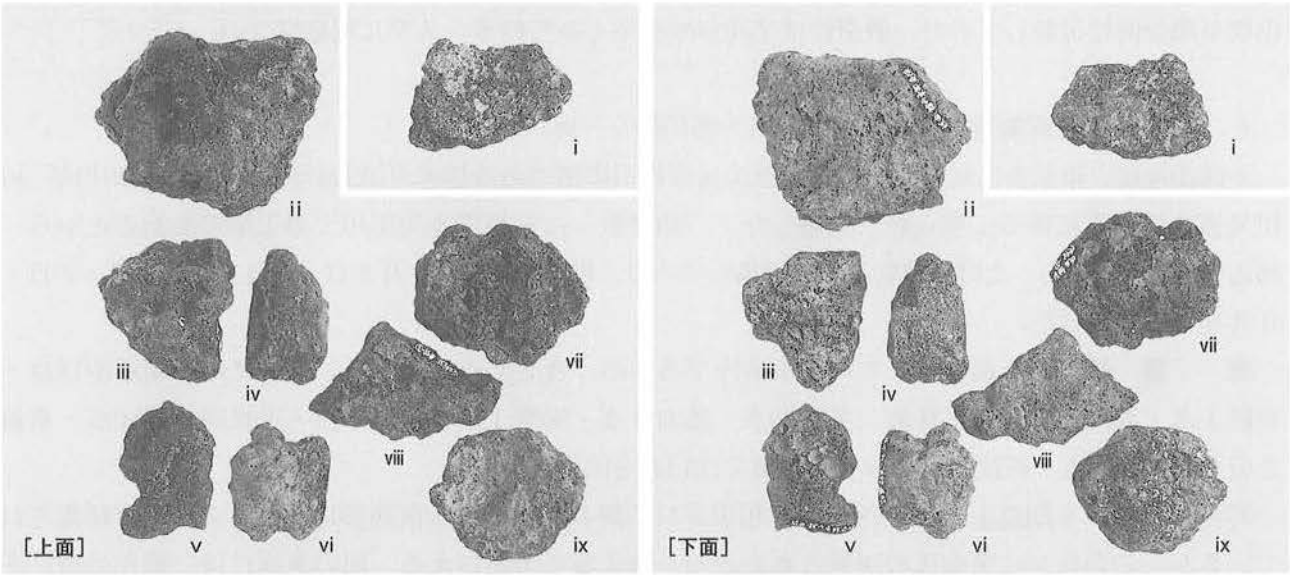
各　　説　42～44は、須恵器である。42は、杯蓋の口縁部片である。端部のつまみ出しはやや小振りである。胎土から在地産と思われる。43は、杯類の口縁部～胴部片である。内外面にはロクロ成形痕があり、端部は重ね焼きによって幅約８㎜が黒色になっている。佐渡小泊窯産である。器形や口径から、時期は春日真実氏のＶ１期（９世紀前葉）頃と思われる（春日1999）。44は、有台杯の胴部下半～底部片である。高台の断面は方形で、端面が窪む。在地産である。内面が摩滅しているのは使用痕と思われるが、胴部外面はそれ以上に摩滅しているので、再利用の可能性も考慮しておきたい。

45は、青磁の碗で、胴部下半～底部片である。胴部外面には、片切彫の鎬蓮弁文を持つが、小片のために蓮弁の幅や間弁の有無は不明瞭である。底部は厚く、高台は断面が四角形で、畳付と高台内は露胎である。上田秀夫氏のＢ－Ｉ類もしくはＢ－Ｉ’類（13世紀後半～14世紀前半）とみられる（上田1982）。

46は、瀬戸美濃の反り皿と目される口縁部～胴部上半の破片である。大窯第１～３段階（15世紀後葉～16世紀中葉）と思われる（藤澤2001）。47は、底部の小片である。外面には回転糸切りによる切り離し痕がある。釉薬はみられないが、灰色の胎土などから瀬戸美濃の合子などが考えられる。なお、図化はできなかったが、天目茶碗の胴部下半の小片が１点ある。外面には錆釉が施されている。

48～50は、珠洲もしくは珠洲系陶器である。48は、甕の口縁部片で、第Ⅲ期（13世紀中葉～後葉）の形態と目される［吉岡1994］。49は、壺もしくは甕の胴部片である。50は、鉢の底部片である。内面は摩耗によって、卸し目は不明瞭であるが、幅1.4cmに８目が観察される。焼成は不良で、胎土には白色微粒が多く含まれ、径１㎜の灰色粒・白色粒などもみられる。41に類似しており、珠洲系陶器としておきたい。

51～53は、珠洲（系）以外の陶器である[2)]。51は、壺の口頸部片で、産地は不明である。近世の可能性がある。52は、越前の壺もしくは甕の胴部（肩部）片である。外面には、短い縦画（1.0cm）とその下に長い横画（2.8cm以上）の刻印の一部が観察される。53は、常滑で、甕の口縁部片である。口縁



第10図　坂田遺跡（“館屋敷”）採集鉄滓（約１：３）

部の縁帯が上下方向への拡張が進んだ形態で、幅は４cmに及んでいる。内外面は横ナデされるが、内面には粘土紐を接合した痕跡がみられる。50cm以上の口径が推計されるので、法量が大きいことが想定されるが、器形の歪みによるものである可能性も考慮しておきたい。口縁部の形態から、中野晴久氏の第７型式期　(14世紀前半）の所産と考えられる（中野1994）。ただし、近年では同型式の出現は13世紀にさかのぼるとの見解が示されている（中野2005）。

54は、瓦器で、風炉の口頸部である。頸部が直立する形態で、外面にはスタンプ文が施されている。文様は巴文が不明瞭になったものであろうか。胴部の形態や文様帯が不明であるため、水澤幸一氏が分類する風炉Ⅰ～Ⅳ類で、14世紀末～16世紀の所産とされる（水澤1999）。

ⅱ～ⅸは、鉄滓である。平坦面や緩い湾曲部分がみられたため、いずれも椀形鍛冶滓の破片とみられる。メタル反応はない。ⅱは、段状で、破面には径数mmの気孔が多い。ⅲは、上面が流動状で、下面には径１mmの気孔と凹凸が多い。ⅳは、上面に径１mmの気孔が多く、破面には径５mmの気孔がみられる。ⅴは、破面が緻密であるが、下面に大小の気孔がみられる。ⅵは、表面が全体的に銹化物で覆われる。破面には径１～３mmの気孔が多い。ⅶは、表面に大小の気孔が多い。下面には銹化物が部分的に付着している。ⅷは、偏平な形態で、上面には径１cmほどの窪みがあり、下面は流動状であるが、径１mmほどの気孔が多い。ⅸは、上面が銹化物で覆われている。下面は凹凸が多い。

ｄ．まとめ

以上のような遺物から、本遺跡が弥生もしくは古墳時代・古代・中世が複合する遺跡であることがわかる。弥生・古墳時代については、遺物が少ないために今後の調査に委ねることとするが[3]、古代・中世の“館屋敷”について、簡単にまとめておきたい。

古　　代　須恵器杯（43）を９世紀前半頃と推測したが、他の須恵器もそれと前後する時期の範囲に位置付けることができよう。したがって、距離をやや隔てるが、“館屋敷”と今回の発掘調査区域とは、時期的な重複があることになる。“館屋敷”における具体的な遺構などは明らかにできないが、該期における集落のあり方や開発の状況を検討する資料になり得るであろう。

中　　世　鳴海氏の報告と同じように、今回報告した遺物も13～15世紀が中心である。ただし、時

番号	種別	器種	法量（cm）	焼成	色調	時期	備考
1	須恵器	杯蓋		不良	灰白	古代	67トレンチ
2	須恵器	杯蓋		良	灰	古代	104トレンチ
3	須恵器	杯蓋		良	灰	古代	67トレンチ
4	須恵器	杯蓋	口径13.0	良	灰	古代	67トレンチ
5	須恵器	杯蓋	口径14.2	良	灰	古代	112トレンチ
6	須恵器	杯蓋	口径14.0	良	灰	古代	67トレンチ
7	須恵器	無台杯	口径11.0 底径7.5 器高3.2	良	灰	古代	104トレンチ
8	須恵器	無台杯	口径12.0	良	灰	古代	67トレンチ
9	須恵器	無台杯	口径12.0	良	灰	古代	102トレンチ
10	須恵器	盤	底径14.8	良	灰	古代	91トレンチ
11	須恵器	有台杯	口径14.0	良	灰	古代	112トレンチ
12	土師器	無台杯	底径9.3	やや不良	浅黄橙	古代	94トレンチ
13	土師器	無台杯	口径13.0 底径7.4	良	浅黄橙	古代	内外面赤彩 66トレンチ
14	土師器	無台碗	口径13.0	良	にぶい黄橙	古代	42トレンチ
15	土師器	無台碗	底径5.0	良	にぶい黄橙	古代	39トレンチ
16	須恵器	壷	底径8.4	良	褐灰	古代	91トレンチ
17	須恵器	瓶	底径9.0	良	灰	古代	100トレンチ
18	須恵器	甕	口径46.0	良	灰	古代	79トレンチ
19	土師器	甕		良	にぶい橙	古代	39トレンチ
20	中世土師器	皿	口径12.0	良	にぶい黄橙	13世紀	94トレンチ
21	中世土師器	皿	口径10.0 器高2.1	良	にぶい橙	13世紀	56トレンチ
22	青磁	碗	口径13.0	良	(胎)灰白 (釉)オリーブ灰	14世紀中葉～15世紀	102トレンチ
23	白磁	碗	高台径5.4	良	(胎)灰白 (釉)灰白	13世紀	85トレンチ
24	珠洲	片口鉢		良	灰白	V期	48トレンチ
25	越前	擂鉢		良	にぶい橙	16世紀	84トレンチ
26	珠洲	壷	底径9.8	良	灰	中世	102トレンチ
27	珠洲	壷		良	灰	中世	82トレンチ
28	珠洲	壷		良	灰白	中世	85トレンチ
29	羽口		外径7.0	良	浅黄橙		93トレンチ
30		壺・甕形土器	底径4.6	良	褐灰	弥生～古墳	張紙「ヤヨイ式」
31	須恵器	甕		良	灰	古代	張紙「スエキ（一）」
32	須恵器	甕		良	灰・灰赤	古代	
33	中世土師器	皿		良	にぶい橙	13世紀	張紙「ハジキ」
34	越前	壺・甕		良	にぶい褐	中世	
35	珠洲	壺		良	黄灰	中世	張紙「スエキ（三）」
36	珠洲	壺・甕		良	灰	中世	張紙「スエキ（二）」
37	珠洲	壺・甕		良	褐灰	中世	
38	珠洲	壺	底径8.2	良	灰	中世	
39	珠洲	鉢		良	灰	14世紀前葉～中葉	
40	珠洲	鉢	底径10.9	良	灰	中世	
41	珠洲系	鉢	底径13.0	やや不良	灰白	13世紀前半	張紙「スエキ（七）」
i	鉄滓	椀形鍛冶滓	5.9×4.5 厚1.7		暗青灰	（重量 70.1g）	
42	須恵器	杯蓋	口径11.0	やや不良	黄灰	古代	
43	須恵器	杯	口径12.0	良	灰	9世紀前葉	
44	須恵器	有台杯	高台径7.6	良	黄灰	古代	館北西部採集
45	青磁	碗	高台径5.3	良	(胎)黄灰 (釉)灰オリーブ	13世紀後半～14世紀前半	館東部採集
46	瀬戸美濃	反り皿		良	(胎)灰白 (釉)灰白	15世紀後葉～16世紀中葉	
47	瀬戸美濃	合子ヵ	底径2.8	良	にぶい黄橙	中世	館北西部採集
48	珠洲	甕		良	黄灰	13世紀中葉～後葉	
49	珠洲	壺・甕		やや不良	灰白	中世	
50	珠洲系	鉢	底径14.6	不良	灰白	中世	館北西部採集
51	（不明陶器）	壺	口径12.8	良	(胎)灰 (釉)暗赤褐	近世ヵ	館南西部採集
52	越前	壺・甕		良	灰褐	中世	
53	常滑	甕	口径56.6	良	にぶい橙	（13世紀～）14世紀前半	館北西部採集
54	瓦器	風炉	口径28.4	不良	(外)灰黄 (内)浅黄橙	14世紀末～16世紀	館北西部採集
ii	鉄滓	椀形鍛冶滓	8.2×7.5 厚4.0		オリーブ黒	（重量378.0g）	館東部採集
iii	鉄滓	椀形鍛冶滓	5.2×5.1 厚3.1		オリーブ黒	（重量118.8g）	館東部採集
iv	鉄滓	椀形鍛冶滓	5.1×3.0 厚2.8		オリーブ黒	（重量 86.3g）	館東部採集
v	鉄滓	椀形鍛冶滓	5.3×3.7 厚1.4		オリーブ黒	（重量 48.0g）	館東部採集
vi	鉄滓	椀形鍛冶滓	4.6×4.0 厚2.0		黒	（重量 54.6g）	館東部採集
vii	鉄滓	椀形鍛冶滓	6.9×5.3 厚2.1		オリーブ黒	（重量123.4g）	館東部採集
viii	鉄滓	椀形鍛冶滓	5.9×4.5 厚1.7		オリーブ黒	（重量 70.1g）	館東部採集
ix	鉄滓	椀形鍛冶滓	5.9×4.5 厚1.7		オリーブ黒	（重量 70.1g）	

第3表　坂田遺跡試掘調査主要出土遺物・“館屋敷”主要採集遺物一覧表

期を特定できた珠洲などの陶磁器類には、13～14世紀の製品に比重がある。特に、遠隔地からの流通品である常滑甕（53）は、新潟県では出土例が少なく、特筆すべきである。該期の豊富な物流の状況が推察されよう。15世紀についても、瓦器風炉（54）の存在は領主階級との関わりを示唆している（水澤1999）。坂田川の対岸で、近位置にある町口遺跡(14～15世紀)との関係などを検討する必要があろう。

註

1）分類の名称は筆者による。

2）51・53の産地については、垣内光次郎氏（財団法人石川県埋蔵文化財センター）から写真をご覧いただき、ご指導・ご助言を賜った。

3）鳴海忠夫氏のご教示によれば、氏が報告した以外にも古墳時代と思われる遺物があったとのことである。弥生時代については、他の地点も含め、今のところ本遺跡では不明確である。

3　調査成果のまとめ

1）遺跡の概観

坂田遺跡では、平成17年度と今回の二次に渡って本発掘調査を行った。しかし、調査面積は合計で約1,080㎡と遺跡全体から見れば極わずかなものであり、調査地点も遺跡範囲の縁辺部という極限られた範囲におけるものである。そのため、本報告書では、試掘調査の資料と表面採集資料を合わせて報告することにより、坂田遺跡の様相をできるだけ把握することに努めた。ここで、坂田遺跡の全体を概観し、まとめとしたい。

坂田遺跡では弥生時代以降の遺物が出土しているとされてきた。しかし、今回検討した遺物の中では弥生時代に属すると認められるものは確認できなかった。坂田遺跡で遺物が定量確認できるようになるのは８世紀後半頃からのことであり、９世紀代には、遺物量が増加するとともに集落の様相も次第に明らかとなっていく。本発掘調査で確認された遺構には柱穴と見られるピットや井戸・土坑、集落を区画する可能性がある溝、畝状遺構などがある。建物の配置などの居住域の詳細は、調査区が狭小であるため明らかにはできなかったが、居住域に隣接する畑地が存在する。この居住域と畑地との間は溝によって区画されており、祭祀に用いられたと見られる土器が廃棄された。この祭祀は、農耕に関わるものである可能性が指摘される。出土した須恵器には周辺の遺跡で確認されていない胎土や調整のものが一定量確認された。当期は、郡が関与する須恵器生産が衰退する過程の時期であり、国衙勢力が関与したと見られる佐渡小泊窯跡群産の須恵器が越後国にまで流通する。坂田遺跡においても佐渡産の須恵器が一般的となる中で、限定的に生産されたと見られる須恵器が出土していることから、領主層などの在地の有力者が須恵器生産に関与した可能性が想定された。別山川流域には、寺社や在地有力者に関わると見られる遺跡が見つかっており、郡司層の衰退の裏で、肥沃な生産力を背景に力を付けてきた者がこの地域に現れてきたものと考えられる。古代の遺物は９世紀前半から中頃に最も多くなるが、今回の発掘調査区内では10世紀代以降の様相は不明瞭である。

中世では、13世紀代以降に遺物が確認できるようになり、16世紀代に至る様々な遺物が出土している。特に、館屋敷と呼ばれる地点では、地表で多数の遺物が採取されており、その質や量は坂田遺跡の他の地点とは異なる様相を示す。館屋敷では館跡の存在が指摘されてきたが、今回の検討でも、他の地点とは異質な様相を見て取ることができた。発掘調査を行っていないため遺構の状況は全く不明であり、さらに検討を要するものではある。

2）まとめと今後の課題

坂田遺跡は、別山川上流域における大規模な集落遺跡の一つである。別山川流域では近年、集落遺跡の調査事例が増加している。坂田遺跡では、古代と中世の遺物が主に確認されているが、周辺の遺跡では古墳時代前期以降、様々な時代の集落遺跡の調査がなされている。特に、坂田地区に限ってみても、坂田川の対岸に位置する町口遺跡を始め、周辺で多くの遺跡が発見されて発掘調査も行われた。これらの遺跡には整理作業中のものが多いため、今後は坂田地区における遺跡の変遷やそれぞれの関係を捉えることが必要である。その上で、別山川流域における遺跡の展開、柏崎平野における位置付けなどを検討することにより、地域の歴史がさらに明らかとなっていくであろう。

《 引用参考文献 》

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』第２号　日本貿易陶磁研究会

柏崎市教育委員会　1999『角田－新潟県柏崎市・角田遺跡発掘調査報告書』　柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集

柏崎市教育委員会　2000『横山東遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・横山東遺跡群発掘調査報告書Ⅰ』　柏崎市埋蔵文化財調査報告書第34集

柏崎市教育委員会　2001『宮之下遺跡群－新潟県柏崎市・宮之下遺跡群発掘調査報告書』　柏崎市埋蔵文化財調査報告書第35集

柏崎市教育委員会　2007『坂田遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・坂田遺跡群発掘調査報告書－』　柏崎市埋蔵文化財調査報告書第50集

柏崎市教育委員会　2008『江ノ下－新潟県柏崎市与三・江ノ下遺跡発掘調査報告書－』　柏崎市埋蔵文化財調査報告書第52集

柏崎市教育委員会　2008『坂田遺跡群Ⅱ－新潟県柏崎市・坂田遺跡群発掘調査報告書－』　柏崎市埋蔵文化財調査報告書第53集

春日真実　1992「越後・佐渡における須恵器生産終末期の様相」『北陸古代土器研究』第2号　北陸古代土器研究会

春日真実　1994「越後における8世紀中頃の画期について」『北陸古代土器研究』第4号　北陸古代土器研究会

春日真実　1997「越後・佐渡における9世紀中葉の画期」『北陸古代土器研究』第6号　北陸古代土器研究会

春日真実　1999「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院

春日真実　2001「和島・出雲崎地域における７世紀末～10世紀の土器の変遷」『一般国道116号出雲崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ　梯子谷窯跡』（新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集）　新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

春日真実　2005「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について－「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に－」『新潟考古』第16号　新潟県考古学会

刈羽村教育委員会　1995『枯木Ａ遺跡－県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』刈羽村埋蔵文化財調査報告書第2集

笹澤正史　1997「越後頸城郡内の須恵器生産の推移と技術系譜の問題について」『北陸古代土器研究』第６号　北陸古代土器研究会

笹沢正史　1999「窯業」『新潟県の考古学』高志書院

坂井秀弥　1984「第Ⅵ章　1　今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会

坂井秀弥　1989「越後・佐渡における古代手工業生産の展開」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会

坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実　1991「佐渡の須恵器」『新潟考古』第2号　新潟県考古学会

坂井秀弥　1999「総論」『新潟県の考古学』高志書院

品田高志　1993「古代三嶋群と古代土器の様相」『柏崎市立博物館報』8　柏崎市立博物館

品田高志・伊藤啓雄　1999『角田』柏崎市教育委員会

品田高志　1997「前掛り遺跡における古代土器の様相」『前掛り』柏崎市教育委員会

田中一穂　2007「付編１　坂田遺跡出土の墨書土器について」『坂田遺跡群Ⅰ－新潟県柏崎市・坂田遺跡群発掘調査報告書』柏崎市埋蔵文化財調査報告書第53集

中野晴久　1994「赤羽・中野『生産地における編年について』」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久　2005「常滑・渥美」『全国シンポジウム　中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～　資料集』　同実行委員会

鳴海忠夫　1988「刈羽郡西山町の古城跡」『長岡郷土史』第25号　長岡郷土史研究会

鳴海忠夫　1992「刈羽郡西山町坂田の館跡－地籍図と遺物から把握した中世館跡の一例－」『長岡郷土史』第29号　長岡郷土史研究会

鳴海忠夫　2006「上杉家重臣　斎藤氏の城砦群について」『北陸の中世城郭』第16号

新潟県教育委員会　1984『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ　今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第35集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団　2001『国道116号　埋蔵文化財発掘調査報告書　梯子谷窯跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団　2005『一般国道8号　柏崎バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ　東原町遺跡　下沖北遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第140集

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団　2006『上信越自動車道関係発掘調査報告書ⅩⅥ 滝寺古窯跡群 大貫古窯跡群』新潟県埋蔵文化財調査報告書　第149集

新潟県考古学会 1999『新潟県の考古学』　高志書院

西山町教育委員会　2001『畠田遺跡発掘調査報告書－県営ほ場整備事業北野地区に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第5集

西山町教育委員会　2001『井ノ町遺跡発掘調査報告書－県営ほ場整備事業浜忠地区に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第6集

西山町教育委員会　2003『宮ノ前遺跡発掘調査報告書－県営ほ場整備事業北野地区に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第7集

西山町教育委員会　2005『坪ノ内塚群・坪ノ内遺跡発掘調査報告書－県代行町道南慶寺線道路改築工事に伴う発掘調査－』西山町文化財調査報告書第8集

西山町編纂委員会　1963『西山町誌』

西山町文化財調査審議会編　1970『西山町の民俗と文化財』　西山町役場

藤澤良祐　2001「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通－研究の現状と課題－」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品－東アジア的視点から－　資料集』（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会）　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

水澤幸一　1999「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第９集　帝京大学山梨文化財研究所

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』吉川弘文館

和島村教育委員会　2003『下ノ西遺跡Ⅳ－県営圃場整備事業（桐島桐原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』和島村埋蔵文化財調査報告書第14集

和島村教育委員会　2005『八幡林遺跡Ⅳ－一般国道116和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』和島村埋蔵文化財調査報告書第16集

遺構属性表

遺構番号	種別	グリッド	規模			表面覆土	所見・きり合い	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深度				
2	ピット	Y-7-6	28	27	21	暗褐色粘土			
3	ピット	Y-7-16	26	25	28	黒褐色粘土			
4	ピット	Y-7-17	27	25	20	黒褐色粘土			
5	ピット	Y-7-17	35	33	14	暗灰色粘土		土	
6	ピット	Y-7-17	26	20	8	暗褐色粘土			
7	ピット	Y-7-17	17	13	4	黒褐色粘土		土	
8	ピット	Y-7-17	24	19	8	暗褐色粘土			
9	ピット	Y-7-18	35	30	21	暗灰黄色粘土	10・11→9		
10	ピット	Y-7-18	15	13	5	暗灰黄色粘土	10・11→9	土	
11	ピット	Y-7-18	41	25	17	暗褐灰色粘土	10・11→9		
12	ピット	Y-7-18	27	23	8	暗褐色粘土			
13	柱穴	Y-7-18	27	15	24	暗灰色粘土			
14	ピット	Y-7-18	13	12	8	暗褐色粘土			
15	ピット	Y-7-20	31	30	5	灰黄色土		須・土	
18	ピット	Y-8-16	31	30	25	暗灰色粘土			
19	ピット	Y-8-11	23	23	4	暗灰褐色粘土	20→19		
20	ピット	Y-8-11	21	19	6	暗褐色粘土	20→19		
22	ピット	Y-8-12	29	12	16	暗灰黄色粘土			
25	柱穴	Y-8-13	33	26	22	暗褐色粘土			
26	ピット	Y-8-13	36	33	26	暗褐色粘土		土	
27	ピット	Y-8-13	32	27	13	褐灰色粘土			
28	ピット	Y-8-14	24	23	12	暗褐色粘土			
29	柱穴	Y-8-14	25	23	46	暗青灰色粘土			
31	ピット	Y-8-9	29	26	19	暗青灰色粘土			
32	ピット	Y-8-9	31	24	25	灰黄褐色粘土	33→32		
33	ピット	Y-8-9	34	24	19	暗褐色粘土	33→32		
34	ピット	Y-8-14	30	28	37	暗褐色粘土	35→34		
35	ピット	Y-8-14	20	15	26	暗褐灰色粘土	35→34		
36	柱穴	Y-8-14	35	33	29	灰黄色粘土			
37	ピット	Y-8-15	22	20	12	暗褐色粘土	38→37		
38	ピット	Y-8-15	28	21	13	暗褐色粘土	38→37		
39	ピット	Y-8-14	31	21	34	灰黄褐色粘土	40→39	土	
40	ピット	Y-8-14	35	25	18	暗青灰色粘土	40→39		
41	ピット	Y-8-15	24	18	9	暗褐色粘土			
42	ピット	Y-8-10	57	50	30	暗褐色粘土	43・44→42		
43	ピット	Y-8-10	24	13	26	暗褐色粘土	43→42		
44	ピット	Y-8-10	50	19	59	暗褐色粘土	44→42		断面崩落のため詳細不明
45	柱穴	Y-8-10	25	24	25	灰黄色粘土			
47	ピット	Y-8-15	23	22	37	暗褐色粘土			SB-1P2
48	柱穴	Y-8-15	22	12	21	暗褐色粘土			
49	柱穴	Y-8-10	26	23	16	暗灰黄色粘土			
50	ピット	Y-9-6	24	20	11	暗褐色粘土			
51	ピット	Y-9-6	27	27	28	暗褐色粘土			
52	ピット	Y-9-6	28	25	36	暗褐色粘土	53→52		SB-1P3
53	ピット	Y-9-6	25	23	37	暗青灰色粘土	53→52		
54	柱穴	Y-9-11	91	31	52	褐灰色粘土			
56	柱穴	Y-9-6	35	28	39	暗褐色粘土		土	
59	井戸	Y-9-17	134	112	119	褐灰色粘土		須・土	
60	ピット	Y-9-7	28	23	28	暗青灰色粘土			SB-1P4
63	柱穴	Y-9-7	34	32	35	暗褐色粘土	64→63		
64	ピット	Y-9-7	29	23	21	灰黄褐色粘土	64→63		
65	溝	Y-11-8	190	88	20	暗赤褐色粘土	65→66	須・土	
66	ピット	Y-11-8	31	30	10	暗赤灰色粘土	65→66	須	
67	ピット	Y-11-8	31	30	16	黒褐色粘土			
68	ピット	Y-8-13	25	22	23	暗褐色粘土		土	
69	柱穴	Y-8-16	−	34	30	黒褐色粘土			
70	柱穴	Y-8-15	−	33	32	黒褐色粘土			
71	溝	S-14-20	104	71	6	黄灰色粘土			
72	ピット	S-14-19	27	25	38	黒褐色粘土			
73	溝	Y-9-9	210	21	8	黒褐色粘土	137→73	須	
74	柱穴	Y-9-9	42	30	47	暗褐色粘土	73→74		
75	溝	Y-9-9	55	21	5	暗褐色粘土		須・土	
76	土坑	Y-9-14	161	82	41	黒色粘土		須・土	
78	溝	Y-9-5	33	38	8	褐灰色粘土			
79	ピット	Y-9-5	27	26	12	暗褐色粘土			
80	ピット	Y-9-5	39	37	40	黒褐色粘土		土	
81	ピット	Y-10-1	25	16	10	褐灰色粘土		須・土	
83	ピット	Y-10-7	45	39	13	褐灰色粘土	157→83	須・土	
84	ピット	Y-10-1	36	35	16	褐灰色粘土			
85	溝	Y-10	310	115	13	黒褐色粘土		須・土	
86	柱穴	Y-10-6	30	21	62	灰色粘土			
87	柱穴	Y-10-2	36	36	22	黒褐色粘土			
88	ピット	Y-10-2	20	17	29	暗褐色粘土		須	

遺構番号	種別	グリッド	規模			表面覆土	所見・きり合い	出土遺物	備考
			長軸	短軸	深度				
89	ピット	Y-10-3	30	27	61	暗褐色粘土			
90	ピット	Y-10-3	17	15	12	暗褐色粘土		須・土	SB-3P4
91	溝	Y-10-3	273	21	10	褐灰色粘土	92→91		2区SD6と繋がる
92	溝	X-10-23	72	28	29	灰黄褐色粘土	92→91		
93	井戸	X-10-25	284	152	129	黒色粘土		須・土	墨書土器出土
94	ピット	X-11-17	50	36	28	灰黄褐色粘土			SB-2P1
95	ピット	X-12-13	16	16	14	暗褐色粘土			
96	ピット	X-11-18	21	16	14	暗灰色粘土			SB-2P2
97	柱穴	X-11-18	24	23	34	黒色粘土			
99	溝	X-11-18	138	27	11	暗青灰色粘土	99→100→101		
100	ピット	X-11-19	38	33	15	暗青灰色粘土	99→100→101		SB-2P3
101	溝	X-11-19	330	22	12	暗褐色粘土	99→100→101	須	
102	ピット	X-11-19	24	20	11	灰黄褐色粘土			SB-2P4
103	溝	X-11-19	230	32	15	暗青灰色粘土	103→101・104		
104	ピット	X-11-15	28	24	59	黒褐色粘土	103→101・104		
105	溝	W-13-3	126	40	12	暗青灰色粘土		須・土	2区SD17bと繋がる
106	土坑	W-13-4	60	52	18	暗褐灰色粘土		須	
108	柱穴	V-13-19	34	33	28	黒褐色粘土	137→107→108		
109	ピット	V-13-18	28	28	17	黒褐色粘土			
111	ピット	V-13-19	21	20	10	褐灰色粘土			SA-1P4
112	ピット	V-13-15	26	24	21	褐灰色粘土			SA-1P3
115	ピット	V-13-15	21	18	14	褐灰色粘土			
116	ピット	V-13-15	33	30	21	暗褐色粘土		土	
117	ピット	V-13-10	40	33	22	灰褐色粘土			SA-1P2
118	ピット	V-13-5	32	30	39	灰褐色粘土			
119	ピット	V-13-10	19	18	5	褐灰色粘土			
120	ピット	V-13-10	33	31	16	褐灰色粘土		須・土	SA-1P1
121	柱穴	V-14-19	39	34	56	褐灰色粘土			
122	ピット	U-13-25	34	31	36	灰褐色粘土			
123	ピット	U-13-25	19	16	6	褐灰色粘土			
127	溝	U-13-20	75	25	6	褐灰色粘土			
128	ピット	U-13-16	30	25	10	褐灰色粘土			
129	ピット	U-13-16	26	25	7	褐灰色粘土			
130	ピット	U-14-11	37	34	6	灰黄褐色粘土			
134	ピット	V-13-19	30	11	18	褐灰色粘土			SA-1P5
136	柱穴	W-13-3	31	16	23	暗青灰色粘土		須・土	
137	溝	U-13-15	488	38	16	オリーブ色黒粘土			
139	溝	X-12-11	130	48	12	暗緑灰色粘土			
140	ピット	X-11-15	40	24	12	黒褐色粘土			
141	溝	X-12-6	86	142	34	灰色砂質土		須	
143	ピット	X-12-7	31	29	35	暗青灰色粘土			
144	溝	X-12-7	102	48	26	黒色粘土			
145	井戸	X-12-8	158	112	175	黒色粘土		須・土・白・木	
147	溝	X-12-3	160	36	22	灰色粘土		土	
148	ピット	X-12-4	22	16	18	黒褐色粘土			
149	ピット	X-12-4	23	10	10	暗青灰色粘土			
150	溝	W-12-25	83	48	10	緑灰色砂質土		土	
151	溝	W-12-25	88	38	16	オリーブ色黒粘土		須・土	
152	溝	W-13-21	36	22	6	緑灰色粘土			
154	溝	W-13-21	82	42	5	暗青灰色粘土		土	
155	溝	W-13-21	50	28	5	緑灰色粘土		須・土	
157	溝	Y-10	186	342	36	オリーブ色黒粘土		須・土	
158	溝	X-11-20	200	340	16	暗緑灰色粘土	158→93・159	須・土	2区SD3と同一
159	ピット	X-11-21	27	11	21	黒褐色粘土	158→159		
160	溝	X-11-24	96	25	12	暗青灰色粘土			
161	ピット	X-11-24	25	22	27	黒色粘土			
162	ピット	X-11-25	22	14	41	褐灰色粘土			
163	柱穴	X-11-20	21	20	31	黒色粘土			

遺物観察表

No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			胎土			焼成	調整等	備考
				口径	底径	器高	含有物	色調	分類			
1	S-120	須恵器	杯蓋	—	—	(2.1)	白色・透明・骨針	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 天井部:ヘラケズリ	
2	S-93	須恵器	有台杯	12.8	—	(4.9)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
3	S-93	須恵器	無台杯	11.6	7.2	2.7	白色・透明	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	鉄分吹き出し
4	S-93	須恵器	無台杯	12.2	6.8	3.3	白色・透明	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラケズリ	
5	S-93	須恵器	無台杯	12.2	—	(2.6)	白色・透明・骨針	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ	鉄分吹き出し
6	S-93	須恵器	無台杯	12.2	—	2.9	白色・透明	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ	
7	S-93	須恵器	無台杯	13.4	—	(2.7)	白色	灰白	D	還元・やや不良	内外面:ロクロナデ	
8	S-93	須恵器	無台杯	—	8.0	(1.2)	白色	灰	D	還元・やや不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
9	S-93	須恵器	無台杯	—	6.7	(1.6)	白色・褐色	底部外面:灰黄 体部:灰黄	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
10	S-93	須恵器	無台杯	12.8	6.7	3.3	白色	黄灰	A	還元・不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「狼□」
11	S-93	土師器	無台碗	12.6	—	(3.2)	白色・褐色・黒色	橙		酸化・良	内外面:ロクロナデ	体部調整剥離
12	S-93	土師器	無台碗	—	4.9	(1.4)	白色・褐色	黄橙		酸化・良		
13	S-93	土師器	無台碗	15.6	6.2	5.6	白色	黄橙		酸化・良	内面:ロクロナデ　外面:ヘラミガキ 底部ヘラ切り	墨書「□」
14	S-93 包含層	須恵器	長頸瓶	—	8.8	(18.6)	白色・黒色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
15	S-93	須恵器	長頸瓶	—	—	(3.5)	白色・透明			還元・良	内外面:ロクロナデ	
16	S-93	須恵器	甕	—	—	—	白色・透明	黄灰		還元・良	外面:平行叩き　内面:同心円	
17	S-93	須恵器	甕	—	—	—	白色	灰		還元・良	外面:平行叩き　内面:同心円	焼成前に枝状の圧痕
18	S-93	須恵器	甕	34.0	—	(40.3)	白色・透明	灰		還元・良	頸部:ロクロナデ　体部外面:平行叩き 体部内面:同心円あて具	焼膨れが激しい
19	S-93	土師器	鍋	42.0	—	(13.2)	白色・褐色 黒色	外面にぶい褐色 内面灰白		酸化・良	内外面:ロクロナデ　外面:格子叩き 内面:同心円あて具	外面煤付着
20	S-93	土師器	長甕	—	—	(2.1)	白色・透明 骨針	淡橙		酸化・良	内外面:ロクロナデ	
26	S-145	土師器	皿	—	5.8	(2.4)	白色・透明	外面:黒褐 内面:灰黄褐		酸化・良	底部:糸きり	外面煤付着
27	S-145	白磁	皿	12.0	5.8	3.6	黒色	灰白				
28	S-145	須恵器	有台杯	—	8.2	(2.3)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ　底部:ヘラ切り	
29	S-145	須恵器	長頸瓶	—	—	(5.5)	白色・黒色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
35	S-76	須恵器	無台杯	12.0	—	(2.2)	白色	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ	
36	S-76	須恵器	無台杯	13.0	8.0	3.1	白色・透明	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
37	S-76	須恵器	無台杯	12.6	7.4	3.1	白色	灰	D	還元・不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	2区No.31と同じ
38	S-76	須恵器	無台杯	—	6.6	(1.1)	白色	灰	A	還元・やや不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
39	S-76	土師器	甕	—	—	—	白色・透明 褐色	にぶい橙		酸化・やや不良	外面:平行叩き	
40	S-76	土師器	長甕	—	9.0	(5.5)	白色・褐色 黒色	灰黄褐		酸化・良		外面煤付着
41	S-75	須恵器	無台杯	13.2	—	(3.0)	白色	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ	
42	S-106	須恵器	有台杯	13.0	—	(3.1)	白色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ	
43	S-65	須恵器	有台杯	10.2	5.8	5.1	白色・透明 褐色・骨針	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	鉄分吹き出し
44	S-65	土師器	長甕	—	9.4	(4.4)	白色・透明 黒・褐色	にぶい黄橙		酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:糸きり	
45	S-66	須恵器	有台杯	12.5	—	(4.6)	白色・黒色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	鉄分吹き出し
46	S-158	須恵器	有台杯	13.0	—	(4.4)	白色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
47	S-158	須恵器	無台杯	11.4	7.0	2.4	白色	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
48	S-158 包含層	須恵器	無台杯	12.8	9.1	2.7	白色	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	
49	S-158	須恵器	無台杯	13.2	—	(2.6)	白色・透明	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ	
50	S-158	須恵器	無台杯	13.4	8.0	2.8	白色・黒色	灰白	D	還元・不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
51	S-158	須恵器	無台杯	—	7.0	(2.0)	白色	灰白	C	還元・不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	
52	S-158	須恵器	無台杯	—	7.6	(2.0)	白色・骨針	底部:灰白 体部:にぶい橙	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	

No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			胎土			焼成	調整等	備考
				口径	底径	器高	含有物	色調	分類			
53	S-158	須恵器	無台杯	13.0	7.6	3.4	白色	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「猿□」
54	S-158	須恵器	無台杯	13.0	7.6	3.8	白色・骨針	体部:灰白 底部:浅黄橙	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	墨書「主」カ
55	S-158	須恵器	無台杯	13.2	8.3	4.2	白色・透明	底部:にぶい橙 体部:灰白	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「主」カ
56	S-158	須恵器	無台杯	13.6	8.0	3.8	白色・褐色	底部:にぶい橙 体部:灰白	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「猿□」
57	S-158	須恵器	無台杯	13.2	7.6	3.8	白色・骨針	体部～口縁:灰白 底部:褐灰	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「□」
58	S-158 包含層	須恵器	無台杯	—	7.5	(1.2)	白色・骨針	底部外面:明褐灰 体部:灰	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「田」カ
59	S-158	須恵器	無台杯	—	8.0	(2.4)	白色	灰	A	還元・やや不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
60	S-158	土師器	無台碗	—	5.6	1.6	白色	橙		酸化・やや不良		
61	S-158	土師器	小甕	10.9	8.6	5.6	白色・褐色 黒色	内面:灰黄 外面:にぶい褐		酸化・やや不良	内面:ロクロナデ	外面煤付着
62	S-157	須恵器	杯蓋	(10.6)	—	(1.8)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
63	S-157	須恵器	杯蓋	14.2	—	(2.2)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
64	S-157	須恵器	無台杯	12.2	7.2	3.4	白色・透明	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
65	S-157	須恵器	無台杯	—	7.5	(1.0)	白色・骨針	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	
66	S-157	須恵器	無台杯	13.0	8.6	2.7	白色・透明	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	墨書「□」
67	S-157	土師器	無台碗	12.2	6.0	3.7	白色・褐色	橙		酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:糸きり	
68	S-83	須恵器	有台杯	(14.5)	—	(5.8)	白色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
69	S-83	須恵器	無台杯	—	8.4	(1.4)	白色・透明 黒色	灰白	C	還元・不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
70	S-101	須恵器	無台杯	13.2	9.0	3.5	白色	灰5	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
71	S-107	須恵器	甕	—	—	—	白色	灰		還元・良	外面:格子叩き	
72	S-141	須恵器	杯蓋	(15.4)	—	(1.9)	白色・黒色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 天井部:ロクロケズリ	
73	S-155	須恵器	無台杯	—	7.8	(2.8)	白色	体部:灰 底部:にぶい黄橙	B	酸化・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
74	S-87	須恵器	甕	—	—	—	白色	灰		還元・良	外面:平行叩き 内面:カキメ	
75	S-15	須恵器	杯蓋	(14.6)	—	(2.0)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 天井部:ロクロケズリ	
76	S-88	須恵器	甕	—	—	—	白色	灰		還元・良	外面:平行叩き 内面:カキメ	外面弱酸化気味
77	S-81	須恵器	有台杯	12.8	—	(3.4)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
78	包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(1.1)	白色	灰		還元・良	内面:ロクロナデ	
79	包含層	須恵器	杯蓋	—	—	(0.9)	白色・黒色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ 天井部:ヘラケズリ	
80	包含層	須恵器	杯蓋	15.0	—	(2.5)	白色・黒色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ	
81	包含層	須恵器	有台杯	—	7.8	(1.5)	白色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ	
82	包含層	須恵器	有台杯	—	7.2	(2.1)	白色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
83	包含層	須恵器	有台杯	—	(9.4)	(1.0)	白色	にぶい赤褐		酸化・良	内面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
84	廃土	須恵器	有台杯	—	(2.1)	7.0	白色・透明 骨針	黄灰		還元・良	内画面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
85	包含層	須恵器	無台杯	12.2	7.4	2.9	白色・透明	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
86	包含層	須恵器	無台杯	12.0	7.4	2.5	白色・透明	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	鉄分吹き出し
87	包含層	須恵器	無台杯	12.4	—	(2.3)	白色	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ	鉄分吹き出し
88	包含層	須恵器	無台杯	12.6	8.6	2.9	白色	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
89	廃土	須恵器	無台杯	12.1	7.4	3.4	白色	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
90	S-156	須恵器	無台杯	12.8	7.9	2.7	白色・褐色 骨針	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
91	S-156	須恵器	無台杯	—	6.7	(1.8)	白色・骨針	灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り→ナデ	
92	包含層	須恵器	無台杯	—	8.0	(2.0)	白色	灰白	D	還元・やや不良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	
93	包含層	須恵器	無台杯	—	7.8	(1.5)	白色	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り未調整	
94	包含層	須恵器	無台杯	12.0	7.8	2.9	白色	黄灰	A	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「禾」

No.	出土地点	種別	器種	法量(cm)			胎土			焼成	調整等	備考
				口径	底径	器高	含有物	色調	分類			
95	廃土	須恵器	無台杯	—	7.0	(2.0)	白色・黒色	灰	D	還元・良	内外面:ロクロナデ 底部:ヘラ切り	墨書「猿□」
96	包含層	土師器	無台碗	11.8	—	(3.5)	白色・褐色 骨針	灰白		酸化・良	内外面:ロクロナデ	
97	包含層	土師器	無台碗	14.2	6.2	3.8	白色・褐色	浅黄橙		酸化・不良	外面:ロクロナデ 底部:糸切り	
98	包含層	土師器	無台碗	—	4.9	(1.2)	白色	橙		酸化・不良	内外面:ロクロナデ 底部:糸きり	
99	包含層	須恵器	長頸瓶	—	—	(10.4)	白色・黒色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ	
100	包含層	須恵器	甕	—	—	—	白色	黄灰		還元・良	外面:平行叩き	
101	包含層	須恵器	甕	—	—	—	白色	浅黄橙		酸化・不良	外面:平行叩き 内面:同心円あて具	
102	包含層	土師器	鍋	—	—	—	白色	灰		還元・良	外面;平行叩き 内面:同心円あて具	
103	包含層	土師器	鍋	—	—	(3.7)	白色・褐色 黒色	浅黄橙		酸化・不良		
104	表採	須恵器	長頸瓶	—	—	—	白色・黒色	灰白		還元・良	内外面:ロクロナデ	
105	包含層	珠洲	壺	—	6.0	(4.3)	白色・黒色	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 体部外面:クシガキ　底部:糸きり	
106	包含層	珠洲	甕	—	—	—	白色・黒色	灰		還元・良	外面:平行叩き	
107	包含層	珠洲	甕	—	—	—	白色・橙	灰		還元・良	外面:平行叩き	
108	包含層	珠洲	甕	—	—	—	白色	灰		還元・良	外面:平行叩き	
109	包含層	珠洲	片口鉢	26.0	—	(4.4)	白色・透明	灰		還元・良	内外面:ロクロナデ 内面:オロシメ	
110	包含層	珠洲	片口鉢	24.8	—	(4.8)	白色・黒色	灰		還元・やや不良	内外面:ロクロナデ 内面:オロシメ	
111	包含層	肥前	皿	11.0	—	(2.1)	白色	胎土:にぶい褐 釉:灰		酸化・良	外面:ロクロナデ	

報告番号	出土地点	器種	法量(cm)			木取り	製作痕等の所見	備考
			長さ	幅	厚さ			
21	S-93 暗灰色土	板状木製品	32.7	17.6	5.3	芯去り	分割材、上下切り落とし	
22	S-93 暗灰色土	棒状木製品	61.9	10.2	5.3	芯去り	分割材、上下切り落とし	
23	S-93 暗灰色土	棒状木製品	59.3	6.8	6.0	芯去り	分割材、上下切り落とし	
24	S-93 暗灰色土	板状木製品	74.1	12.4	7.1	芯去り	分割材、下部切り落とし	
25	S-93 暗灰色土	板状木製品	87.7	25.8	4.8	芯去り	分割材、下部切り落とし	
30	S-145 下層	板状木製品	19.9	10.5	1.8	柾目	加工痕あり、下部・右側欠損	
31	S-145 下層	板状木製品	19.9	10.5	1.7	柾目	加工痕あり、下部・左側欠損	
32	S-145 下層	板状木製品	48.6	8.8	1.9	柾目	加工痕あり、上下欠損	
33	S-145 下層	摘み状木製品	19.0	3.6	3.8	柾目	左右中央に摘み状の窪みを作る	
34	S-145 下層	円盤状木製品	27.6	31.6	2.8	柾目	加工痕あり、裏面炭化	

報告番号	出土地点	種別	法量(cm・g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
112	X-12-12	鎌	7.9	2.6	0.3	17.0	
113	w-12-12	用途不明	11.6	1.3	0.5	28.0	
114	w-13-4	鉄滓	5.3	3.8	3.0	42.0	

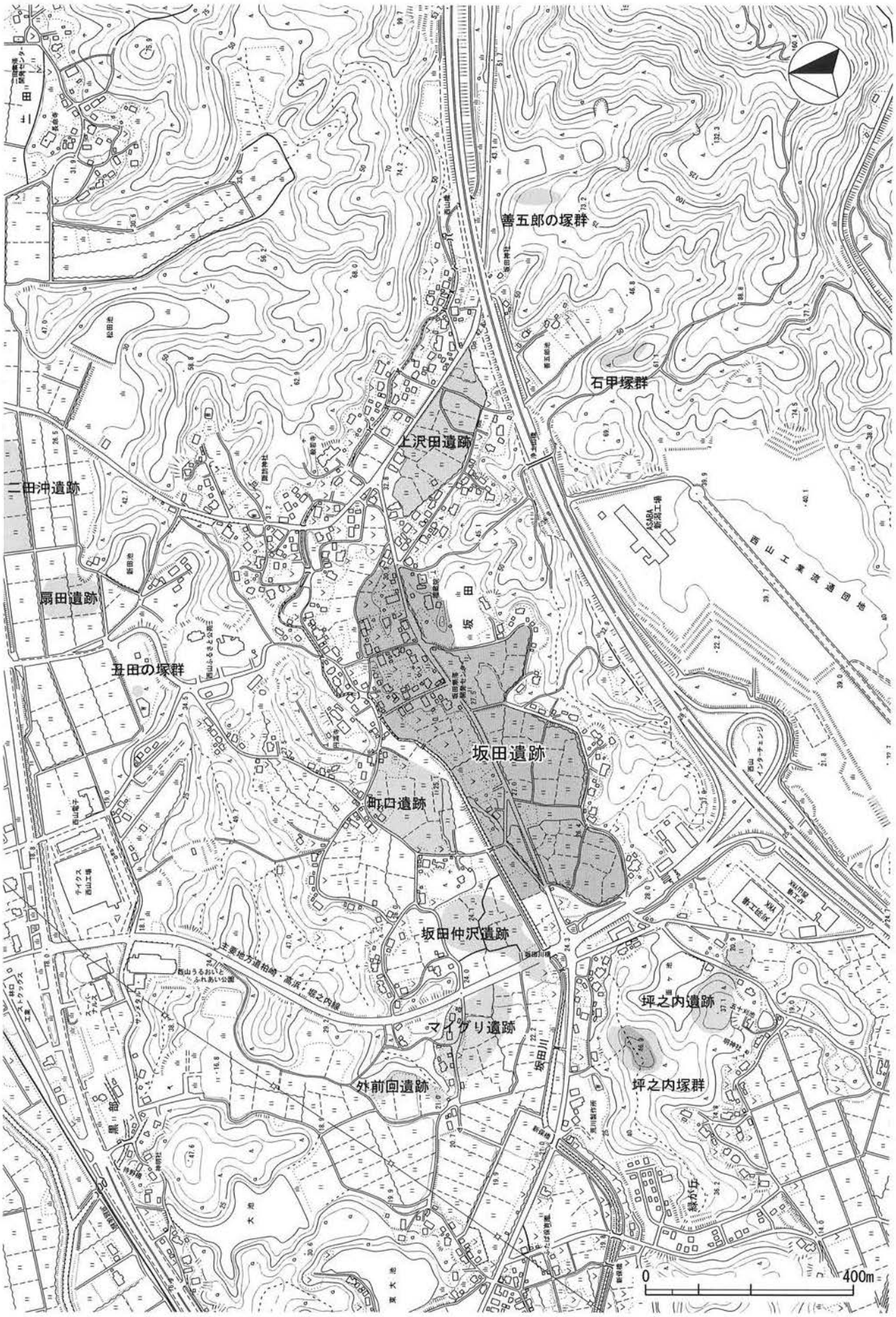
図　　版

凡　例

1．　ここには、遺跡全体及び遺構・遺物に関する実測図と写真を収める。図面図版と写真図版に区分されるが、図版は通し番号となっている。

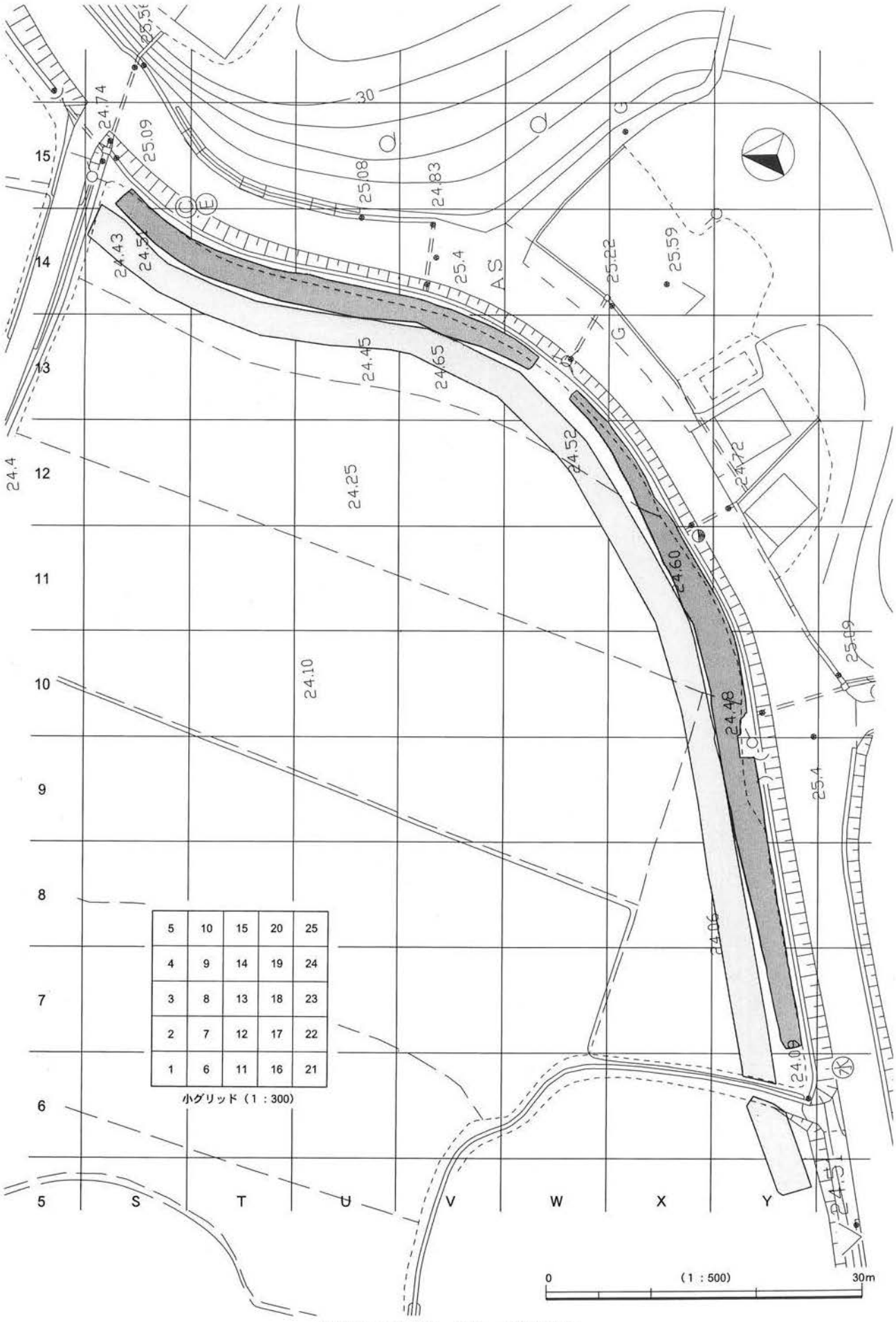
2．　図面図版には、方位と縮尺を付した。方位は全て真北である。

3．　写真図版に示した方位は、対象物に向かった方向を大まかに示したものである。

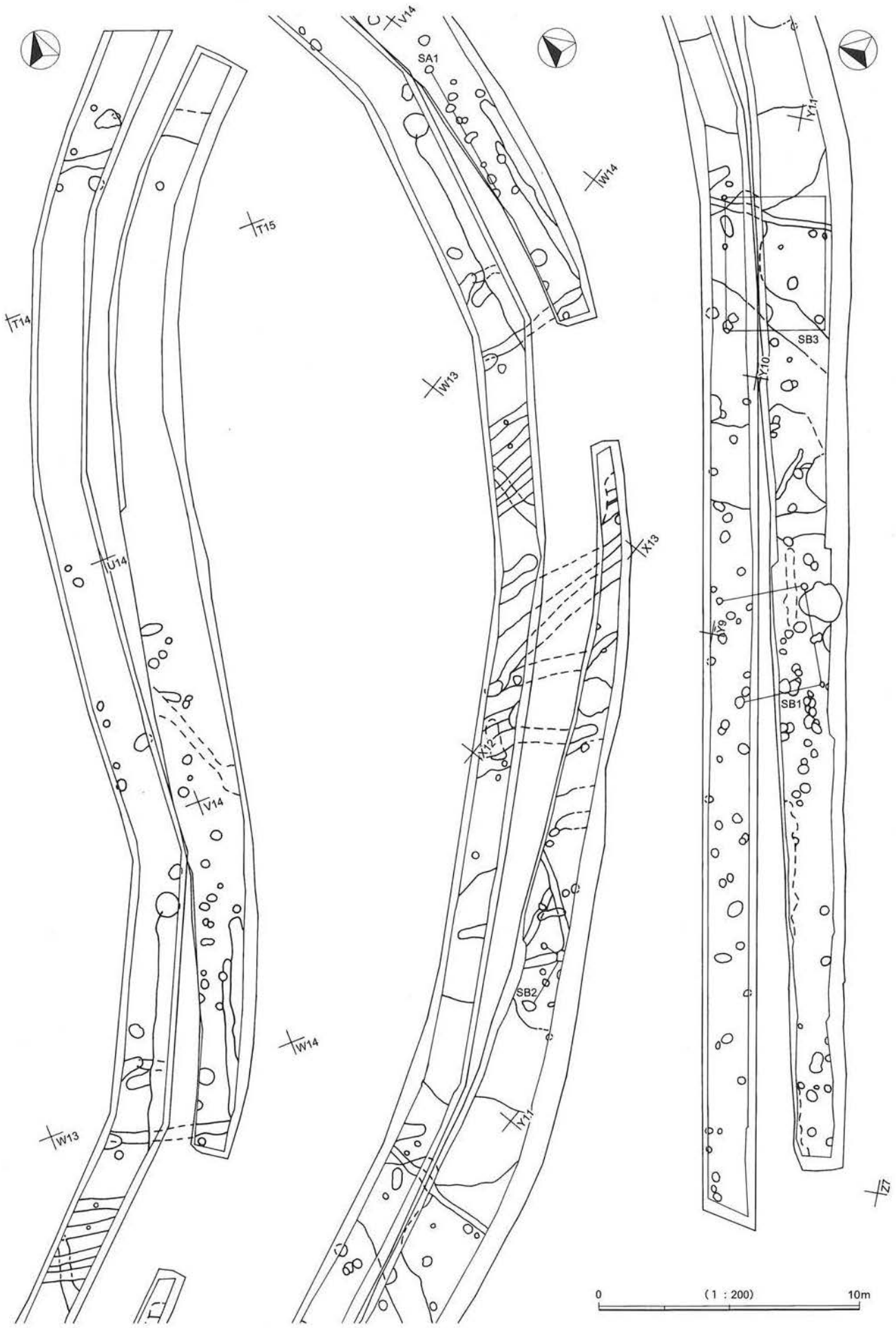


坂田遺跡の位置と周辺の地形

図版 2

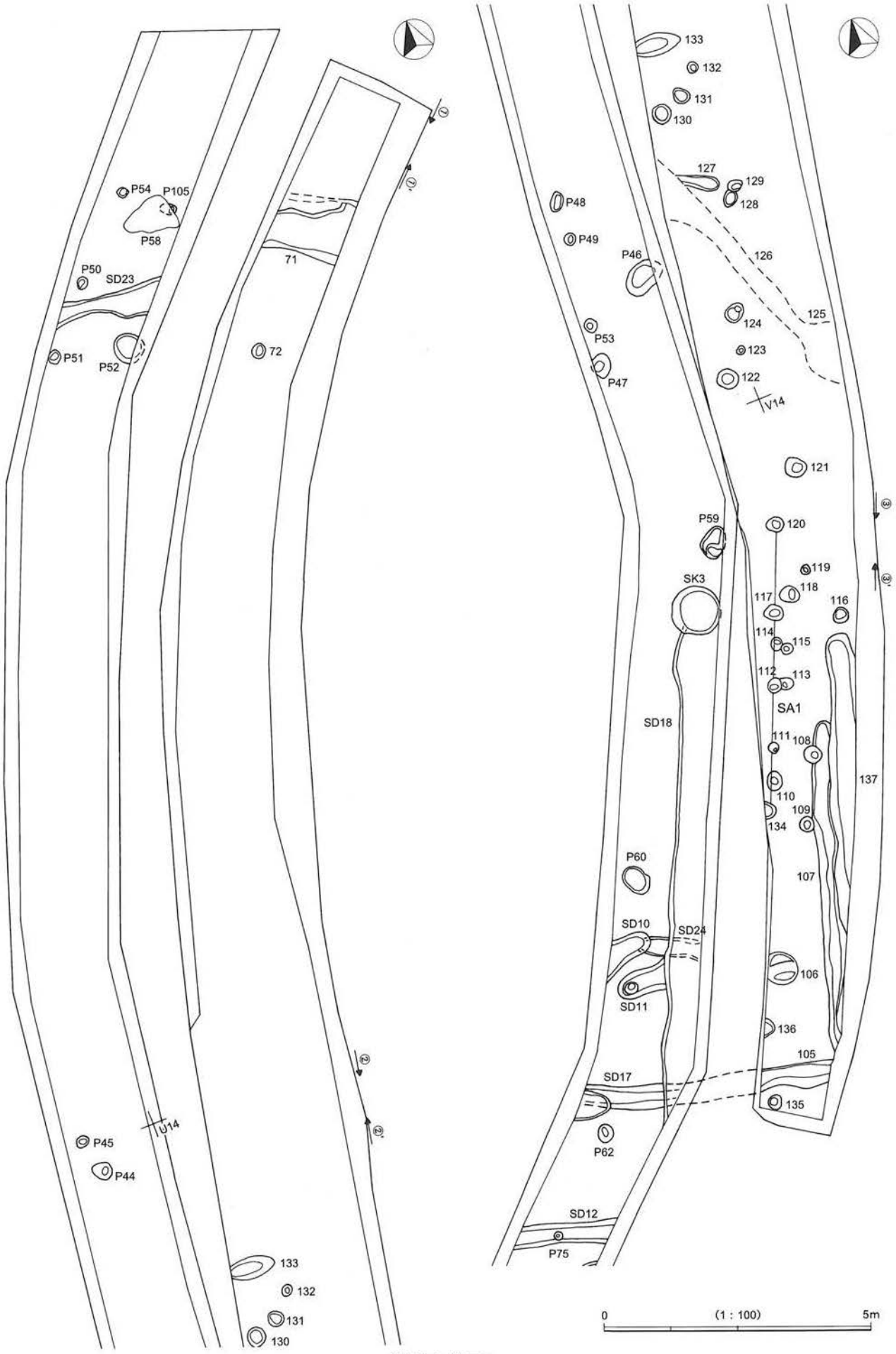


調査区の位置とグリッド配置図

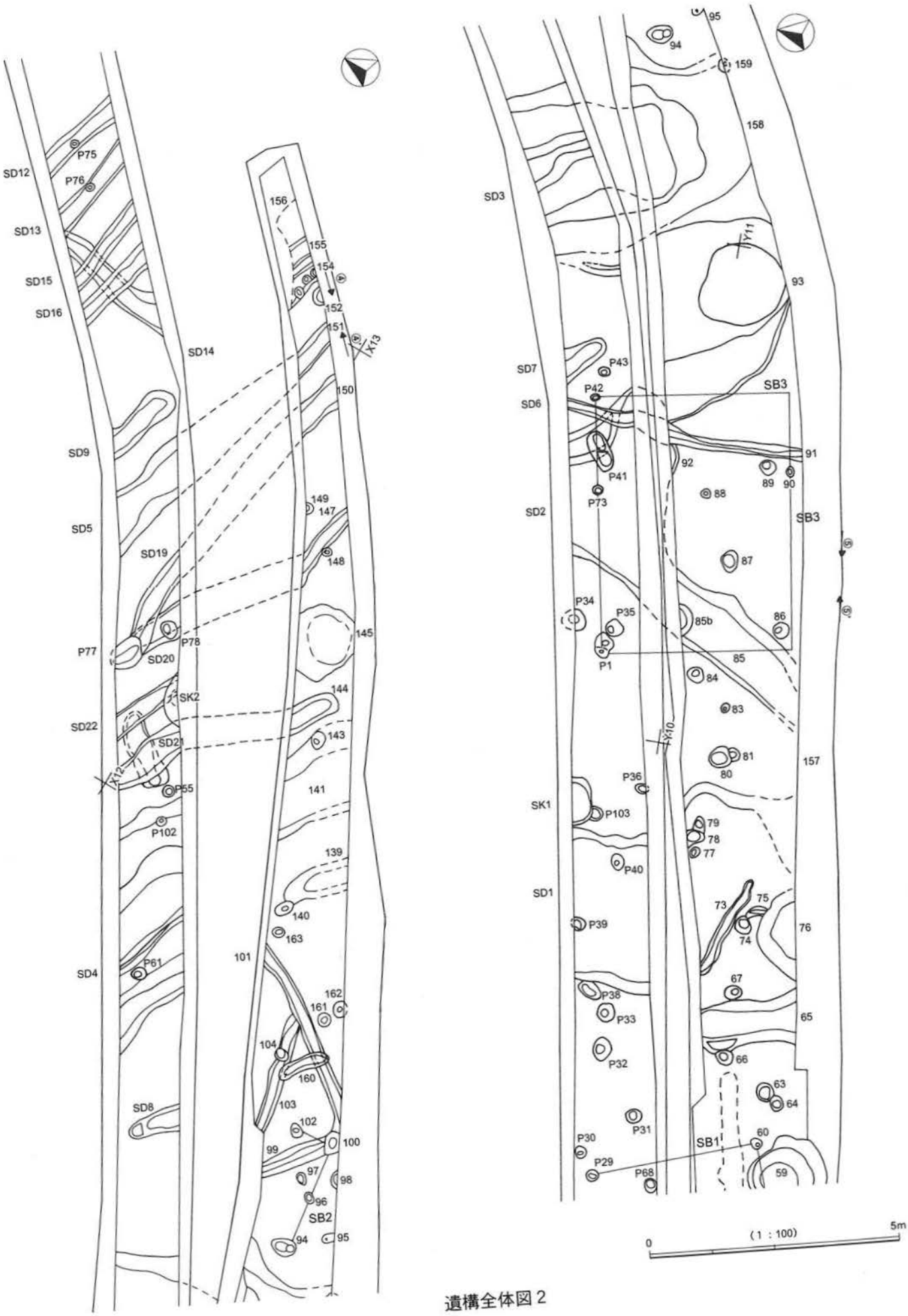

T14
T15
U14
V14
W13
W14
SA1
V14
W14
W13
X13
X12
SB2
Y11
Y11
SB3
Y10
Y9
SB1
Z7
0
(1 : 200)
10m

遺構全体配置図

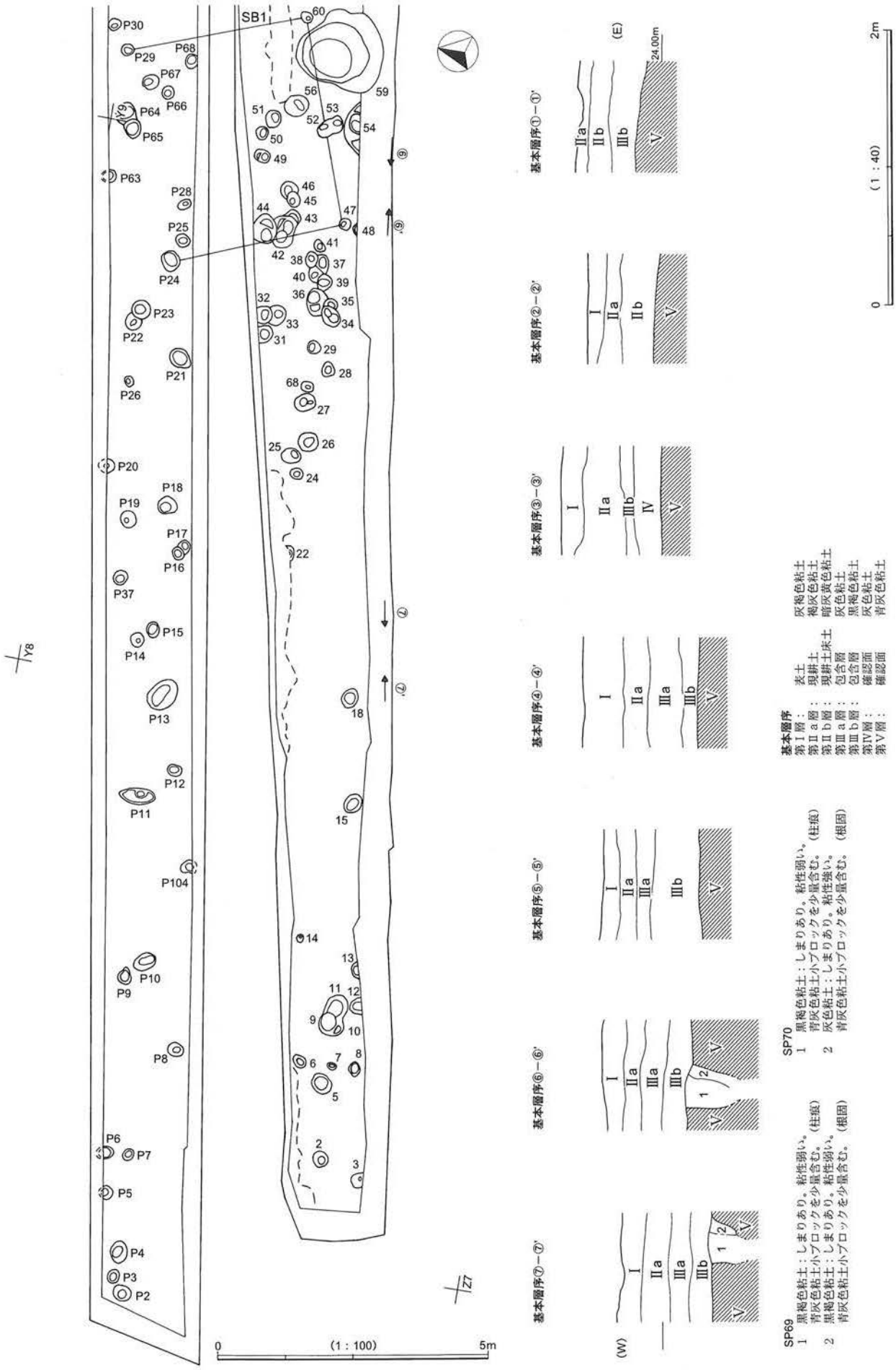
図版 4


P54
P105
P58
P50
SD23
P51
P52
71
72
P45
P44
U14
133
132
131
130
P48
P49
P46
P53
P47
127
129
128
126
125
124
123
122
V14
121
P59
120
119
118
117
116
SK3
114
115
112
113
SA1
SD18
111
108
110
109
134
137
P60
107
SD10
SD24
106
SD11
136
105
SD17
135
P62
SD12
P75
0
(1 : 100)
5m

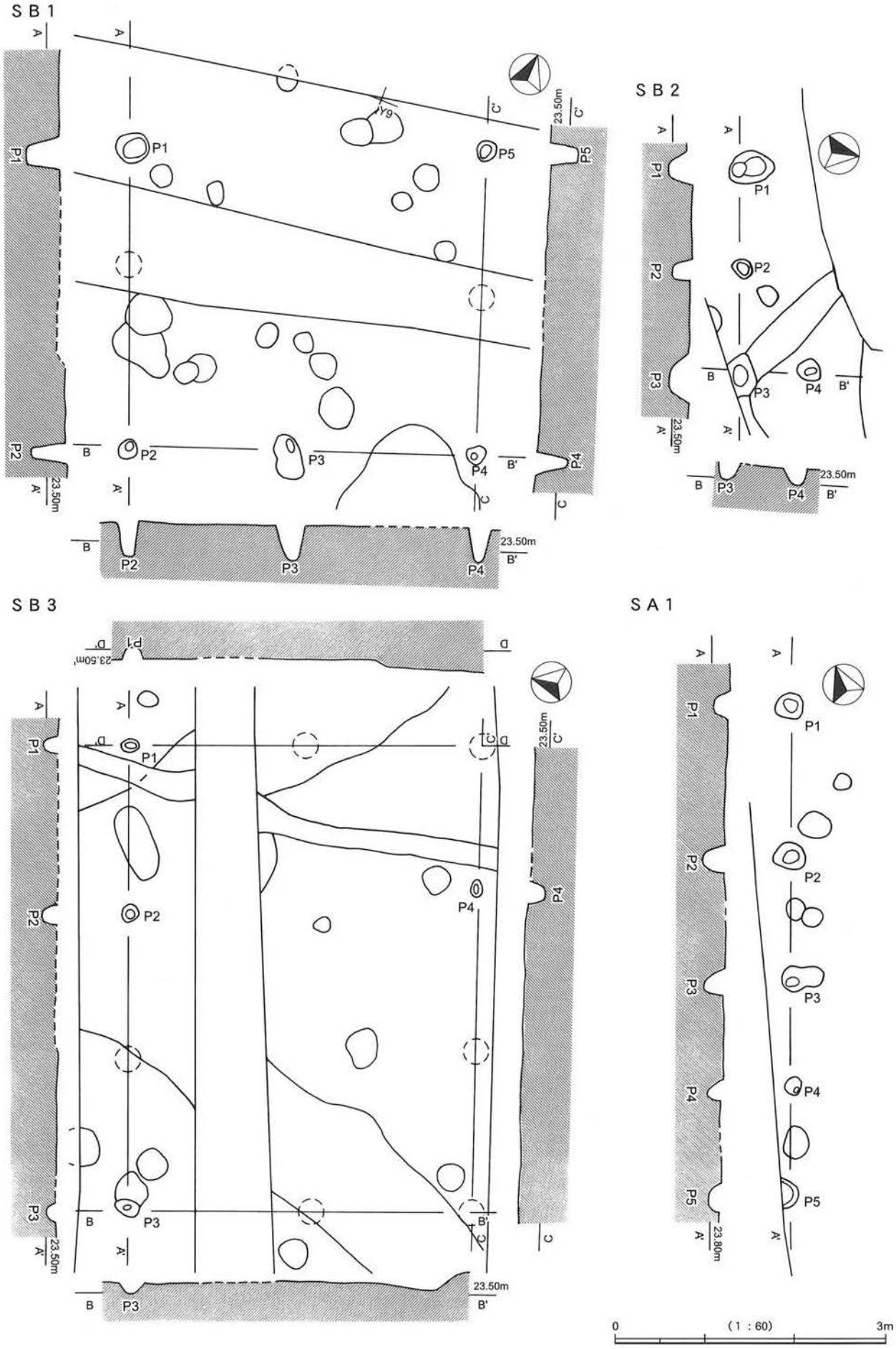
遺構全体図 1


SD12
SD13
SD15
SD16
SD14
SD9
SD5
SD19
SD20
SD22
SD21
SD4
SD8
SD3
SD7
SD6
SD2
SK1
SD1
SB1
SB2
SB3
P75
P76
P77
P78
P55
P102
P61
P43
P42
P41
P73
P34
P35
P1
P36
P103
P40
P39
P38
P33
P32
P31
P30
P29
P68
X10
X11
X12
X13
(1 : 100)
0
5m

遺構全体図 2


SB1
基本層序①－①'
基本層序②－②'
基本層序③－③'
基本層序④－④'
基本層序⑤－⑤'
基本層序⑥－⑥'
基本層序⑦－⑦'
(E)
(W)
24.00m
0
(1：40)
2m
0
(1：100)
5m
基本層序
第Ⅰ層：表土
第Ⅱa層：現耕土
第Ⅱb層：現耕土床土
第Ⅲa層：包含層
第Ⅲb層：包含層
第Ⅳ層：確認面
第Ⅴ層：確認面
灰褐色粘土
褐灰色粘土
暗灰黄色粘土
灰色粘土
黒褐色粘土
灰色粘土
青灰色粘土
SP70
1 黒褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
青灰色粘土小ブロックを少量含む。（柱痕）
2 灰色粘土：しまりあり。粘性強い。
青灰色粘土小ブロックを少量含む。（根固）
SP69
1 黒褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
青灰色粘土小ブロックを少量含む。（柱痕）
2 黒褐色粘土：しまりあり。粘性弱い。
青灰色粘土小ブロックを少量含む。（根固）

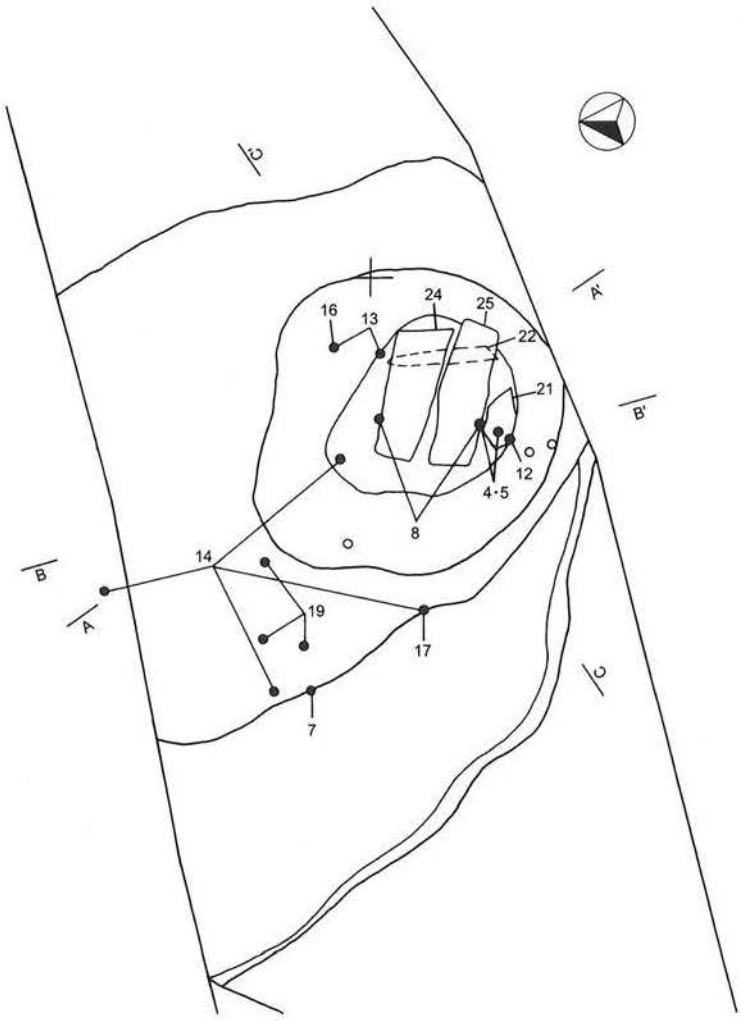
遺構全体図３・基本層序

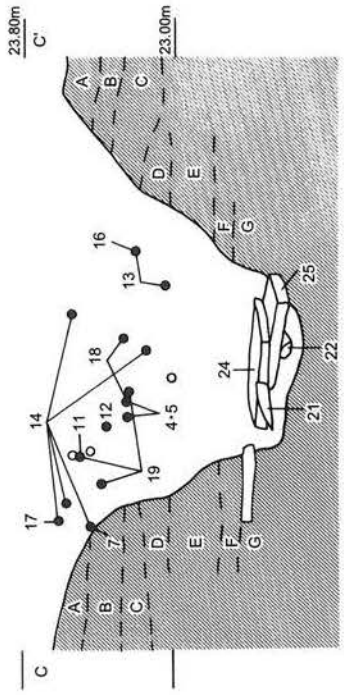


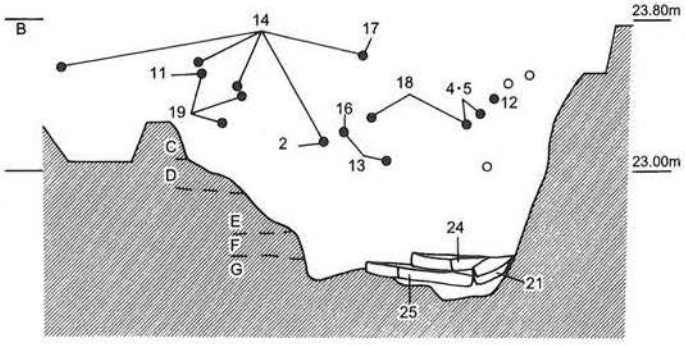
遺構個別図 1

図版8

SE93

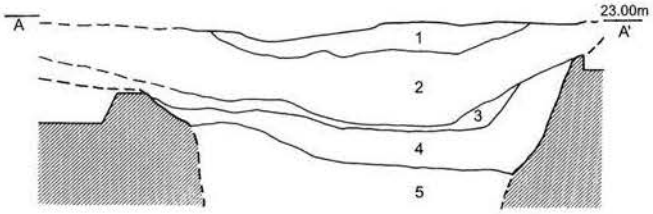






SE93遺構外

A　青灰色粘土：
　　しまりあり。粘性強い。
B　青灰色砂質土：
　　しまりあり。粘性強い。
C　青灰色粘土：
　　しまりあり。粘性強い。
D　黒褐色粘土：
　　しまりあり。粘性強い。
E　緑灰色砂：
　　しまり非常に強い。粘性なし。
F　オリーブ灰色粘土：
　　しまり非常に強い。粘性強い。
G　オリーブ灰色粘土：
　　自然木包含土層。腐植物多い。
　　しまり非常に強い。粘性強い。



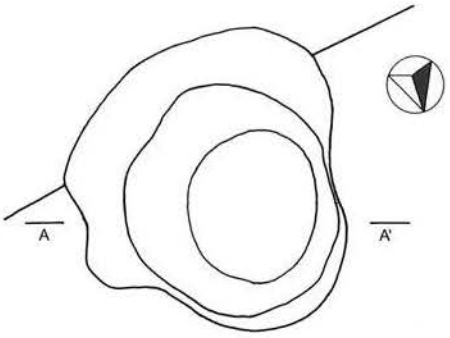
SE93

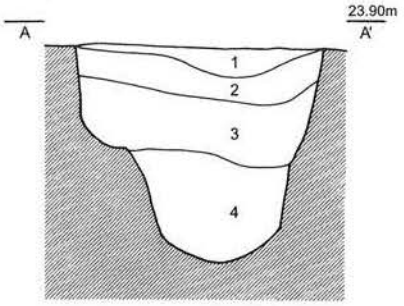
1　黒色粘土：しまりあり。粘性強い。
　　褐灰色粘土が混ざる。
2　黒色粘土：しまりあり。粘性強い。腐植物多い。
　　褐灰色粘土が混ざる。
3　オリーブ黒色粘土：ソフト。粘性強い。腐植物多い。
　　黒褐色粘土が混ざる。
4　オリーブ黒色粘土：ソフト。粘性強い。腐植物多い。
　　暗青灰色粘土小ブロックを含む。
5　緑灰色砂質土：しまりあり。粘性あり。
　　5㎜木炭粒を少量含む。黒褐色粘土が混ざる。

0　（1：40）　2m

遺構個別図2

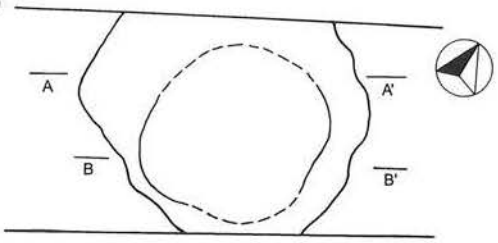
SE59

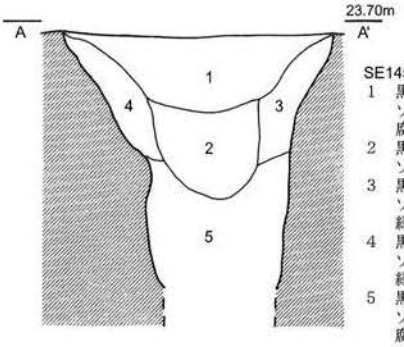




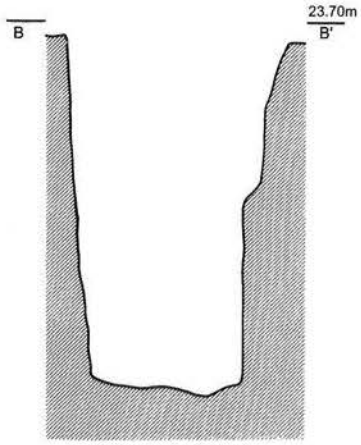
SE59
1　褐灰色粘土：しまりあり。粘性弱い。
　木炭粒を極少量含む。褐灰色粘土を少量含む。
2　暗灰色粘土：しまりあり。粘性強い。
　木炭粒を極少量含む。灰色粘土小ブロックを少量含む。
3　暗灰色粘土：しまりあり。粘性強い。
　灰色粘土小ブロックを多量含む。
4　暗灰色砂質土：しまりあり。粘性強い。木炭粒を少量含む。

SE145

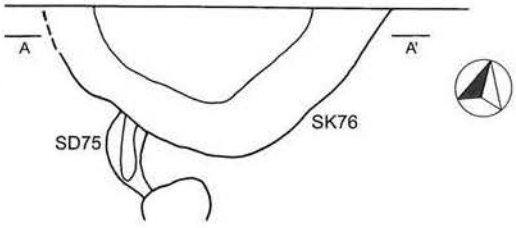


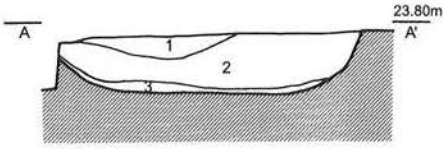


SE145
1　黒色粘土：
　ソフト。粘性非常に強い。
　腐植物を多く含む。
2　黒褐色粘土：
　ソフト。粘性非常に強い。
3　黒色粘土：
　ソフト。粘性非常に強い。
　緑灰色粘土を多く含む。
4　黒色粘土：
　ソフト。粘性非常に強い。
　緑灰色粘土を多く含む。
5　黒色粘土：
　ソフト。粘性強い。
　腐植物を多く含む。



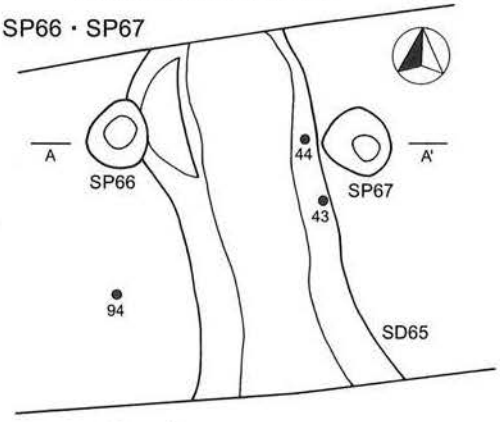
SK76

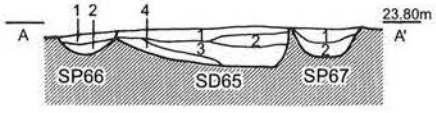




SK76
1　黒色粘土：しまりあり。粘性強い。5㎜木炭を少量含む。
2　黒褐色粘土：しまりあり。粘性強い。5㎜木炭を少量含む。
3　暗緑灰色粘土：しまりあり。粘性あり。やや砂質。

SD65・SP66・SP67



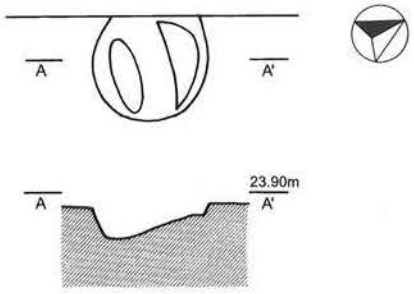


SP66
1　暗赤灰色粘土：
　しまりあり。粘性弱い。
　木炭粒を極少量含む。
2　暗灰色砂質土：
　しまりあり。粘性弱い。

SD65
1　暗赤灰色粘土：
　しまりあり。粘性弱い。
　木炭粒を極少量含む。
2　灰色砂質土：
　しまりあり。粘性弱い。
3　暗赤灰色粘土：
　しまりあり。粘性強い。
4　褐灰色粘土：
　しまりあり。粘性強い。

SP67
1　黒褐色粘土：
　ソフト。粘性強い。
2　暗灰色砂質粘土：
　ややソフト。粘性強い。

SK106

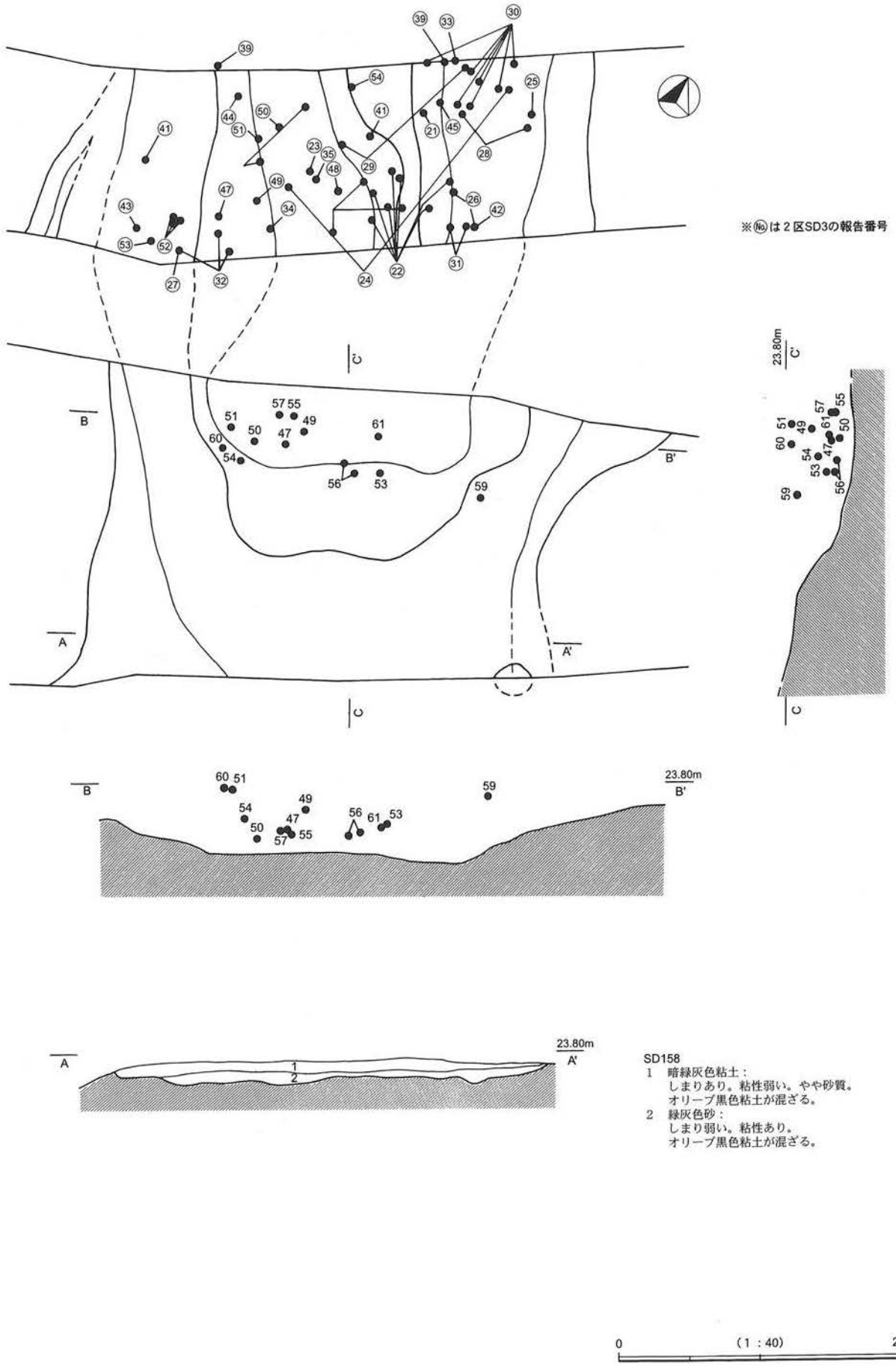


0　(1：40)　2m

遺構個別図 3

図版10

SD158

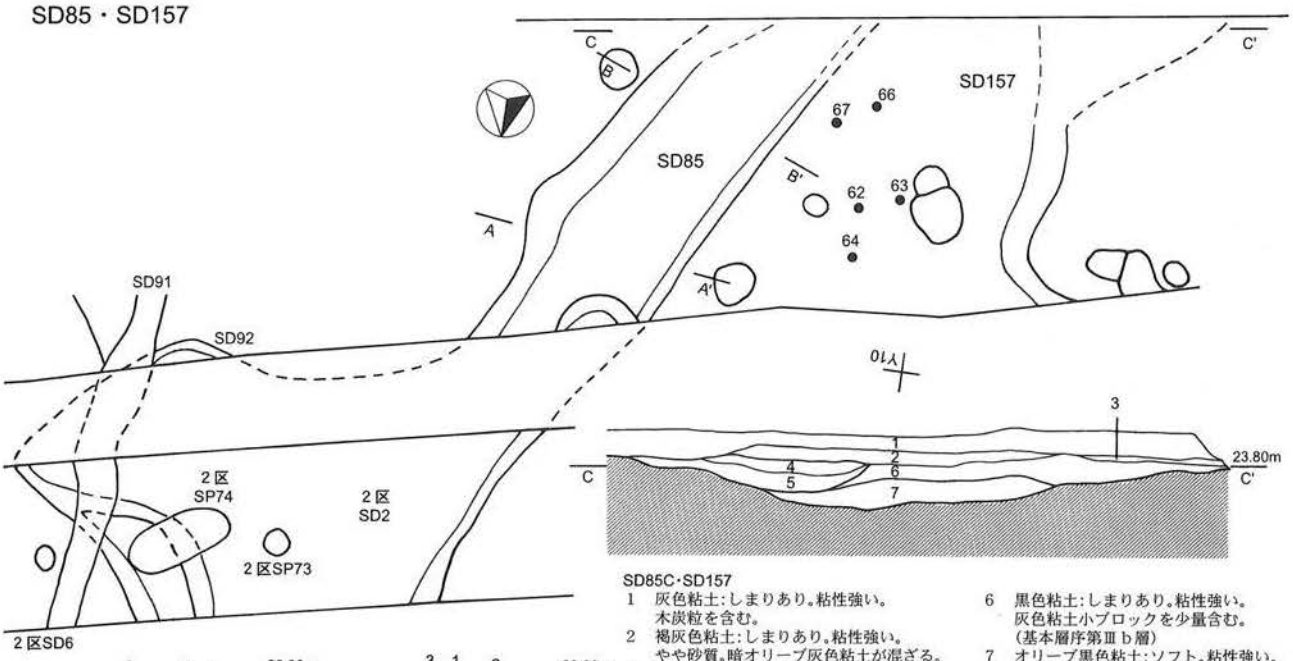


SD158
1　暗緑灰色粘土：
　　しまりあり。粘性弱い。やや砂質。
　　オリーブ黒色粘土が混ざる。
2　緑灰色砂：
　　しまり弱い。粘性あり。
　　オリーブ黒色粘土が混ざる。

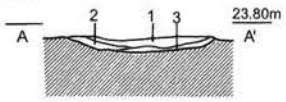
0　(1：40)　2m

遺構個別図４

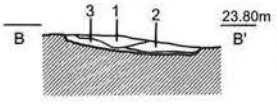
SD85・SD157



SD85C・SD157
1 灰色粘土:しまりあり。粘性強い。
木炭粒を含む。
2 褐灰色粘土:しまりあり。粘性強い。
やや砂質。暗オリーブ灰色粘土が混ざる。
3 灰色粘土:しまりあり。粘性あり。
4 黒褐色粘土:しまりあり。粘性あり。(SD85)
5 黒褐色粘土:しまりあり。粘性強い。(SD85)
6 黒色粘土:しまりあり。粘性強い。
灰色粘土小ブロックを少量含む。
(基本層序第Ⅲb層)
7 オリーブ黒色粘土:ソフト。粘性強い。
3㎜木炭粒を少量含む。緑灰色粘土
小ブロックを極少量含む。(SD157)

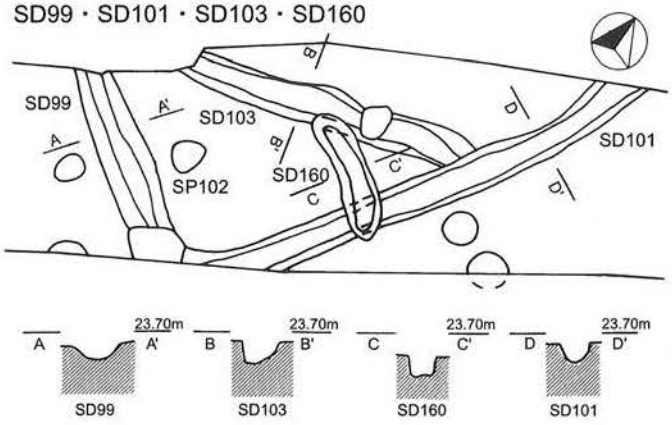


SD85A
1 黒褐色粘土:
しまりあり。粘性弱い。
2 褐灰色粘土:
しまりあり。粘性強い。
3 暗緑灰色粘土:
しまりあり。粘性強い。やや砂質。

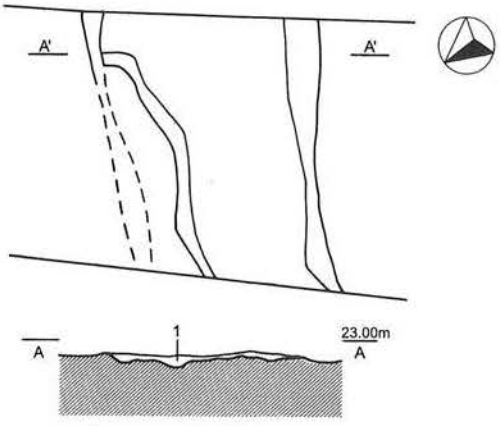


SD85B
1 黒褐色粘土:
しまりあり。粘性弱い。
2 褐灰色粘土:
しまりあり。粘性強い。
3 暗緑灰色粘土:
しまりなし。粘性強い。
やや砂質。

SD99・SD101・SD103・SD160

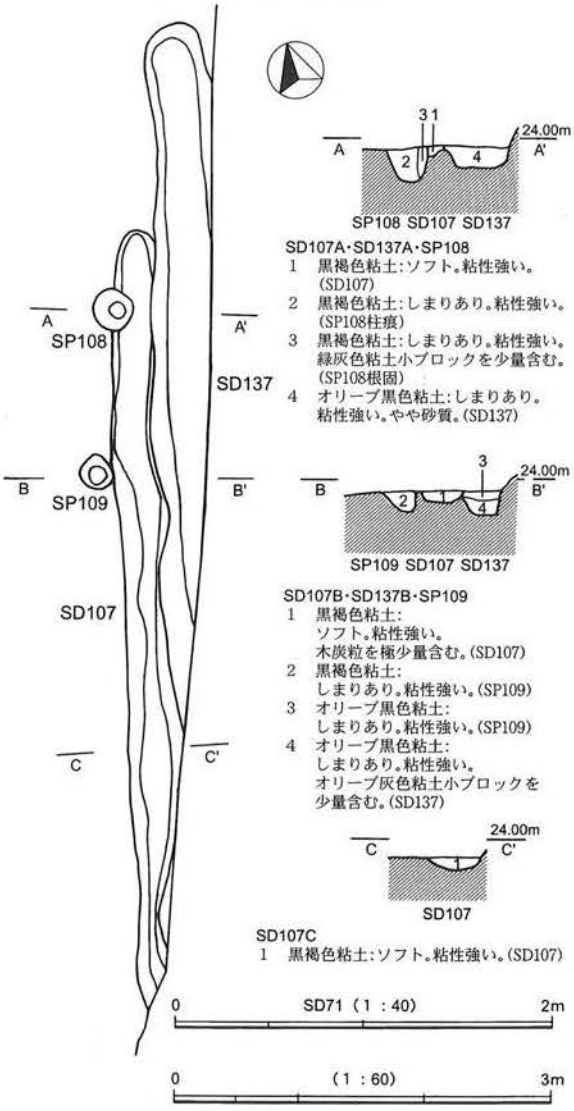


SD71



SD71
1 黄灰色粘土:しまりあり。粘性強い。
緑灰色粘土小ブロックを少量含む。

SD107・SD137・SP108・SP109



SD107A・SD137A・SP108
1 黒褐色粘土:ソフト。粘性強い。
(SD107)
2 黒褐色粘土:しまりあり。粘性強い。
(SP108柱痕)
3 黒褐色粘土:しまりあり。粘性強い。
緑灰色粘土小ブロックを少量含む。
(SP108根固)
4 オリーブ黒色粘土:しまりあり。
粘性強い。やや砂質。(SD137)

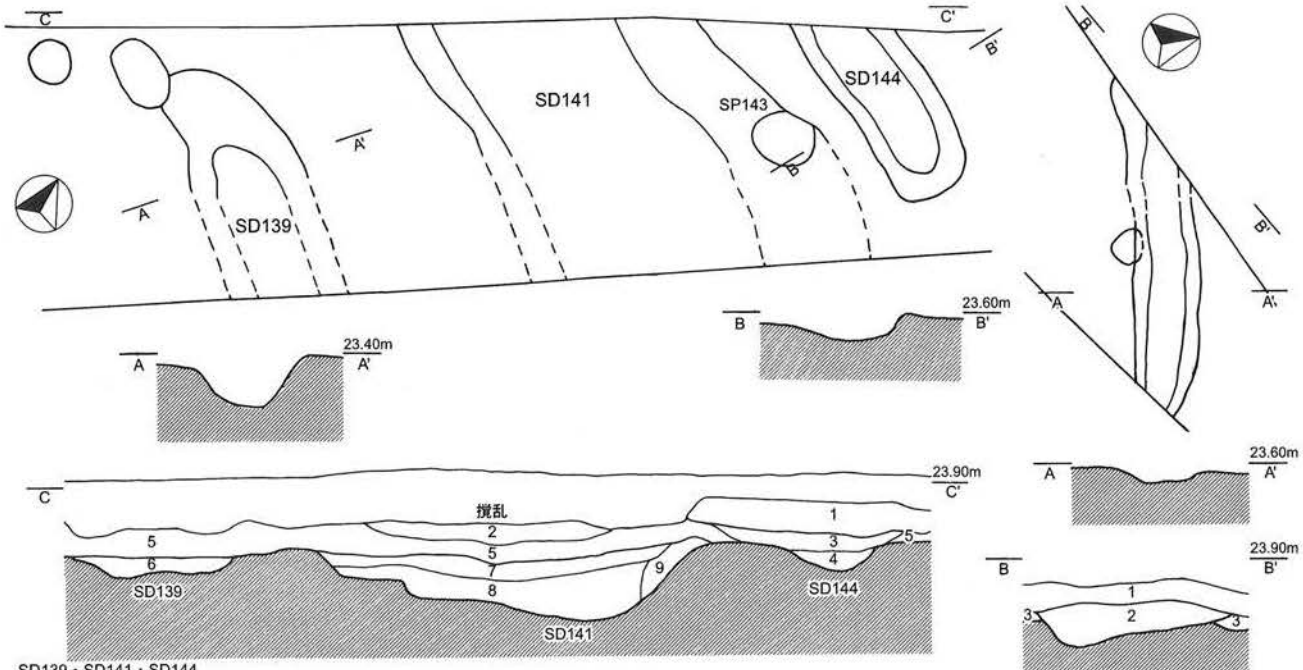
SD107B・SD137B・SP109
1 黒褐色粘土:
ソフト。粘性強い。
木炭粒を極少量含む。(SD107)
2 黒褐色粘土:
しまりあり。粘性強い。(SP109)
3 オリーブ黒色粘土:
しまりあり。粘性強い。(SP109)
4 オリーブ黒色粘土:
しまりあり。粘性強い。
オリーブ灰色粘土小ブロックを
少量含む。(SD137)

SD107C
1 黒褐色粘土:ソフト。粘性強い。(SD107)

遺構個別図5

図版12

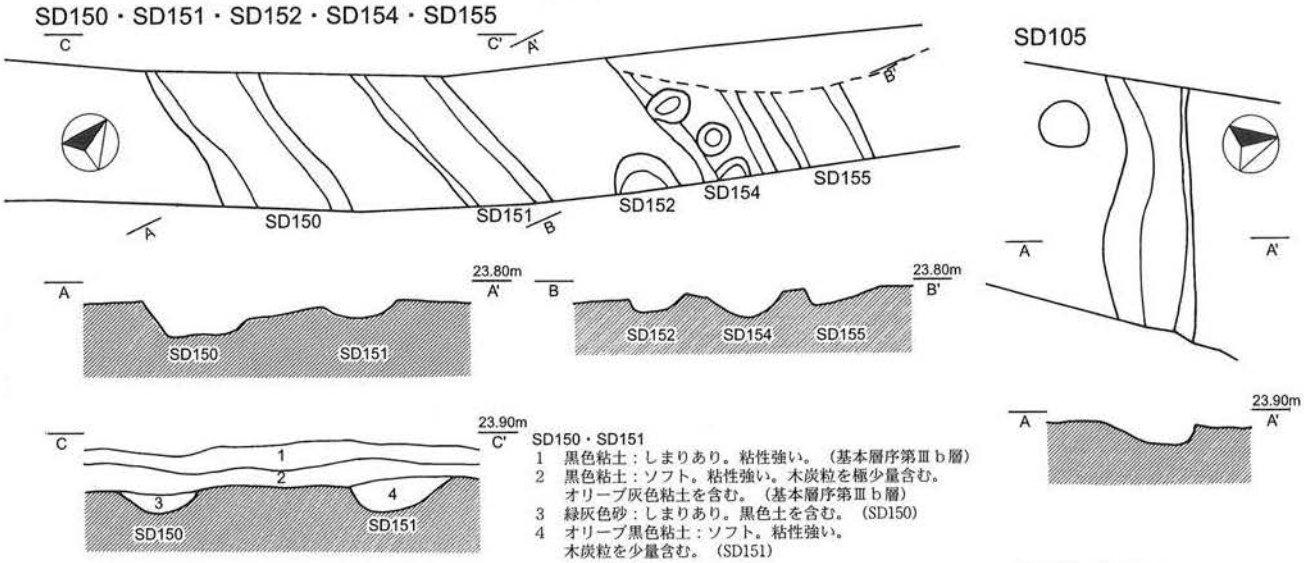
SD139・SD141・SD144



SD139・SD141・SD144
1　黒色粘土：しまりあり。粘性強い。
2　黄灰色粘土：しまり強い。粘性あり。
3　黒色粘土：ソフト。粘性強い。
　　オリーブ粘土を少量含む。（SD144）
4　灰色砂：しまりなし。粘性あり。
　　オリーブ灰色粘土を少量含む。（SD144）
5　オリーブ黒色粘土：しまり弱い。粘性あり。
　　黒色粘土が混ざる。（基本層序第Ⅲｂ層）
6　暗緑灰色粘土：ソフト。粘性弱い。（SD139）
7　灰色砂質土：しまり強い。粘性あり。（SD141）
8　黄灰色粘土：しまりあり。粘性強い。
　　木炭粒を極少量含む。（SD141）
9　緑灰色粘土：ソフト。粘性あり。
　　黒褐色粘土が混ざる。（SD141）

SD147
1　黒色粘土：しまりあり。粘性強い。（基本層序第Ⅲｂ層）
2　灰色粘土：ややソフト。粘性強い。（SD147）
3　黒色粘土：ソフト。粘性強い。木炭粒を含む。
　　オリーブ黒色粘土が混ざる。（基本層序第Ⅲｂ層）

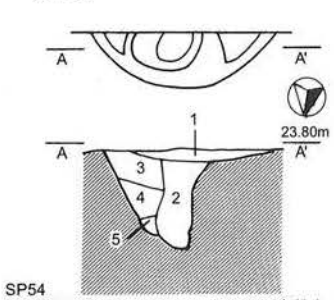
SD150・SD151・SD152・SD154・SD155



SD150・SD151
1　黒色粘土：しまりあり。粘性強い。（基本層序第Ⅲｂ層）
2　黒色粘土：ソフト。粘性強い。木炭粒を極少量含む。
　　オリーブ灰色粘土を含む。（基本層序第Ⅲｂ層）
3　緑灰色砂：しまりあり。黒色土を含む。（SD150）
4　オリーブ黒色粘土：ソフト。粘性強い。
　　木炭粒を少量含む。（SD151）

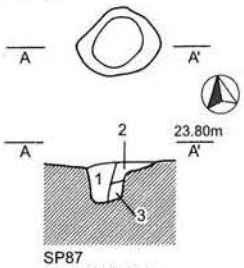
SD105

SP54



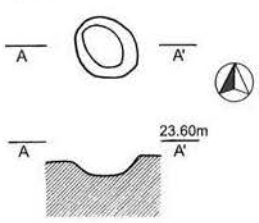
SP54
1　褐灰色粘土：
　　しまり強い。粘性弱い。
2　黒褐色粘土：
　　しまり強い。粘性弱い。
　　（柱痕）
3　黒褐色粘土：
　　しまり強い。粘性弱い。
　　緑灰色小ブロックを
　　少量含む。（根固）
4　緑灰色粘土：
　　しまり強い。粘性強い。
　　黒褐色粘土が混ざる。
　　（根固）
5　黒褐色粘土：
　　しまり強い。粘性強い。
　　緑灰色粘土小ブロックを
　　多量含む。（根固）

SP87

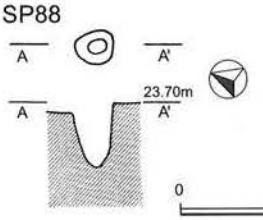


SP87
1　黒褐色粘土：
　　しまりあり。粘性強い。（柱痕）
2　黒褐色粘土：
　　しまりあり。粘性強い。（根固）
3　緑灰色粘土：
　　しまりあり。粘性強い。
　　黒褐色粘土が混ざる。（根固）

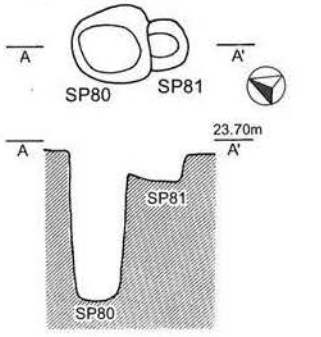
SP15



SP88

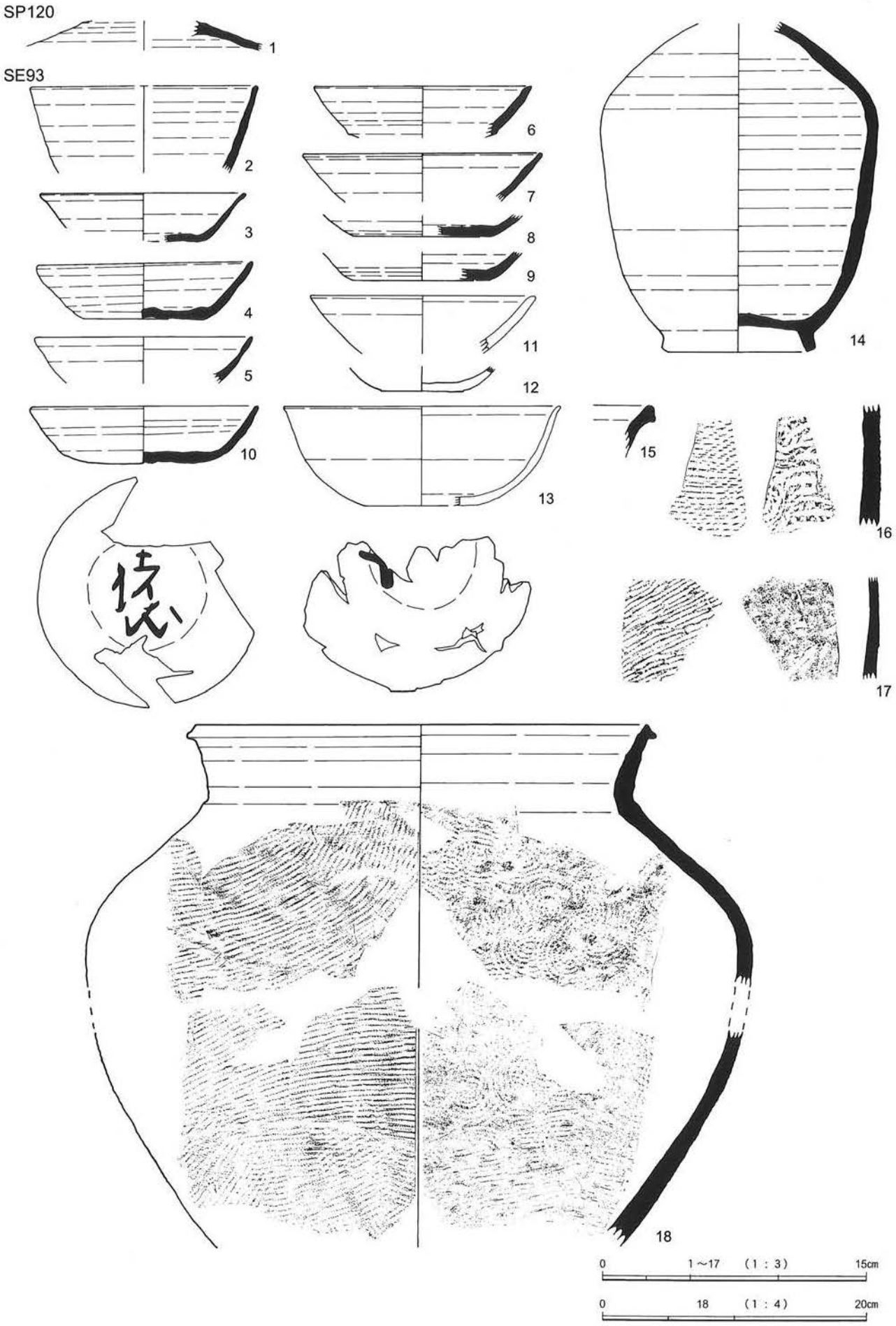


SP80・SP81

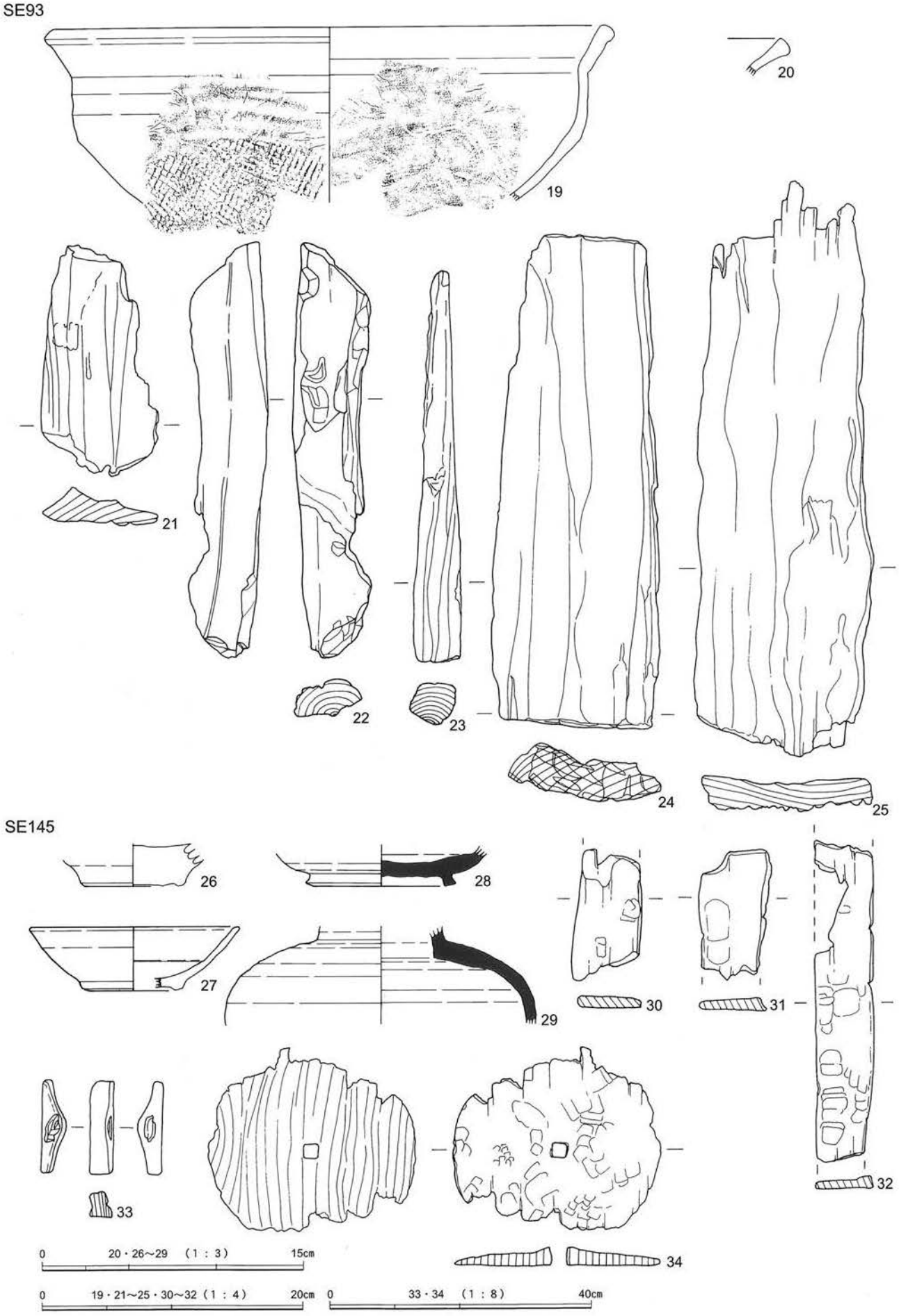


0　（1：40）　2m

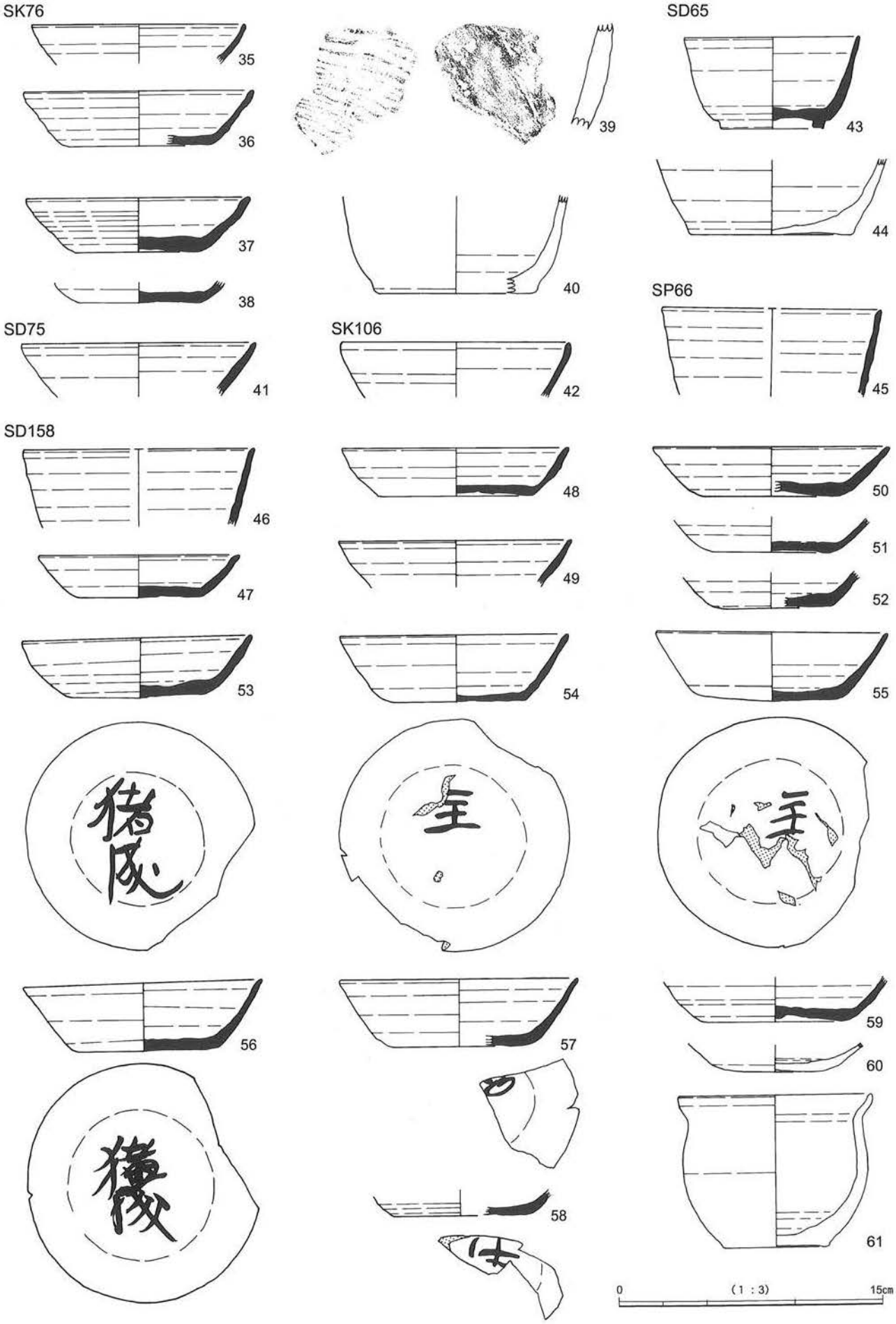
遺構個別図 6


SP120
SE93
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0
1～17 (1：3)
15cm
0
18 (1：4)
20cm

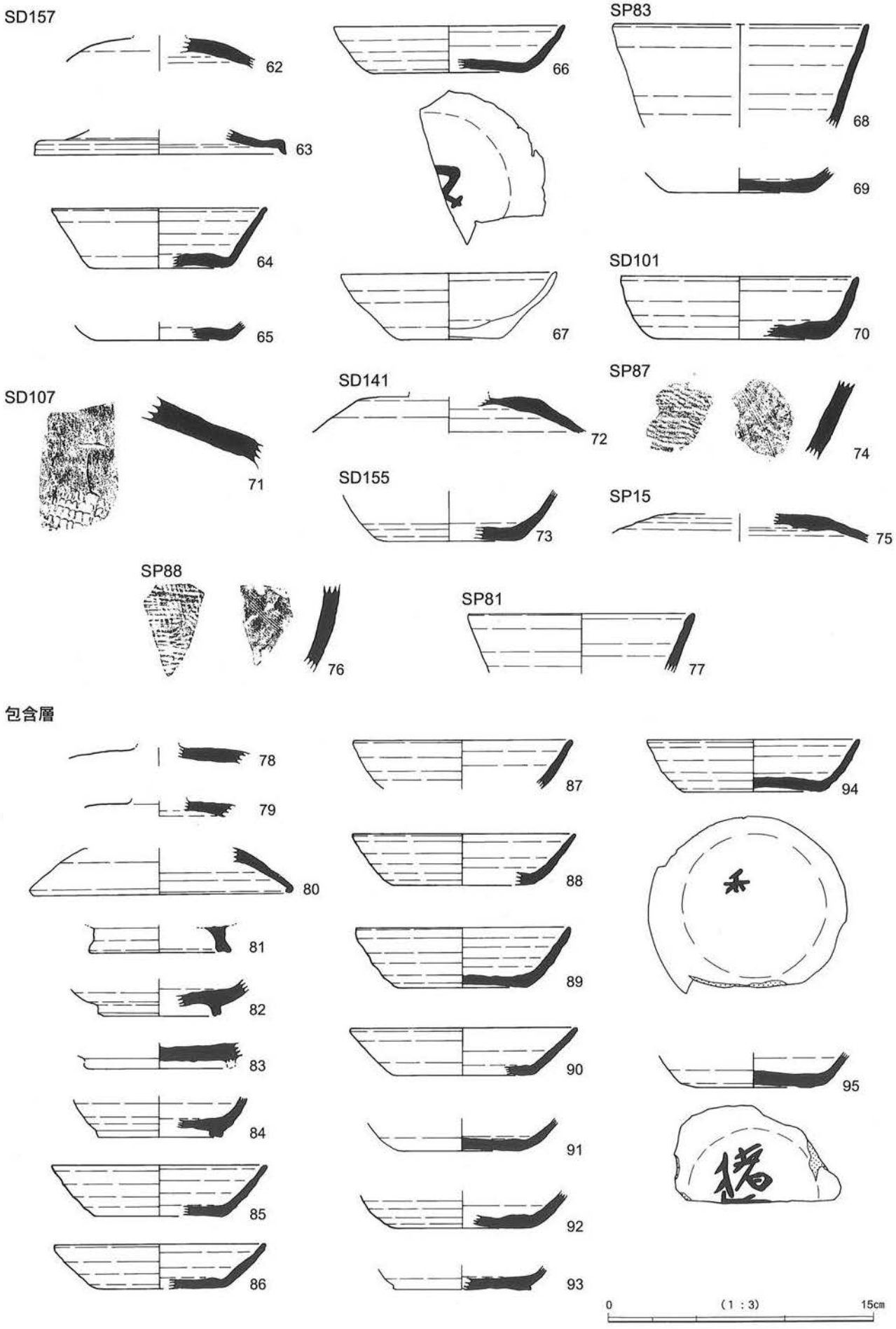
遺物実測図1


SE93
19
20
21
22
23
24
25
SE145
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0 20・26～29 (1：3) 15cm
0 19・21～25・30～32 (1：4) 20cm
0 33・34 (1：8) 40cm

遺物実測図２

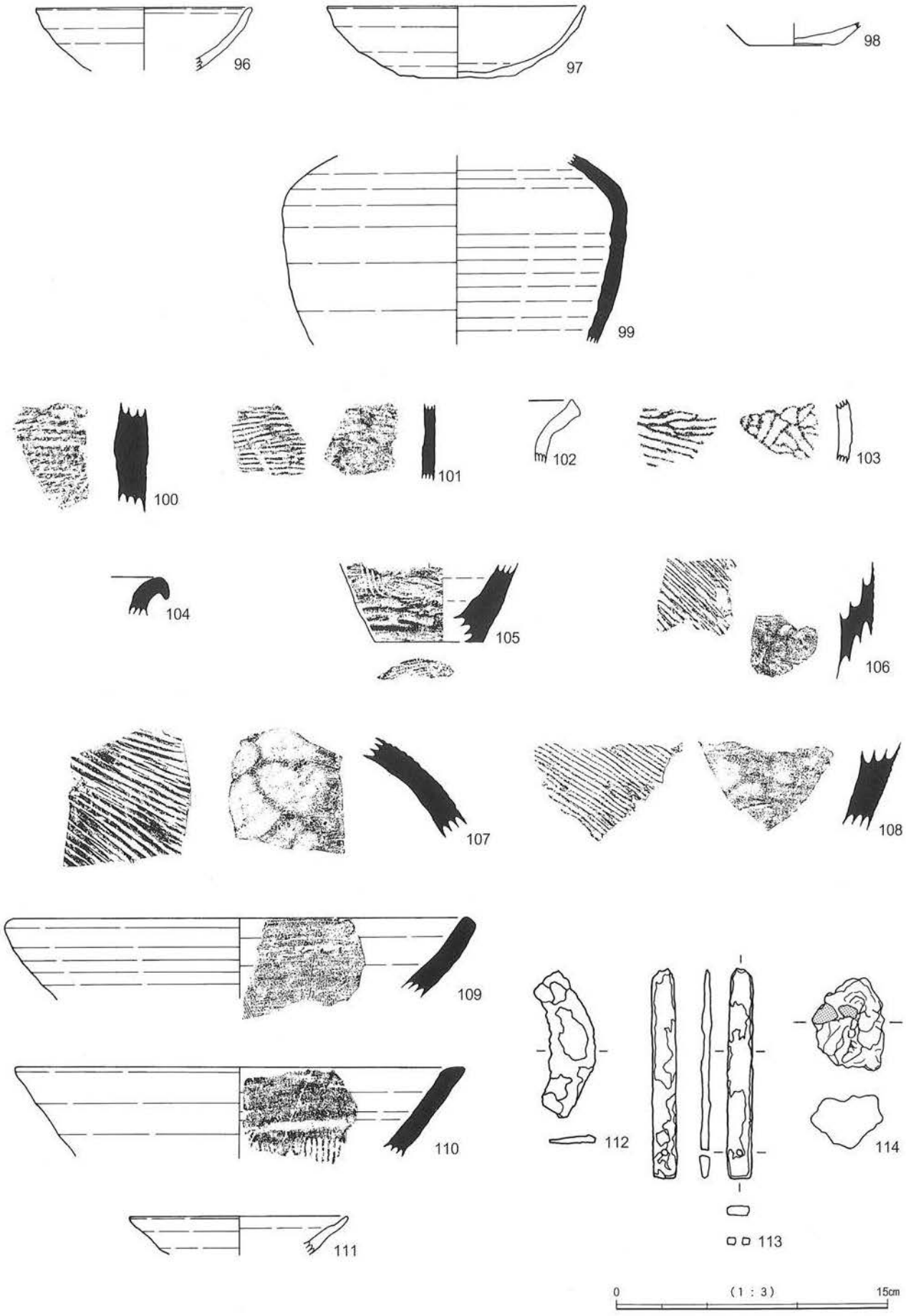

SK76
35
36
37
38
39
40
SD65
43
44
SD75
41
SK106
42
SP66
45
SD158
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
0
(1 : 3)
15cm

遺物実測図 3


SD157
62
63
64
65
66
67
SP83
68
69
SD101
70
SD107
71
SD141
72
SP87
74
SD155
73
SP15
75
SP88
76
SP81
77
包含層
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
0
(1：3)
15cm

遺物実測図４

包含層

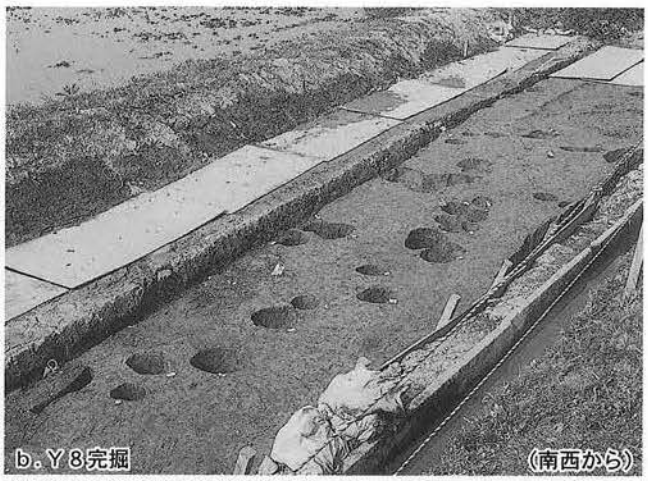

96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
0
(1 : 3)
15cm

遺物実測図 5

図版18

坂田遺跡周辺空中写真〔国土画像情報（カラー写真）国土交通省　昭和50年度撮影〕

a. 調査前全景 (北から)

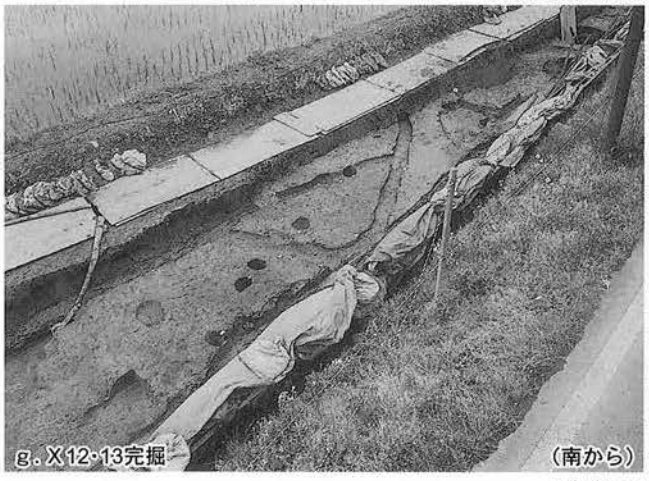

b. Y 8完掘 (南西から)

c. Y 8 完掘 (北西から)

d. Y 9・10完掘 (西から)

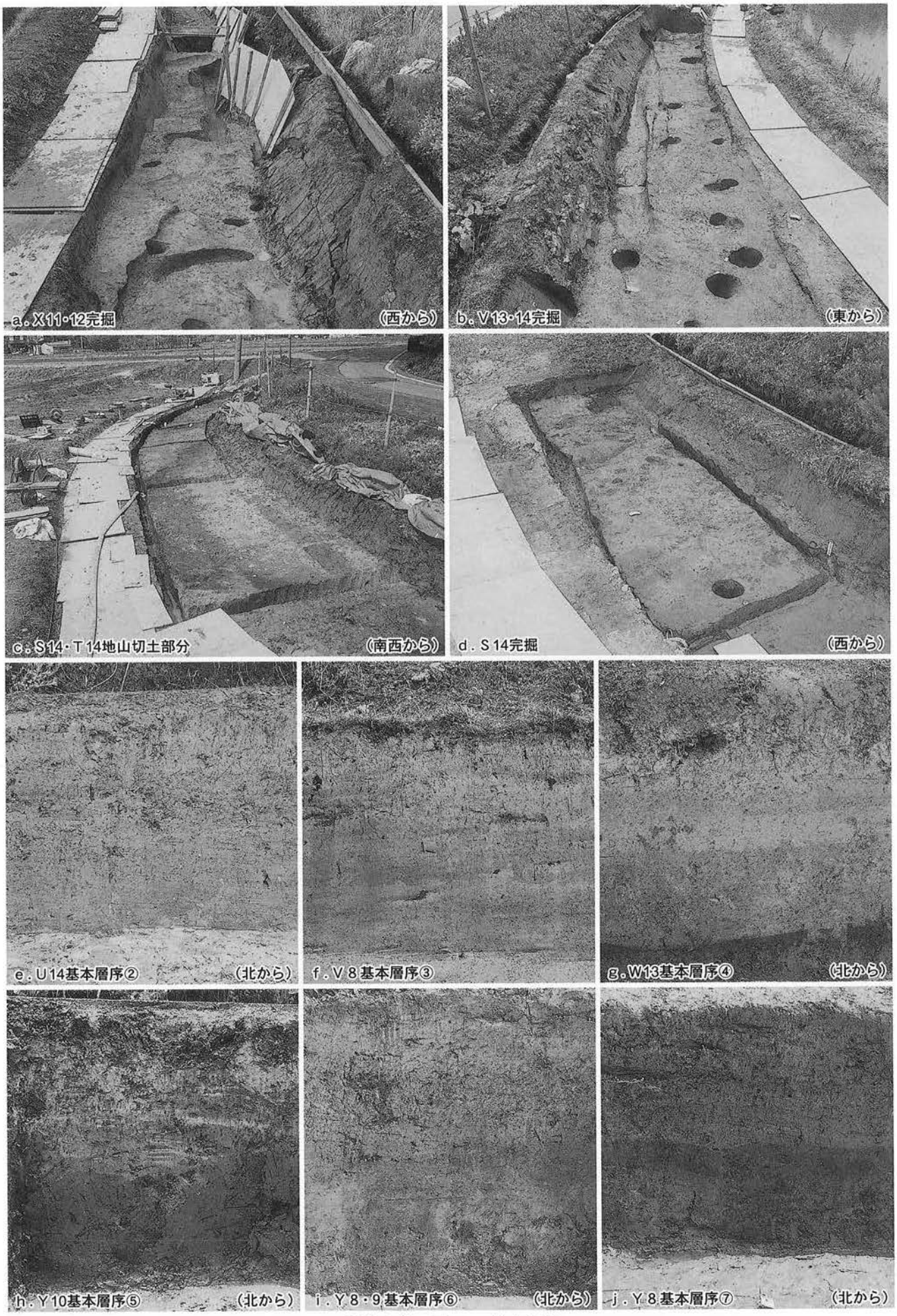
e. SD157完掘 (北から)

f. Y 9・10完掘 (東から)


g. X12・13完掘 (南から)

h. SD150～SD155完掘 (南東から)

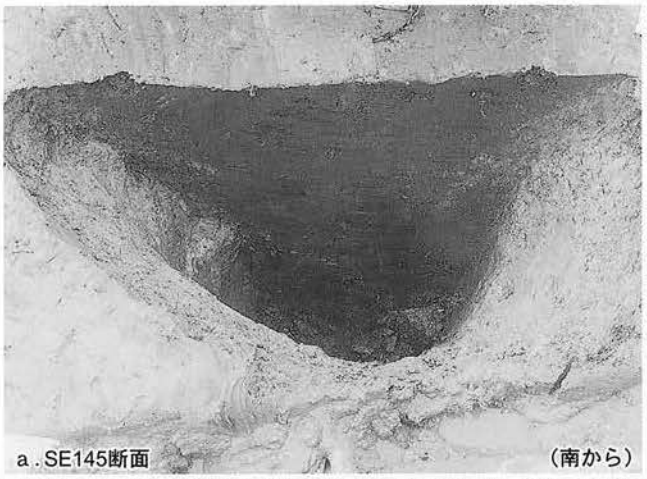
遺構完掘写真 1



遺構完掘写真２・基本層序

a．SE93遺物出土状況
（北から）
b．SE93Ａ断面
（西から）
c．SE93木材出土状況
（南から）
d．SE93木材出土状況
（南から）
e．SE93完掘
（北から）
f．SE93Ｃ断面
（北から）
g．SE59断面
（北から）
h．SE59完掘
（南から）

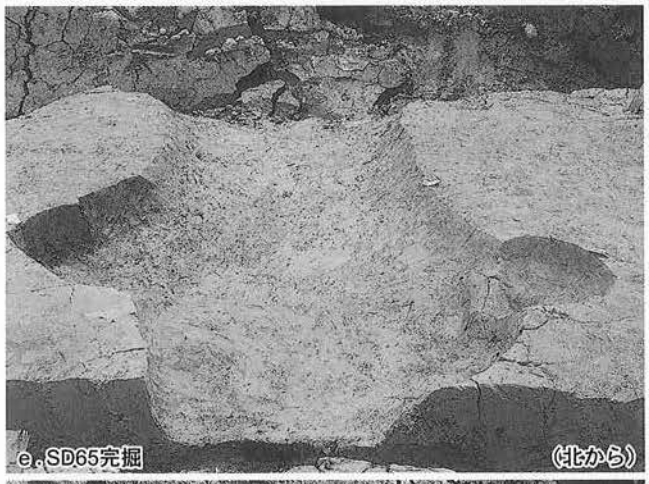
遺構個別写真１


a．SE145断面　（南から）

b．SE145完掘　（北から）

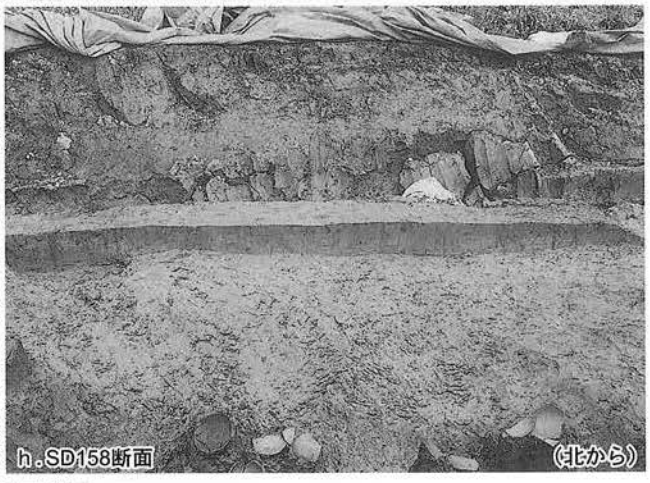
c．SD65遺物出土状況　（北西から）

d．SD65断面　（南から）

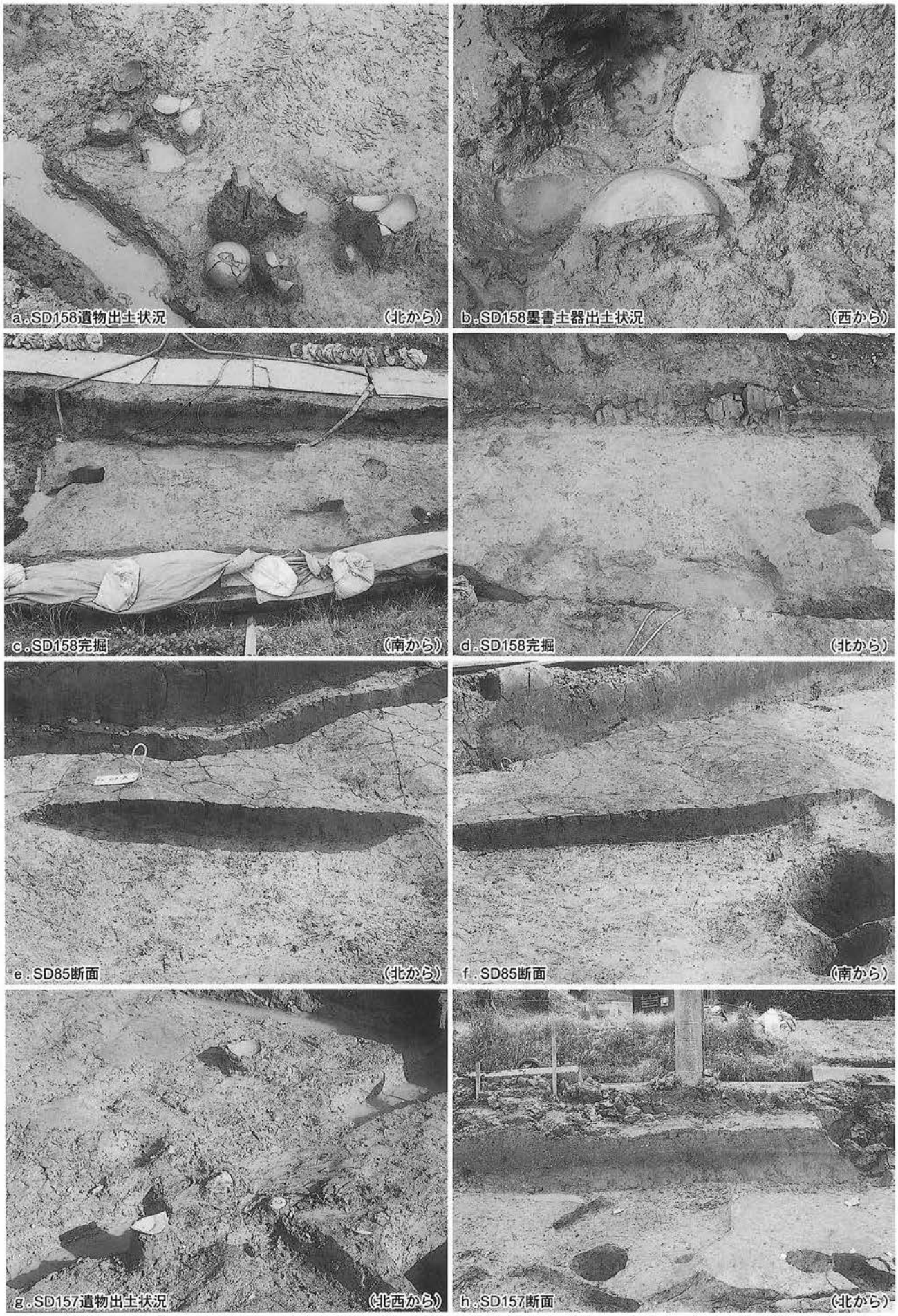

e．SD65完掘　（北から）

f．SK76断面　（北から）

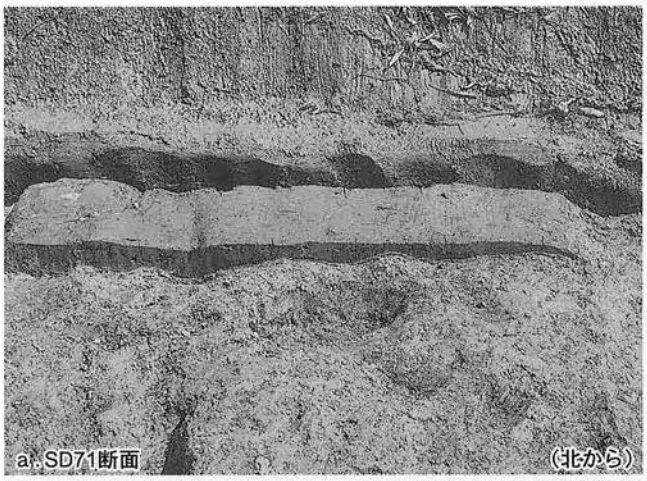
g．SD65・SK76完掘　（北から）


h．SD158断面　（北から）

遺構個別写真２

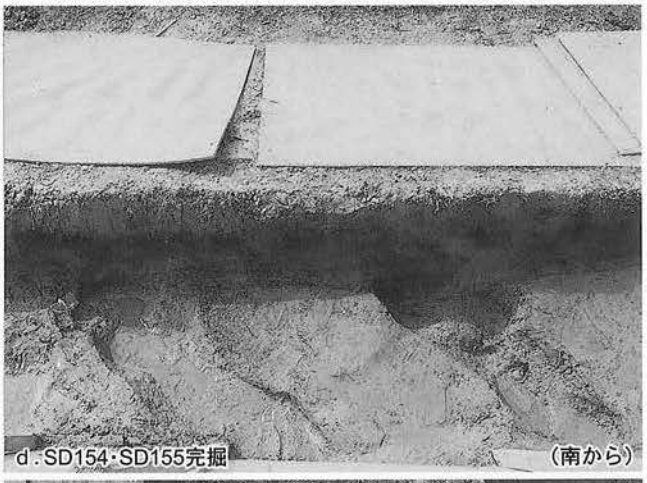

a.SD158遺物出土状況
(北から)
b.SD158墨書土器出土状況
(西から)
c.SD158完掘
(南から)
d.SD158完掘
(北から)
e.SD85断面
(北から)
f.SD85断面
(南から)
g.SD157遺物出土状況
(北西から)
h.SD157断面
(北から)

遺構個別写真 3


a.SD71断面 (北から)

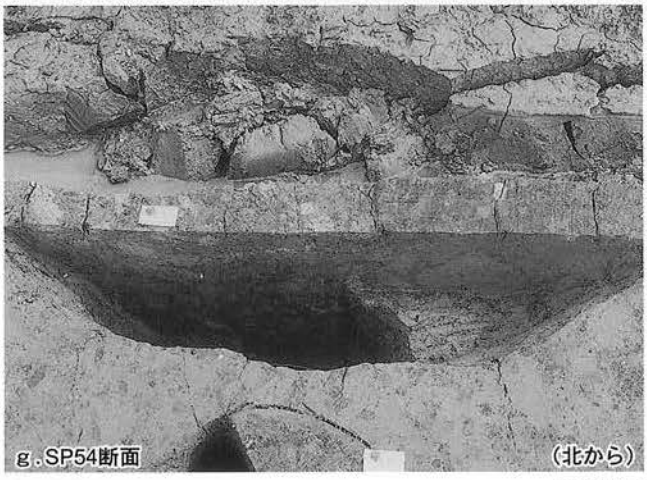
b.SD107断面 (東から)

c.SD137断面 (東から)


d.SD154・SD155完掘 (南から)

e.SD139・SD141・SD144完掘 (南から)

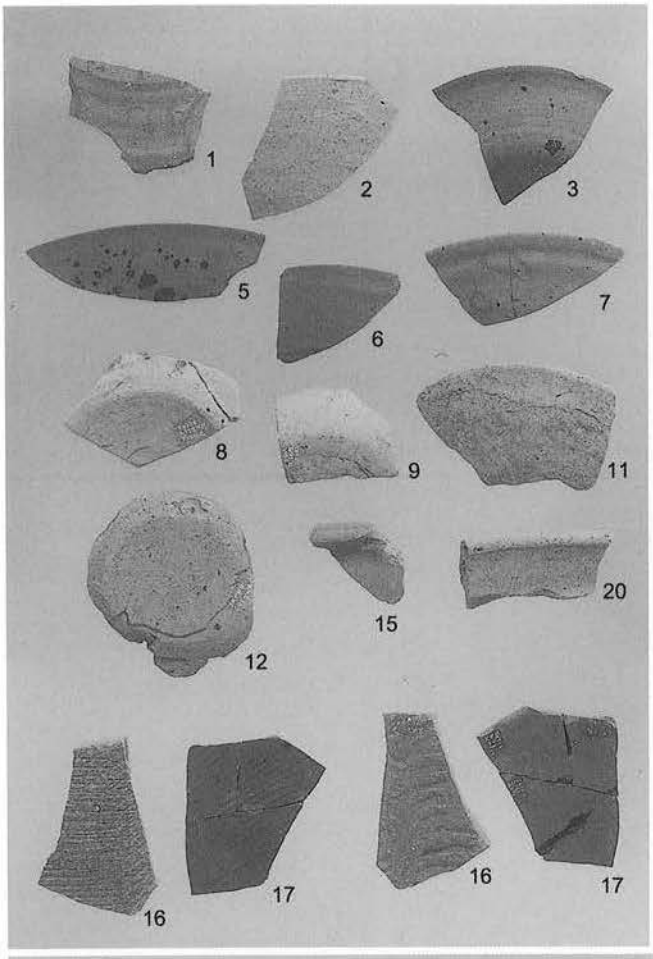
f.SD139・SD141・SD144完掘 (北から)

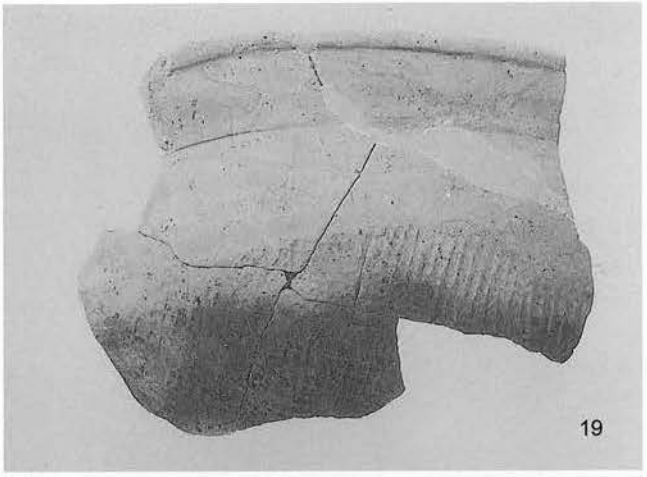

g.SP54断面 (北から)

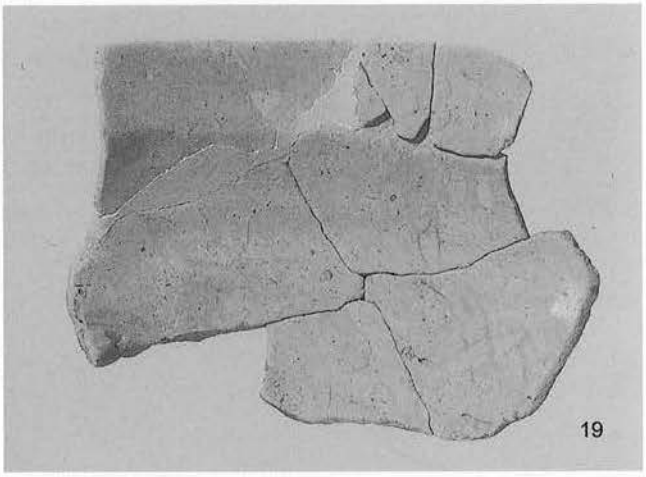
h.SP87断面 (南から)

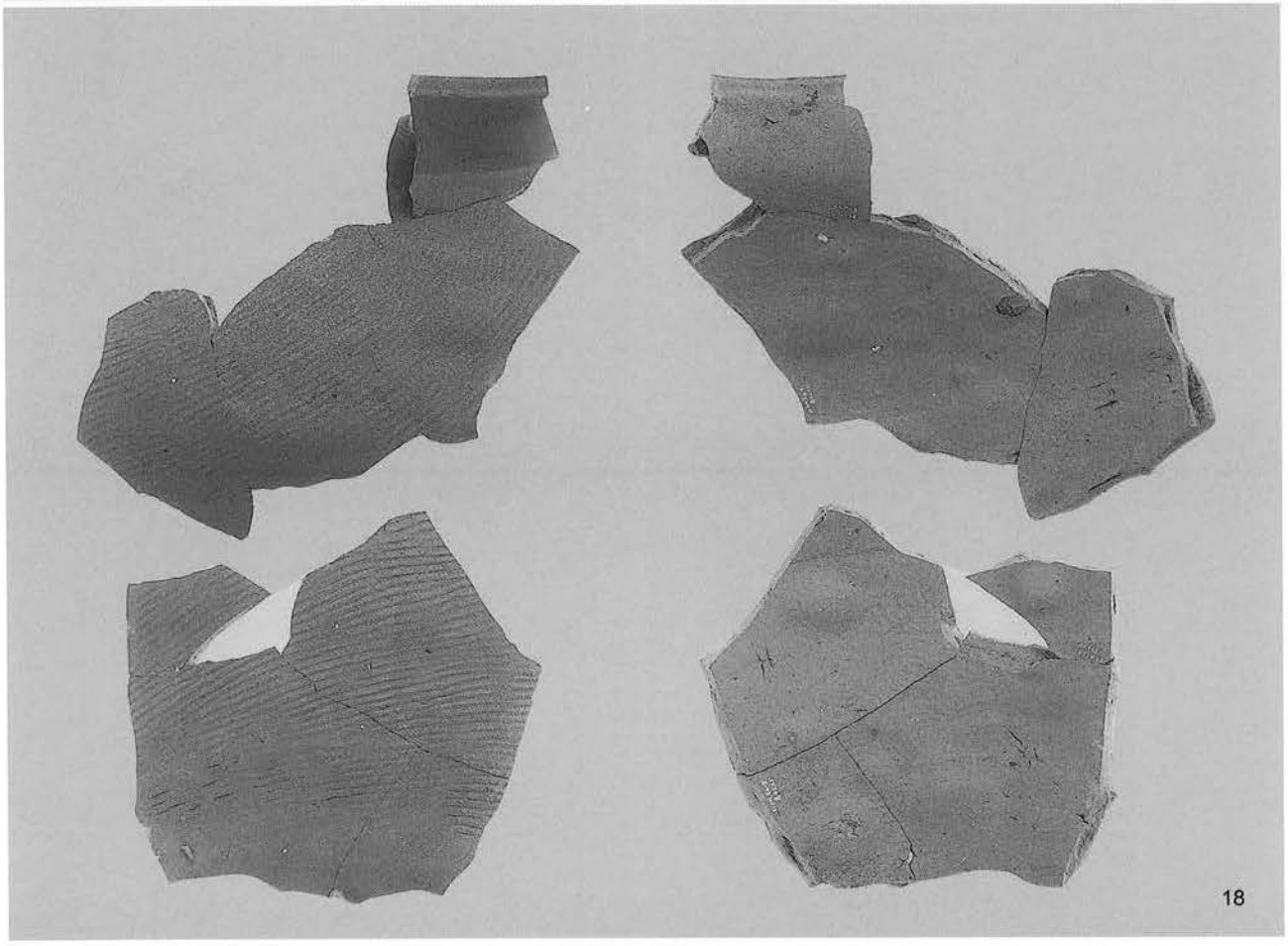
遺構個別写真 4

出土遺物写真１

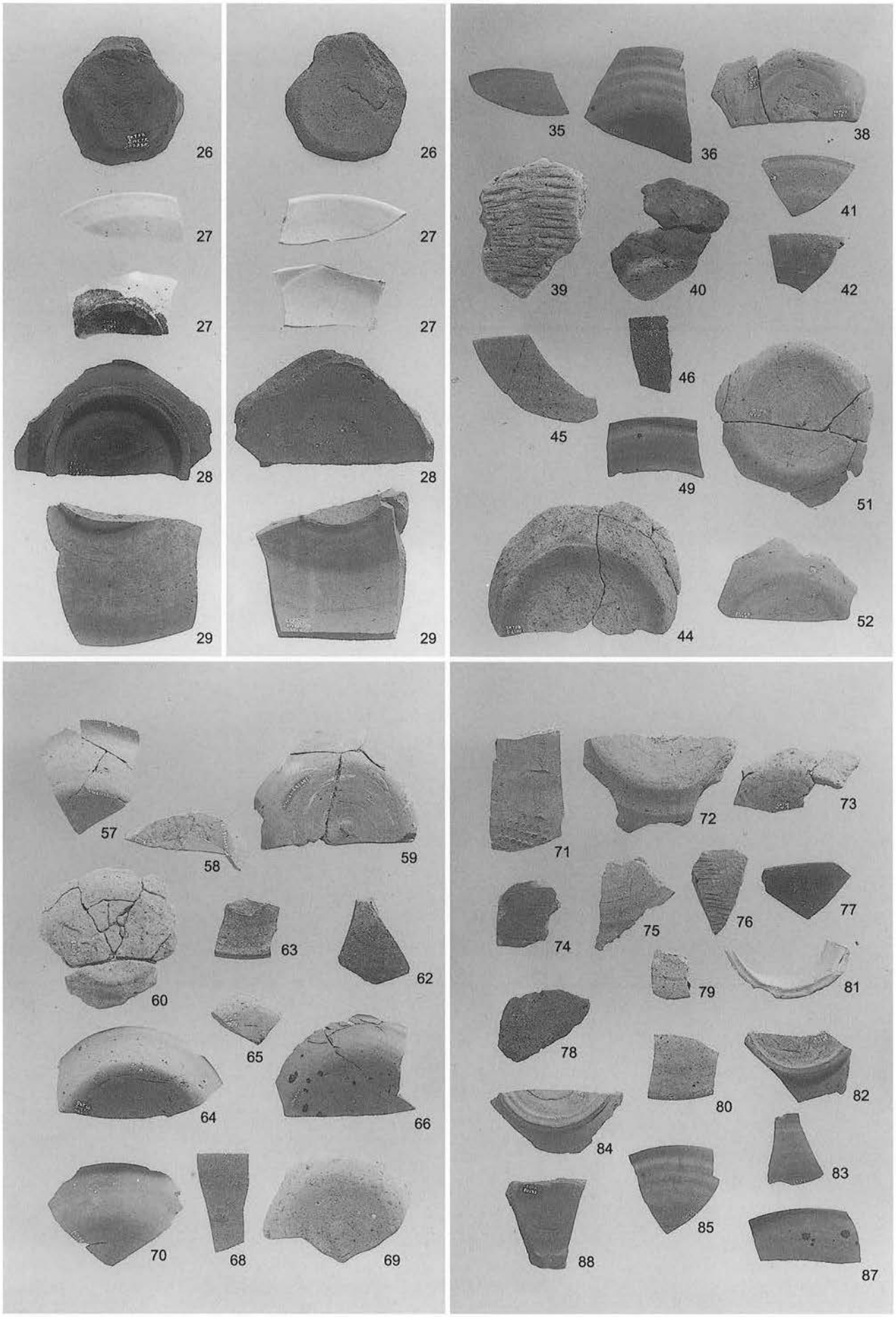




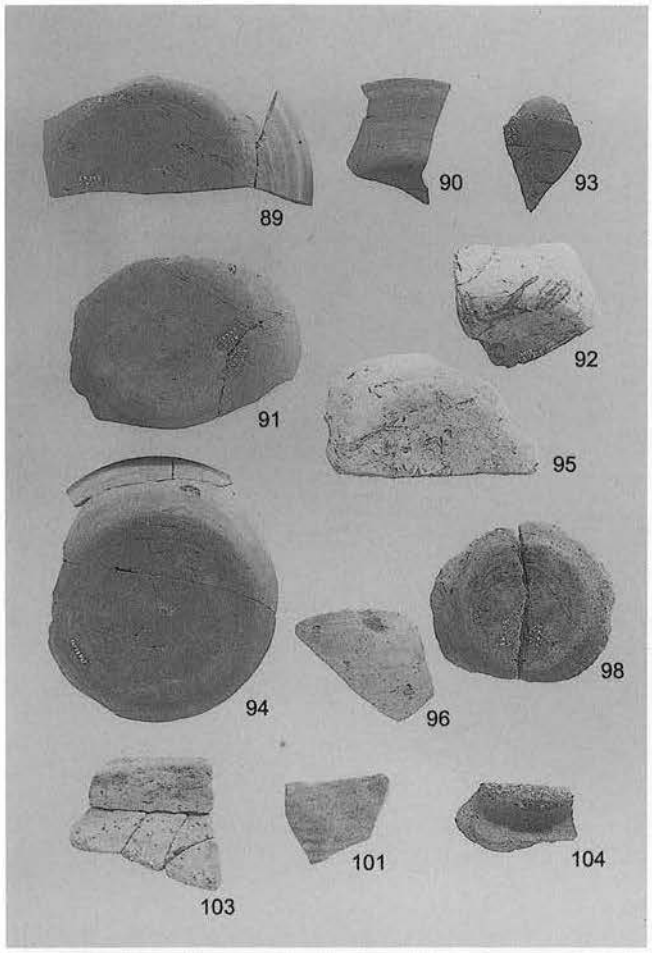


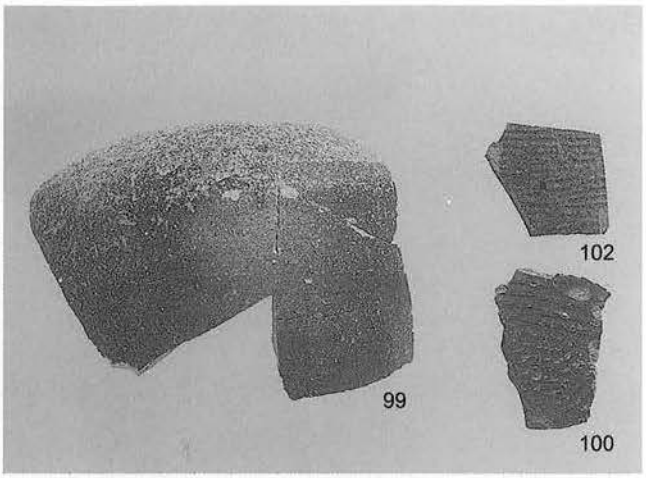


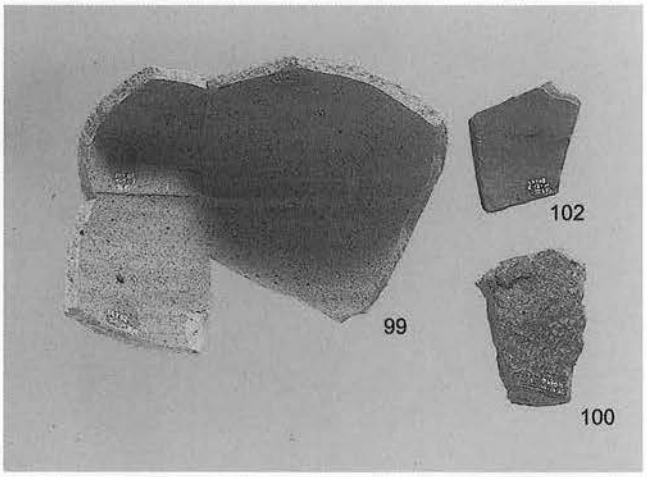
出土遺物写真２

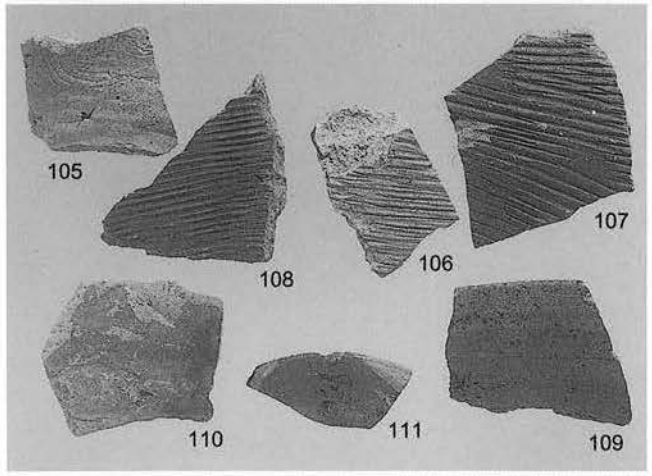

26
27
27
28
29
26
27
27
28
29
35
36
38
39
40
41
42
45
46
49
51
44
52
57
58
59
60
63
62
65
64
66
70
68
69
71
72
73
74
75
76
77
79
81
78
80
82
84
83
85
88
87

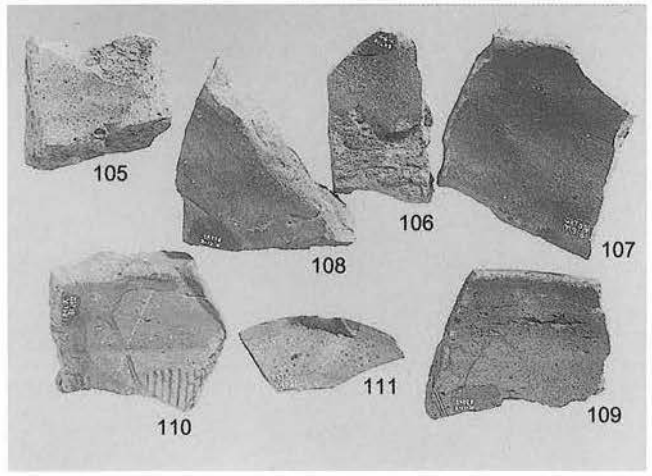
出土遺物写真 3

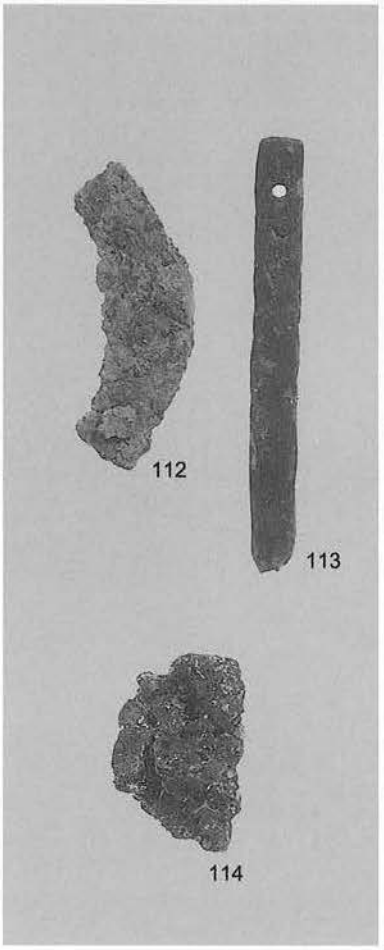

89
90
93
91
92
95
94
96
98
103
101
104

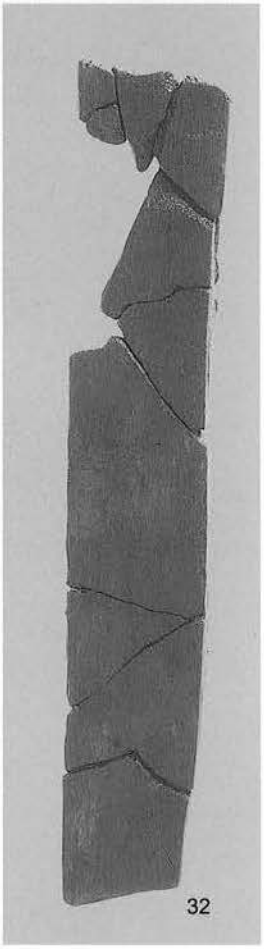

102
99
100


102
99
100

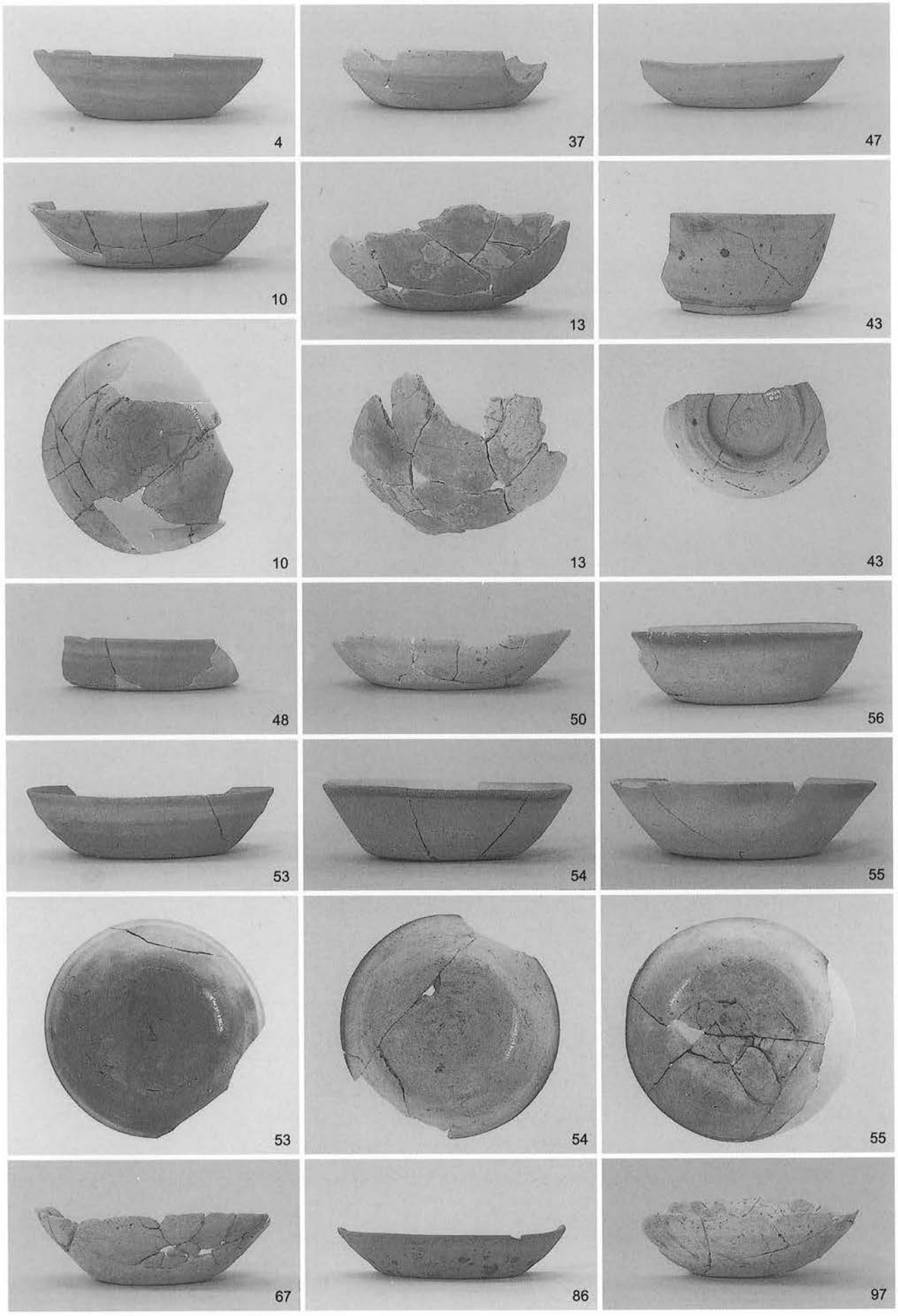

105
108
106
107
110
111
109


105
106
108
107
110
111
109

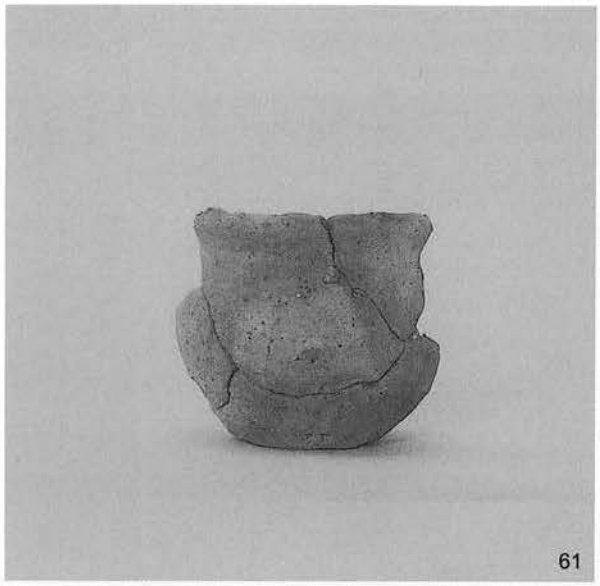

112
113
114

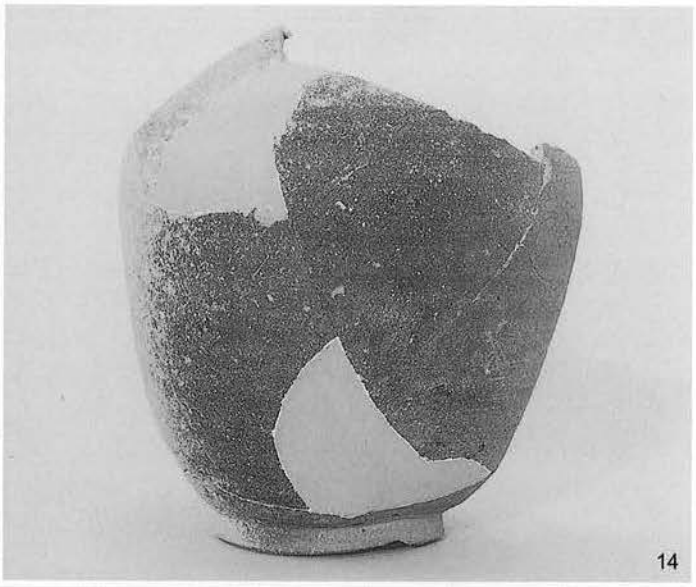

32

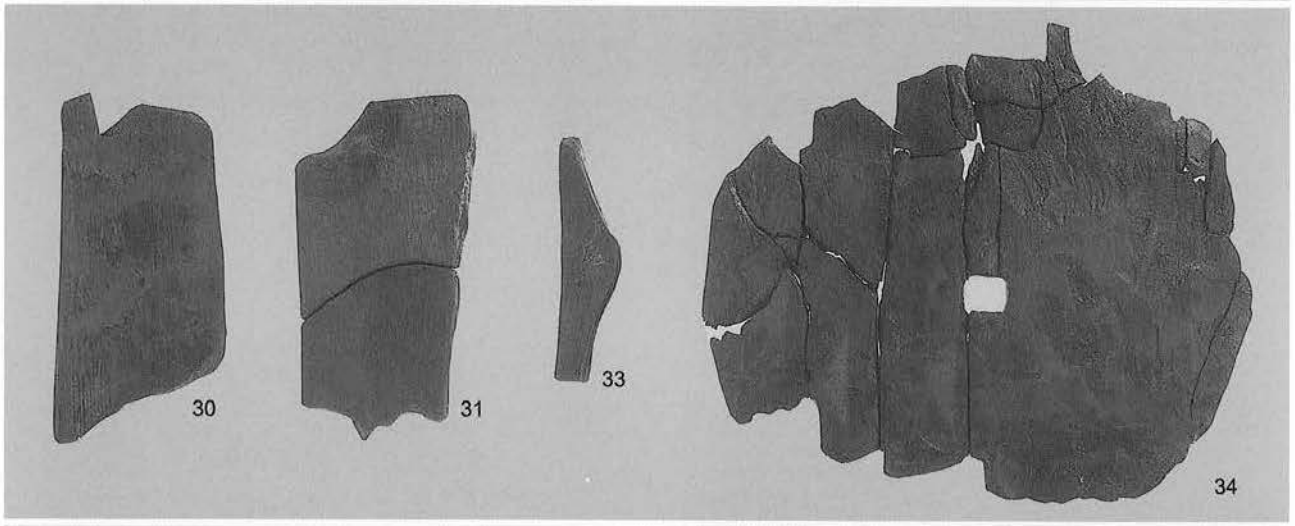
出土遺物写真４

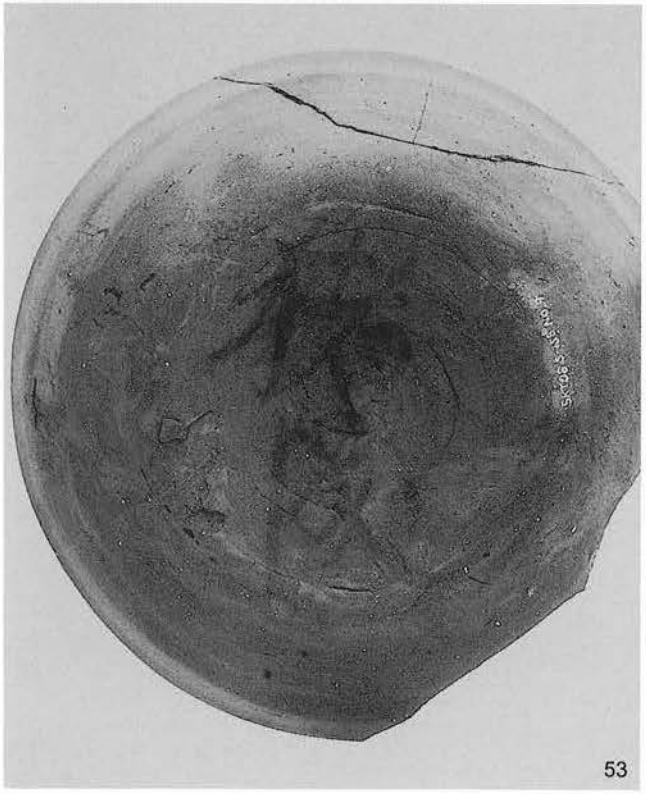


出土遺物写真５



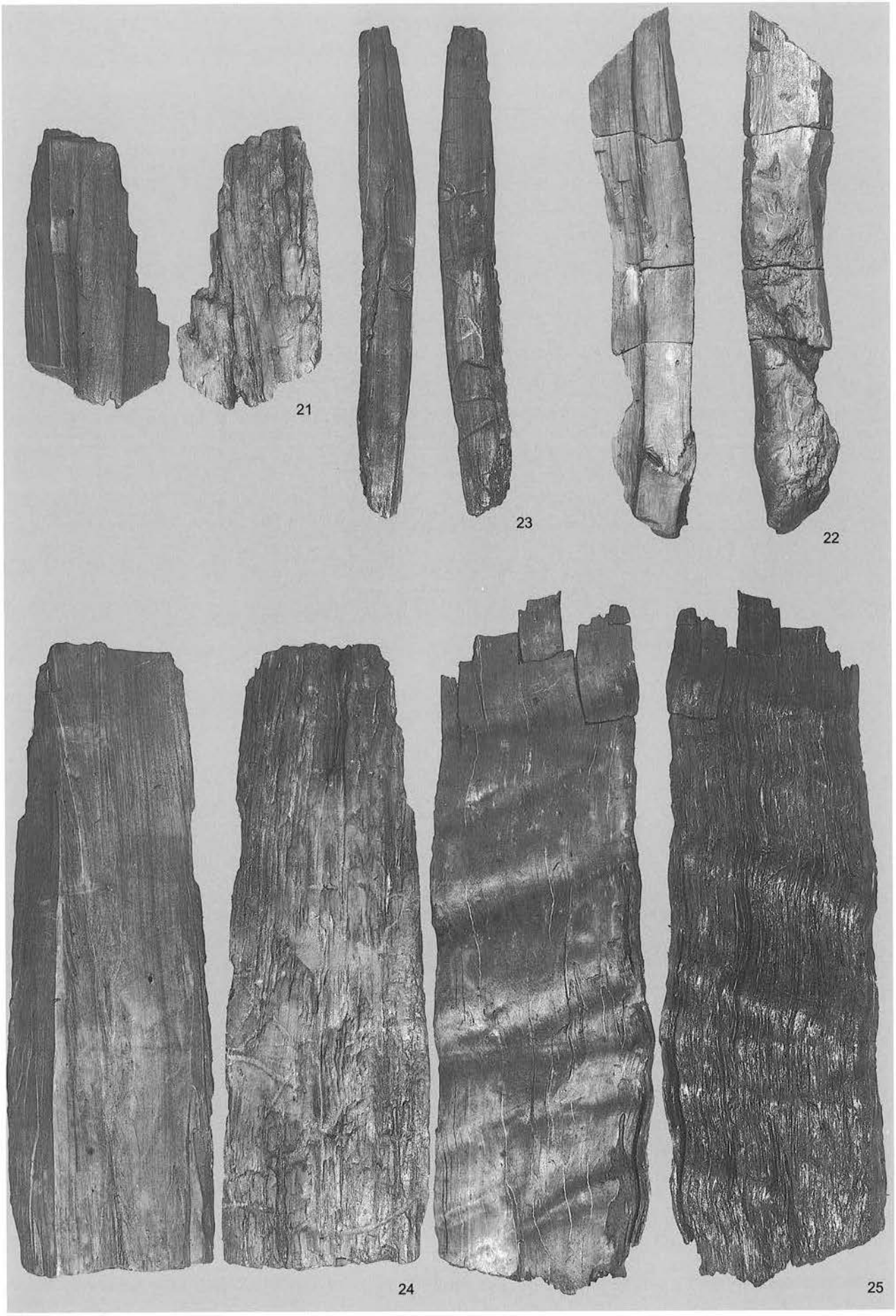






図版30

出土遺物写真 6



報告書抄録

ふりがな	さかた
書名	坂田
副書名	新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	中島義人・室星尚史・伊藤啓雄
編集機関	柏崎市教育委員会　教育総務課　柏崎市遺跡考古館
発行者	柏崎市教育委員会
所在地	〒945-8511　新潟県柏崎市中央町５－５０　TEL 0257－23－5111
発行年月日	西暦　２００９年３月10日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
坂田遺跡	新潟県柏崎市 西山町坂田字 蓬田他	15205	970	37度 26分 42秒	138度 39分 17秒	20080408 ～ 20080612	278	市道柏崎杉本線道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂田遺跡	集落跡	古代 中世	柱穴・溝・井戸・土坑	須恵器・土師器・珠洲焼 越前焼・白磁・鉄滓・鉄製品・木製品・近世陶磁器	

柏崎市埋蔵文化財発掘調査報告書　第56集

坂　田

－新潟県柏崎市西山町坂田・坂田遺跡発掘調査報告書－

平成21年２月27日　印刷

平成21年３月10日　発行

発 行　柏崎市教育委員会　　新潟県柏崎市中央町５－５０

編 集　柏崎市遺跡考古館　　新潟県柏崎市小倉町７－１８

印 刷　有限会社わかい印刷　　新潟県柏崎市田中１６－１５